

# 鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅵ

平成2年度

鹿児島大学埋蔵文化財調査室

1991年3月

## 序

平成2年度の鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅵをお届けする運びとなった。前年度の年報Ⅴにおける報告以後に、平成2年1月～3月（平成元年度）の間に試掘調査1件と立会調査11件、平成2年4月～平成3年1月の間に本調査2件と試掘調査2件並びに立会調査7件が行われている。前年度に続いて今年度も予算の都合で調査の着手が8月になり、その後の調査も時期がずれて年度末近くまで発掘調査が続いた。2件の本調査はいずれも調査期間が平成3年1月あるいはそれ以後にまで及んだため、その結果の報告は本年報には間に合わず、次年度の年報に回すことになった。

今年度の発掘調査で特筆すべきことは、伊敷地区の附属養護学校敷地内で初めて調査を行ったことであろう。施設整備計画の進展にともなって、埋蔵文化財調査室の活動範囲も次第に広がりつつある。

前報の序文でもご紹介したように、今年度は学内各位のご理解とご協力により調査体勢が強化され、それによって2件の本調査を並行して実施することができるようになった。また調査室発足以来の懸案であった調査室経費の見直しも、同様に各位のご理解、ご協力で実現できたことを感謝している。

我々の足元に眠る埋蔵遺跡・文化財も、6年間に及ぶ調査室の発掘調査、研究によって次第にその様相が明らかにされつつある。現在検討が進められている郡元キャンパスの長期将来計画の実現にも、埋蔵文化財の調査と対応は避けて通れない問題である。今後とも関係各位のご理解とご支援によって発掘調査が順調に進められ、本学の施設整備が進展することを願う次第である。

平成3年3月

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会  
委員長 難波直彦

# 例 言

1. 本年報は鹿児島大学構内において鹿児島大学埋蔵文化財調査室が平成2年2月1日から平成3年1月31日までにを行った調査活動の成果をまとめたものである。調査報告は平成元年度分（平成2年2～3月）を第Ⅰ部、平成2年度分（平成2年4月～平成3年1月）を第Ⅱ部とする。ただし、平成2年度に行った郡元団地S・T-6・7区と郡元団地H-11・12区における本調査は、一部調査期間を重複させながら連続して行われ、後者については平成3年1月31日現在、調査を継続中である。このためこの二件の調査については、本年報においてはその概要を記すにとどめ、本報告は来年度年報に掲載する予定である。
2. 昭和60年6月1日の埋蔵文化財調査室の設置を機として、鹿児島大学構内におけるこれからの埋蔵文化財調査に便できるように鹿児島大学構内座標を郡元団地と宇宿団地とに設定した。  
その設置基準は以下のようである。
  - (1) 郡元団地では、国土座標第2座標系（ $X = -158.200, Y = -42.400$ ）を基点として一辺50mの方形地区割りを行った（図版1参照）。
  - (2) 宇宿団地では、国土座標第2座標系（ $X = -161.600, Y = -44.400$ ）を基点として一辺50mの方形地区割りを行った（図版2参照）。
3. 本年報において報告を行った調査地点については、立合調査地点を除き、図版1・2にその位置を示している。
4. 付編を除く本年報の執筆は第Ⅰ部については第1・2章を松永幸男が、第3章を中村直子が担当し、第Ⅱ部については第1章を松永が、第2～4章を中村が担当している。
5. 付編Ⅲを除く、本年報掲載の遺構・遺物の実測・製図・写真撮影は中村・栗林文夫・黒木綾子・松永が行った。
6. 付編Ⅰ・Ⅱはそれぞれ平成元年度に埋蔵文化財調査室が行った鹿児島大学大学院連合農学研究科校舎建設地内の発掘調査、及び教育学部附属中学校プール上屋取設工事に先立って実施した発掘調査の際に出土した遺物の報告で、『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅴ』に掲載の調査報告の欠を補うものである。Ⅰを中村が、Ⅱを松永が執筆した。Ⅰの報告にあたっては、陶磁器を中心とした出土遺物について池畑耕一氏（鹿児島県歴史資料センター黎明館）に多大なご教示を賜った。
7. 付編Ⅲは昭和58年に鹿児島県教育委員会によって行われた電子計算機室建設地における発掘調査の報告である。掲載にあたっては、発掘担当者であった池畑耕一氏（鹿児島県歴史資料センター黎明館）・吉永正史氏（鹿児島県教育委員会）にご指導、ご助言、並びに多大なご協力を賜り、さらに池畑氏には全文をご執筆いただいた。ここに記して、深甚の謝意を表したい。
8. 本書の編集は室長上村俊雄の指導を受けて、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が行った。

# 目 次

第Ⅰ部 平成元年度（平成2年2～3月）鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告	1
第1章 平成元年度（平成2年2～3月）調査の概要	3
第2章 鹿児島大学郡元団地H-11・12区（工学部情報工学科校舎建設予定地）における試掘調査報告	5
1. 調査に至る経過及び調査体制	5
2. 調査の経過	5
3. 層序	6
4. 遺構	6
5. 遺物	8
6. まとめ	9
第3章 平成元年度（平成2年2～3月）鹿児島大学構内における立合調査報告	11
第Ⅱ部 平成2年度（平成2年4月～平成3年1月）鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告	15
第1章 平成2年度（平成2年4月～平成3年1月）調査の概要	17
第2章 鹿児島大学郡元団地S・T-6・7区（教育学部附属小学校プール上屋建設地）における試掘調査報告	19
1. 調査に至る経過	19
2. 調査体制	19
3. 調査の経過	21
4. 基本層位	21
5. 遺構	21
6. 遺物	21
7. まとめ	24
第3章 鹿児島大学教育学部附属養護学校校舎建設予定地における試掘調査報告	26
1. 調査に至る経過	26
2. 調査組織	26
3. 調査の経過	26
4. 層序	26
5. 遺物	30
6. まとめ	30
第4章 平成2年度（平成2年4月～平成3年1月）鹿児島大学構内における立合調査報告	32

・鹿児島大学構内遺跡調査要項	37
・受贈図書目録	40
付 編	47
I. 鹿児島大学大学院連合農学研究科校舎建設地内出土遺物の紹介	49
1. 遺構出土遺物	49
2. 包含層出土遺物	53
3. 土製品	58
4. 煙管	60
5. 古銭	60
6. 軽石製品	61
II. 鹿児島大学教育学部附属中学校プール上屋建設地内出土遺物の紹介	68
1. 遺構埋土中出土遺物	68
2. 包含層出土遺物	68
3. 攪乱層出土及び採集遺物	76
III. 鹿児島大学電子計算機室新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（昭和58年度 鹿児島県教育委員会調査）	81
1. 調査の経過と組織	81
2. 層序	82
3. 遺構	82
4. 遺物	84
5. まとめにかえて	86

## 挿 図 目 次

・郡元団地H-11・12区における試掘調査	
第1図 調査地点位置図	5
第2図 土層図	7
第3図 検出遺構	8
第4図 出土遺物	9
・平成元年度立合調査	
第5図 立合調査地点位置図（1）	11
第6図 立合調査地点位置図（2）	12
第7図 立合調査地点位置図（3）	13
第8図 立合調査時出土遺物	13

第9図	立合調査地点位置図(4)	14
第10図	立合調査地点位置図(5)	14
・郡元団地S・T-6・7区における試掘調査		
第11図	調査地点位置図	19
第12図	土層図	20
第13図	検出遺構	21
第14図	出土遺物(1)	22
第15図	出土遺物(2)	23
・教育学部附属養護学校における試掘調査		
第16図	教育学部附属養護学校位置図	26
第17図	調査地点位置図	27
第18図	No.1トレンチ南壁土層図	28
第19図	No.1トレンチ西壁土層図	29
第20図	No.2トレンチ土層図	30
第21図	出土遺物	31
・平成2年度立合調査		
第22図	立合調査地点位置図(1)	32
第23図	立合調査地点位置図(2)	33
第24図	No.2マンホール土層図	33
第25図	立合調査地点位置図(3)	35
・大学院連合農学研究科校舎建設地内出土遺物報告		
第26図	遺構出土遺物(1)	50
第27図	遺構出土遺物(2)	51
第28図	包含層出土遺物(1)	52
第29図	包含層出土遺物(2)	54
第30図	包含層出土遺物(3)	56
第31図	包含層出土遺物(4)	57
第32図	土製品(1)	59
第33図	土製品(2)	60
第34図	煙管	60
第35図	古銭	61
第36図	軽石製品	61
・教育学部附属中学校プール上屋建設地内出土遺物報告		
第37図	No.6トレンチ検出遺構出土遺物	68
第38図	包含層出土遺物(1)	69
第39図	包含層出土遺物(2)	70

第40図	包含層出土遺物（3）	71
第41図	包含層出土遺物（4）	72
第42図	包含層出土遺物（5）	73
第43図	包含層出土遺物（6）	74
第44図	攪乱層出土及び採集遺物	75
	・電子計算機室建設地における発掘調査	
第45図	検出遺構	83
第46図	出土遺物	85

## 表 目 次

	・郡元団地H-11・12区における試掘調査	
表 1	土器観察表	10
	・郡元団地S・T-6・7区における試掘調査	
表 2	土器観察表	24
	・教育学部附属養護学校における試掘調査	
表 3	土器観察表	31
	・大学院連合農学研究科校舎建設地内出土遺物報告	
表 4	土器観察表	62
表 5	石鍋観察表	66
表 6	煙管観察表	66
表 7	土製品観察表	67
	・教育学部附属中学校プール上屋建設地内出土遺物報告	
表 8	土器観察表	76
表 9	石器観察表	80
表 10	粘土塊観察表	80
	・電子計算機室建設地における発掘調査	
表 11	土器観察表	89

## 写 真 目 次

	・平成元年度立合調査	
写真 1	立合調査時出土遺物	13

・平成2年度立合調査

写真2 No.2 マンホール検出畦 ..... 34

写真3 No.5 マンホール検出畦 ..... 34

・教育学部附属中学校プール上屋建設地内出土遺物報告

写真4 No.6 トレンチ検出遺構埋土中出土遺物 ..... 80

## 図版目次

図版1 鹿児島大学郡元団地構内図 ..... 93

図版2 鹿児島大学宇宿団地構内図 ..... 94

・郡元団地H-11・12区における試掘調査

図版3 郡元団地H-11・12区(1) ..... 95

①調査地点全景(東から) ②No.2 トレンチ4層上面検出ピット(北から)

③No.1 トレンチ南壁東半部 ④No.1 トレンチ調査終了時(東から)

⑤No.2 トレンチ東壁

図版4 郡元団地H-11・12区(2) ..... 96

①No.3 トレンチ東壁北半部 ②No.3 トレンチ東壁南半部

③～⑧出土遺物

・郡元団地S・T-6・7区における試掘調査

図版5 郡元団地S・T-6・7区(1) ..... 97

①調査前状況(北から) ②調査前状況(南東から)

③No.1 トレンチ4層上面ピット検出状況(東から)

④No.1 トレンチ4層上面検出ピット ⑤No.1 トレンチ4層上面検出ピット

図版6 郡元団地S・T-6・7区(2) ..... 98

①No.1 トレンチ東壁 ②No.2 トレンチ北壁

③No.3 トレンチ北壁 ④No.4 トレンチ北壁

⑤No.5 トレンチ北壁 ⑥No.5 トレンチ東壁

図版7 郡元団地S・T-6・7区(3) ..... 99

出土遺物

・教育学部附属養護学校における試掘調査

図版8 教育学部附属養護学校 ..... 100

①調査前状況(南東から) ②No.2 トレンチ西壁上半部

③No.2 トレンチ西壁下半部 ④No.1 トレンチ西壁中央部

⑤No.2 トレンチ完掘状況 ⑥⑦出土遺物



・大学院連合農学研究科校舎建設地出土遺物の紹介

図版 9	大学院連合農学研究科校舎建設地出土遺物（1） 遺構出土遺物	101
図版10	大学院連合農学研究科校舎建設地出土遺物（2） 包含層出土遺物（1）	102
図版11	大学院連合農学研究科校舎建設地出土遺物（3） 包含層出土遺物（2）	103
図版12	大学院連合農学研究科校舎建設地出土遺物（4） 包含層出土遺物（3）	104
図版13	大学院連合農学研究科校舎建設地出土遺物（5） 包含層出土遺物（4）	105
図版14	大学院連合農学研究科校舎建設地出土遺物（6） ①～④土製品 ⑤煙管 ⑥軽石製品 ⑦古銭	106

・教育学部附属中学校プール上屋建設地出土遺物の紹介

図版15	教育学部附属中学校プール上屋建設地出土遺物（1） 包含層出土遺物（1）	107
図版16	教育学部附属中学校プール上屋建設地出土遺物（2） 包含層出土遺物（2）	108
図版17	教育学部附属中学校プール上屋建設地出土遺物（3） 包含層出土遺物（3）	109
図版18	教育学部附属中学校プール上屋建設地出土遺物（4） ①～④包含層出土遺物（4） ⑤～⑧攪乱層出土及び採集遺物	110

・電子計算機室建設地内発掘調査

図版19	電子計算機室（1）	111
図版20	電子計算機室（2）	112
図版21	電子計算機室（3）	113

# 第 I 部 平成元年度（平成 2 年 2 ～ 3 月） 鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告

- 第 1 章 平成元年度（平成 2 年 2 ～ 3 月）調査の概要
- 第 2 章 鹿児島大学郡元団地 H - 11 ・ 12 区における試掘調査報告
- 第 3 章 平成元年度（平成 2 年 2 ～ 3 月）鹿児島大学構内における立合調査報告

## 第1章 平成元年度（平成2年2月～3月）調査の概要

平成2年2月～3月には、下記のように試掘調査1件、立合調査11件を実施した。

### ・試掘調査

- ①工学部情報工学科校舎建設予定地における試掘調査（平成2年3月22日～30日、郡元団地H-11・12区）

### ・立合調査

- ①教養部1号館南側道路舗装工事に伴う立合調査（平成2年1月16～20日、郡元団地K-4・5区）  
②教育学部附属中学校プール上屋取設工事に伴う立合調査（平成2年2月2・5～8日、郡元団地Q-9・10区）  
③医学部附属病院MR I-CT装置棟新営電気工事に伴う立合調査（平成2年2月15日、宇宿団地E・F-9区）  
④市水引き込み工事に伴う立合調査（平成2年2月16・21日、3月2・6・19・20・26日、法文学部・教育学部各地点）  
⑤医学部MR I-CT装置棟空調和其他工事に伴う立合調査（平成2年2月26日、宇宿団地E-8区）  
⑥南太平洋海域研究センター前ケーブル埋設工事に伴う立合調査（平成2年3月1・5日、郡元団地I・J-8・9区）  
⑦農学部獣医学科へい獣焼却炉前ケーブル埋設工事に伴う立合調査（平成2年3月2日、郡元団地D-5・6区）  
⑧法文学部北側水道管埋設工事に伴う立合調査（平成2年3月19・20日、郡元団地K-4・5区）  
⑨農学部1号館北側駐車場舗装工事に伴う立合調査（平成2年3月26日、郡元団地D-5・6区）  
⑩教養部車庫西側水道管埋設工事に伴う立合調査（平成2年3月26日、郡元団地J-6区）  
⑪教養部講義棟北側水道管埋設工事に伴う立合調査（平成2年3月28日、郡元団地I-5区）

今回試掘調査を実施した工学部情報工学科校舎建設予定地周辺では、既に機械工学科校舎建設地、<sup>(1)</sup>及び情報処理センター建設地において発掘調査が行われている<sup>(2)</sup>が、このうち機械工学科校舎建設地においては、古墳時代の遺物包含層やこれにおおわれた溝等の諸遺構が検出されている。また、情報処理センター建設地においては、おそらく中世に機能していたと考えられる自然河川、及びこれに接して存在する水田址が検出されている。このため、情報工学科校舎建設予定地にもこれらの諸遺構や遺物包含層が存在することが予想されたが、試掘調査を行った結果、本地点においては東西方向に延びる自然河川、弥生時代ないし古墳時代の遺物包含層の存在が確認された。なお、自然河川の埋土中からは縄文時代晩期・弥生～古墳時代・中近世の遺物が出土している。

立合調査は郡元団地において9件、宇宿団地において2件実施しているが、これらのうち、上記の①・③・⑤・⑦・⑨・⑩については、埋蔵文化財への新たな影響はなかった。②は教育学部附属

中学校プール上屋取設工事に伴う発掘調査を行った際に調査が困難であった部分について掘削がなされる際に立合調査を実施したものである。調査に当たっては本調査時の分層結果をもとに遺物の採集を行った。④においては、遺物の出土はほとんど見られなかったが、教育学部を中心としてかなり広範な地域にわたって土層の観察を行うことができた。各地点で観察した土層相互の対応関係の把握は困難であるが、上述の附属中学校プールにおいて検出している古墳時代の遺物包含層に対応する層がかなり東側にまで広がっていることが確認された。⑥・⑧・⑩は郡元団地において特に埋蔵文化財包含層が密に存在する理学部から法文学部にかけての地域で行われたものであり、工事による埋蔵文化財への影響が懸念された。工事の結果、各地点において遺物包含層に掘削が及ぶこととなり、これに伴い遺物の出土もみられた。遺物包含層がほぼ全域に広がっていると予想される鹿児島大学郡元団地構内において、これらの地域が特に埋蔵文化財への配慮を必要とする地域であることが改めて認識された。

#### 註

- (1) 池畑耕一・中島哲朗・松永幸男「鹿児島大学工学部機械工学科校舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（付．教育学部における試掘調査）」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅱ 昭和61年度』鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1987年
- (2) 本地点については鹿児島県教育委員会と鹿児島大学埋蔵文化財調査室とによって、それぞれ昭和58年、昭和62年に調査が実施されている。前者の調査報告については本年報の付編Ⅲを、また後者については下記の文献を参照いただきたい。  
松永幸男「鹿児島大学郡元団地G・H-9・10区（電子計算機室増築地）における発掘調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅲ 昭和62年度』鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1988年

## 第2章 鹿児島大学郡元団地H-11・12区（工学部情報 工学科校舎建設予定地）における試掘調査

### 1. 調査に至る経過及び調査体制

工学部では情報工学科の新設に伴い、新校舎の建設を計画している。建設予定地は郡元キャンパスの東側中央やや北寄りに位置するが、この地点の南に隣接する機械工学科校舎建設地においては、校舎建設にともなう事前調査によって北西から南東に向かう溝状遺構が5条検出されている。また、この調査の際には、古墳時代及び中近世の遺物が出土しており、今回情報工学科校舎建設が予定された地点にもこれらの遺構や遺物包含層が連続して存在する可能性が高い。このため鹿児島大学埋蔵文化財調査室では、本建設予定地において試掘調査を行い埋蔵文化財包蔵の有無を確認することとなった。

本試掘調査は平成2年3月22日から30日にかけて、下記の体制で行われた。

調査主体者 鹿児島大学埋蔵文化財調査室長 上村俊雄

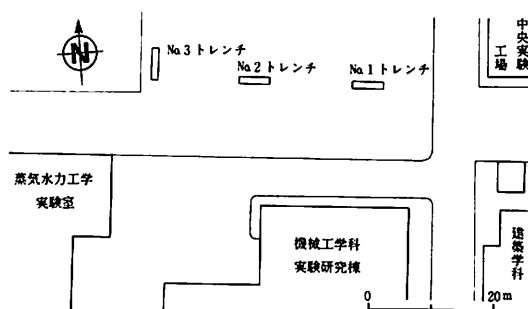
調査担当 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

室長 上村俊雄

室員 松永幸男・砂田光紀・  
中村直子

発掘調査作業員

石谷サチ子・岩戸エミ子・東條  
フミ・野下ヨシエ・前田スガ



第1図 調査地点位置図（1/1200）

### 2. 調査の経過

調査にあたっては第1図に示すように14m間隔で3本のトレンチを設定し、東から西へ順にトレンチ番号を付している。トレンチはすべて1m×5mの大きさで、No.1トレンチ及びNo.2トレンチは長軸を東西に、No.3トレンチは南北に設定している。

調査は各トレンチをほぼ同時に平行して掘り下げながら行ったが、No.2トレンチを除き、表土の直下に粗砂を中心とした砂層が検出された。この砂層は20層ほどに分層されたがこれらの堆積状況から自然河川内への堆積土と考えられた。この砂層はかなり厚くNo.1トレンチで厚さ1.7m以上、No.3トレンチで1.3m以上を計る。なお、本砂層中からは縄文晩期～中近世の遺物が出土している。また、No.1トレンチにおいては、掘削部最下底面から、径70cmほどの自然木の幹が検出されている。丁度トレンチを南北に横断するように水平に倒れており、長さ等は不明である。

No.2トレンチにおいては郡元キャンパスに通有の層序が観察され、現地表下約2.3mほどで基盤の粗砂層に達している。本トレンチにおいては基本土層3層とした淡灰白色を呈する層から弥生～古墳時代の所産と考えられる土器が出土している。また、4層以上から掘り込まれたピット群も検

出された。

### 3. 層序

前述のように、No.1 トレンチとNo.3 トレンチにおいては、客土の直下に河川内へ流入堆積したものかと考えられる厚い砂層が堆積する。このため、ここでは郡元キャンパスに通有の堆積状況を示すNo.2 トレンチの層序をとりあえず基本土層として提示する。No.1・3 トレンチの客土下の砂層はかなりの分層が可能であったが、これについては図中に観察所見を示す。なお、各トレンチ間における土層の対応関係はほとんど把握することができなかったが、No.1 トレンチの⑧層とNo.3 トレンチの③層とが、色調を若干異にするものの基本土層2層に対応する可能性が考えられる。

基本土層は以下のものである。

- 1層：客土
- 2層：淡灰白色砂混じりシルト層（鉄分の浸透が若干認められる。）
- 3層：淡灰白色細砂混じり粘質土（鉄分の浸透が顕著である。色調は2層とほぼ同様であるが、3層は若干褐色味が加わる。）
- 4層：黄白色粘土層
- 5層：濁灰色粗砂混じりシルト層（鉄分の浸透がみられる。）
- 6層：淡濁灰色～淡褐色粗砂層（鉄分の浸透をごく一部に認める。5層土をブロック状に含む部分がみられる。）
- 7層：黒色粘土層
- 8層：黄白色粘土層
- 9層：黒色粘土層（7層とほぼ同様であるが、若干粗砂を含む。）
- 10層：淡濁黄白色細砂
- 11層：軽石礫を多量に含む粗砂層（南側へ若干傾斜する。）

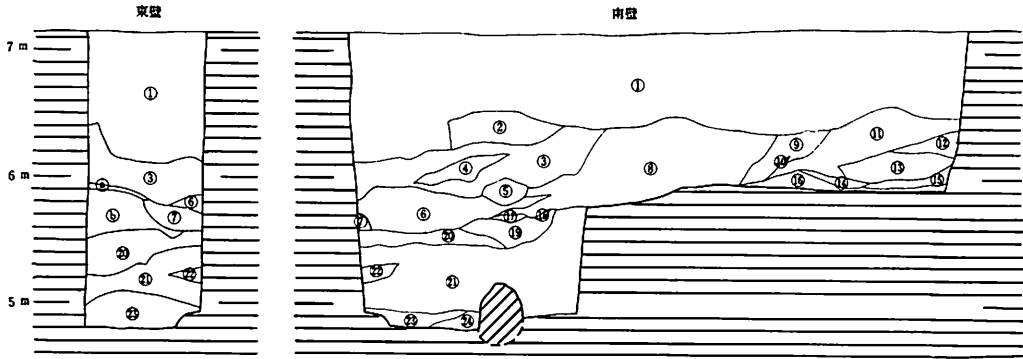
### 4. 遺構

No.1 トレンチ、及びNo.3 トレンチにおいて、自然河川の埋土と考えられる厚い砂層が検出されたほか、No.2 トレンチにおいては柱穴状ピットを3基検出している。

自然河川についてはNo.1 トレンチ⑧層上面においてほぼ流路の方向を知ることができたが、西北西から東南東へ向かうようである。No.3 トレンチが河川を横断するような位置に存在することを考えると、両トレンチ検出の砂層が同一河川の埋土であるならば、この河川はNo.2 トレンチの北側を迂回して東西に流れていたものと考えられる。この河川の埋土と考えられる砂層中からは著しく摩滅した弥生土器をはじめとして、縄文時代晩期～近世の遺物が出土しており、本河川がさほど古くない時代まで存在していたことが知られる。

No.2 トレンチ検出のピットは、トレンチ南壁の観察によれば基本土層4層以上からの掘り込みで、現在深度約30cmを計る。トレンチ西壁で存在を確認したピットを含めて計4基が検出されているがこれらを便宜的に東から順にP1・P2・P3・P4と呼称する。P2～P4はほぼ直線的に

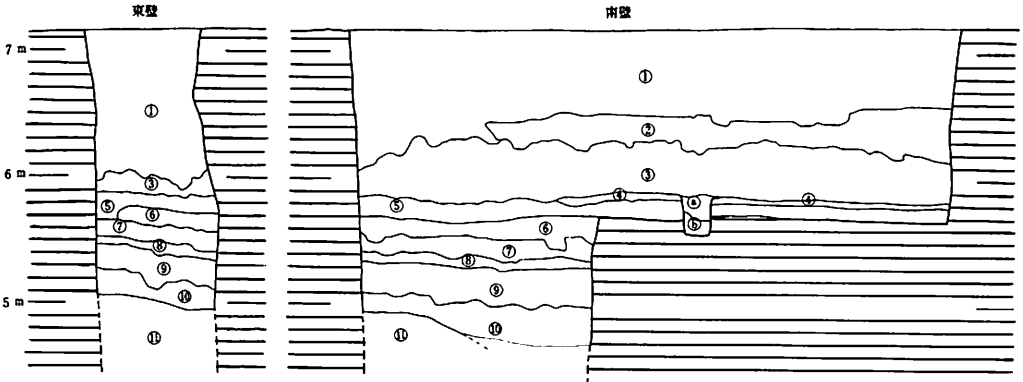
No 1 トレンチ



No 1 トレンチ土層

- ① 粘土
- ② 黄褐色シルト質砂 (下部は薄い明灰褐色-黒灰色の細砂)
- ③ 明灰褐色砂層 (径 2cm 程の小粒の軽石を少し含む)
- ④ 明灰褐色粗砂 (軽石を多量に含む)
- ⑤ 明灰褐色粗砂 (明灰褐色の軽石を多数含む)
- ⑥ 黒灰色・明灰褐色・灰白色の粗砂が塊状に堆積している層で、下部には軽石礫を含む
- ⑦ 灰褐色シルト質砂 (粒子粗く、軽石を若干含む)
- ⑧ 灰褐色シルト質砂 (粒子粗く、軽石を若干含む)
- ⑨ 茶褐色シルト質砂
- ⑩ ⑨層度がブロック状に入っている層
- ⑪ 茶褐色-灰褐色シルト質砂 (小粒の軽石を含む)
- ⑫ 灰褐色粗砂
- ⑬ 明灰褐色-明灰褐色粗砂 (一部粗砂、軽石をブロック状に含む)
- ⑭ 灰褐色シルト質砂 (一部粗砂をブロック状に含む)
- ⑮ 灰褐色シルト質砂
- ⑯ 明茶褐色-黄褐色シルト (No 2 トレンチ②層に対応するものか)
- ⑰ 灰褐色-黄褐色粗砂
- ⑱ 灰褐色砂質シルト
- ⑲ 明灰褐色-灰白色砂 (全体に粒子が細かいが、粗砂を含む)
- ⑳ 黄褐色-明灰白色の砂層 (軽石を含む)
- ㉑ 明灰褐色-灰褐色の粗砂
- ㉒ 灰白色粗砂 (軽石を含む)
- ㉓ 白色・黒灰色粗砂 (軽石礫を含む)
- ㉔ 灰褐色シルト質砂 (粒子が細かい)
- ㉕ 灰白色粗砂
- ㉖ 黄褐色-明灰褐色粗砂 (下部に軽石礫を含む)

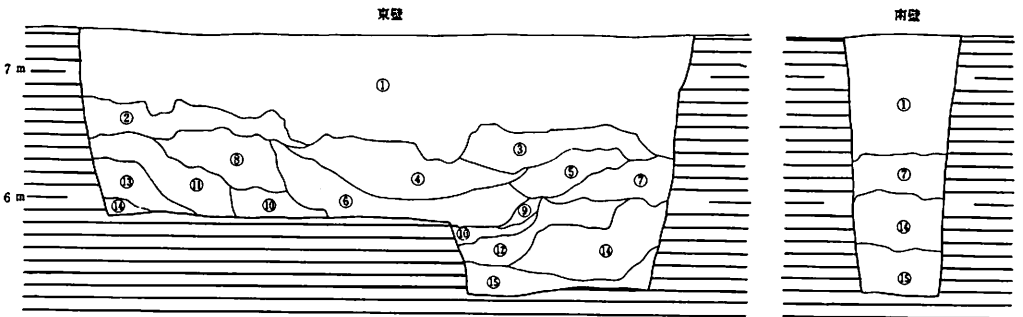
No 2 トレンチ



No 2 トレンチ土層

- a 黄褐色-褐色を呈する粘質土
- b 粗砂を多量に含む両灰色シルト

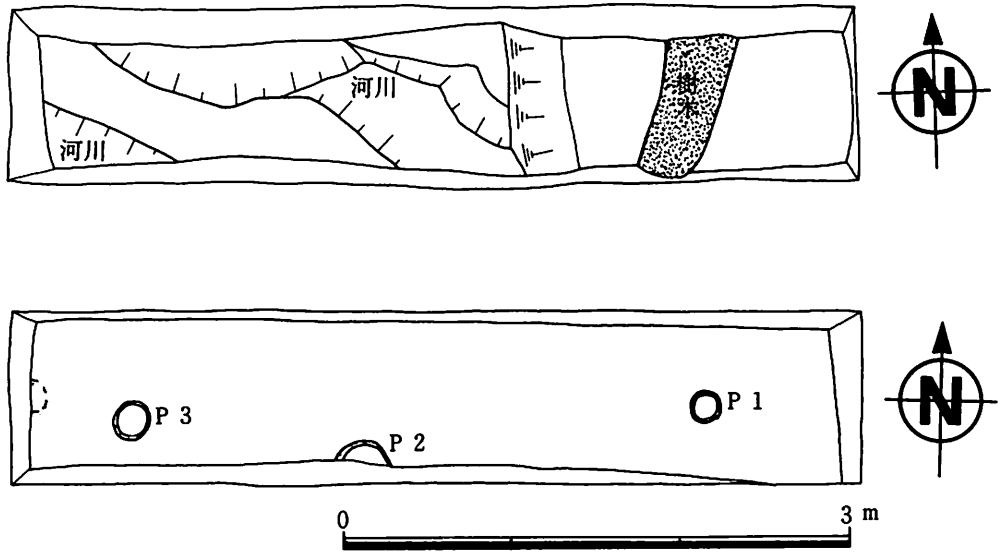
No 3 トレンチ



No 3 トレンチ土層

- ① 粘土
- ② 淡褐色粘質シルト-細砂層 (下部に行くに従い漸移的に砂層へ移行する)
- ③ 褐色-褐色を呈する砂混じり粘質シルトと両灰色粗砂との混土 (軽石小粒を含む)
- ④ 両褐色粗砂層 (水性作用による塊状の堆積をなす)
- ⑤ 淡褐色砂混じり粘質シルト層
- ⑥ ⑤層とほぼ同質の層であるが、⑤層との間には淡褐色の粗砂が厚さ 8cm 程の間層として存在する
- ⑦ 淡褐色粗砂層
- ⑧ 淡灰白色粗砂・褐色の軽石小粒 (径 5mm 弱)・軽石礫・白色粗砂・黒色の付着物がみられる軽石小粒等からなる混土
- ⑨ ⑤層と同質の層 (ブロック状に落ち込んだものか)
- ⑩ 淡灰白色粗砂
- ⑪ ⑦層と同質であるが、両層の間には不整合なラインが認められる (軽石礫を含む)
- ⑫ 淡褐色粗砂層 (軽石を多数含む)
- ⑬ 淡灰白色粗砂と軽石礫及び黒色の付着をみる軽石小粒ないし砂粒からなる混土
- ⑭ 淡灰白色粗砂粗砂と淡白色粗砂からなる混土 (全体に若干褐色味を帯びる)

第 2 図 土層図 (1/60)



第3図 検出遺構図 (1/45)

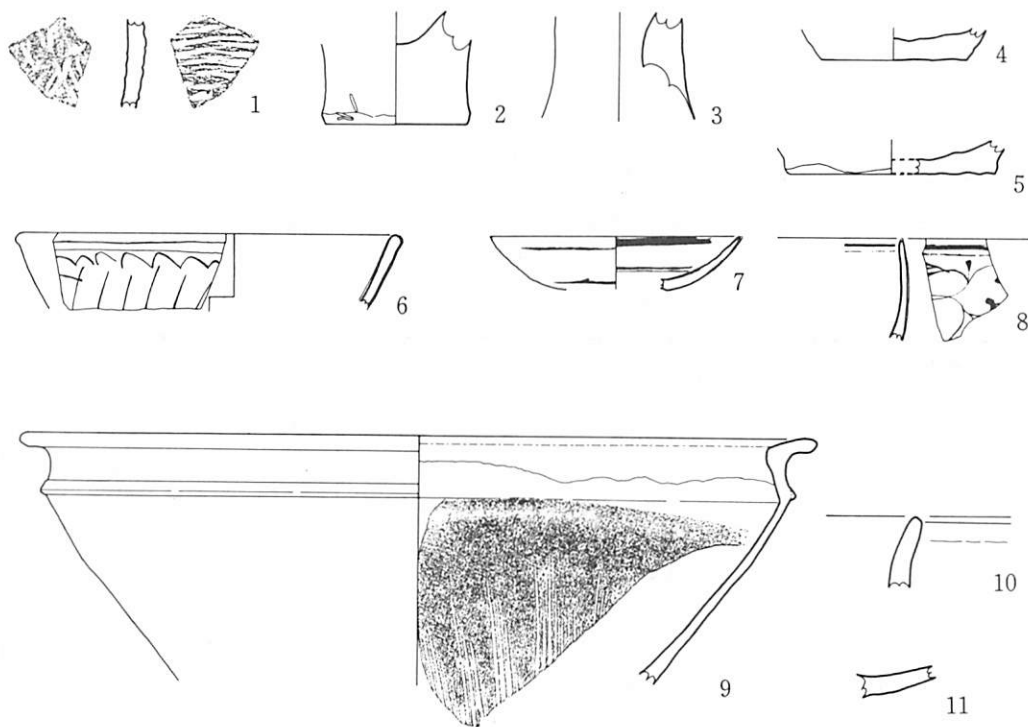
並んでおり、相互に有機的関連が考えられるピット群であるが、トレンチ外に存在するピットを介してP1とも連続する可能性がある。これらのピットの時期については3層上面から弥生～古墳時代の土器片が出土しており、これと同時期ないしそれ以前の時期が想定できる。

## 5. 遺物

今回の調査においては、点数は少ないながらも、縄文晩期・弥生～古墳時代・中近世の遺物が出土している。ここでは、辛うじて図化が可能であった11点について報告を行う。

1は橙白色を呈するやや軟質な感を与える須恵器小片で、外面には平行タタキ痕が残る。内面にも当て具の痕がみられるが小片であるためその詳細については不明である。2は平底の甕の底部片で1/3ほどが残存している。形状は若干柱状を呈し、底部の器壁の厚さはかなり厚い。内面にはユビオサエの痕が認められるが、内外面ともにナデ調整によって仕上げられている。3は高坏脚部片で、裾部へと移行する部分にあたりと考えられる。内外面ともナデによって仕上げられている。外面は明褐色で内面は黄白色を呈し、胎土にカクセン石等を含む。4は坏の底部片で底面にはロクロ切り離し後、丁寧なナデ調整が行われている。内面もナデ調整によって仕上げられているが、ユビオサエ痕が比較的良好に残っている。5は坏底部小片で、摩滅が著しく調整などについては不明であるが、内外面ともにユビオサエの痕が認められる。外面は橙白褐色、内面は橙白色を呈し、胎土に細砂粒を多く含んでいる。6は青磁碗の口縁部片で、体部外面には退化した蓮弁文が描かれている。磁胎は白く、青みがかかった緑白色の釉が内外面に厚くかかっている。7は染め付け碗の口縁部片で、体部外面には草花文が、また口縁部内面上端部には横走沈線が二条施されている。磁胎は白く全体に青白色で透明な釉が均一にかかっている。8は皿形を呈すると考えられる磁器の口縁部小





第4図 出土遺物 (1/3)

片である。磁胎は橙白色を呈し、少量の細砂粒を含む。淡い緑白色の釉がほぼ全体に薄くかかっているが、外面については高台際までの施釉にとどまるようである。9は播り鉢の口縁部から体部上半にかけての破片である。外方へほぼ水平に張り出す口縁部上面を除き内外面には暗茶褐色の不透明釉がかかっており、内面には縦位の4本単位の櫛目がみられる。10は外反する口縁部の小片で、摩耗が激しく器形・調整などについては不明である。11は高坏の坏底部から体部へ移行する部分と考えられる小片である。鉄分の浸透のためか色調は茶褐色を呈する。内外面ともにナデ調整が施されており、底部と体部との境には段状部が作出されている。

## 6. まとめ

今回試掘調査を実施した地点は昭和55年に鹿児島県教育委員会によって発掘調査が行われ、溝状遺構や古墳時代～中近世の遺物が検出された地点<sup>(1)</sup>の北に連続する地域でこれらの埋蔵文化財がこの地点にも連続して存在することが容易に推察された。調査の結果はこの予想を裏付けるもので、何らかの構造物の基礎であると考えられるピット列が検出されている。このピット列は時期的に古墳時代以前に位置づけられる可能性も考えられるもので、その性格等が注目される場所である。

No.1・3トレンチにおいては自然河川の存在も確認された。この河川の埋土である砂層中からは

縄文時代晩期～近世の遺物が出土しており、きわめて近い時期に埋没したことが考えられる。郡元キャンパス内には各時期の水田址が存在するが、これらとの関連においてこの自然河川の存続期間や流路等は注目される。

註

- (1) 池畑耕一・中島哲朗・松永幸男「鹿児島大学工学部機械工学科校舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（付. 教育学部における試掘調査）」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅱ』鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1987年

表1 土器観察表

図番号	器種	出土トレンチ	出土層	色調	胎土	調整	備考
4-1	大甕	№1 トレンチ	Ⅱ	外面；内面；乳白色	黒色粒，白色粒を含む	タタキ	傾き不明，タタキ痕がよく残る。
4-2	甕	№1 トレンチ	黄白色細砂より上層	赤褐色	白色粒，角閃石，石英を含む	ナデ？	摩滅が激しい，底部近くに棒状の工具によると思われる敲打痕が残る。
4-3	高坏	№1 トレンチ	河川埋土中	外面；明褐色，内面；黄白色	黒色粒，白色粒，赤色粒，角閃石を含む	ナデ	
4-4	坏	№1 トレンチ	河川埋土中	黄白色	細砂粒を多く含む	ナデ？	摩滅が激しいため調整は不明
4-5	坏	№1 トレンチ	河川埋土中	外面；橙白褐色，内面；橙白色	白色粒，赤色粒を含む	ナデ？	摩滅が激しいため調整は不明
4-6	碗	№1 トレンチ	河川埋土中	青味がかかった緑白色の透明釉	白色	施釉	
4-7	皿	№1 トレンチ	河川埋土中	緑白色の透明釉	細砂粒を少し含む，橙白色	施釉	釉が非常に薄くかかっている。
4-8	碗	№1 トレンチ		青白色の透明釉	白色	施釉	釉が全体に均一にかかっている。
4-9	擂鉢	№1 トレンチ	河川埋土中	外面；暗茶褐色の不透明釉，内面；白っぽい暗褐色の不透明釉	茶褐色	外面；ハケ目状の工具による，内面；ナデ，口縁部上面；工具による調整	内面に接合線が残る，口縁部上面が無釉である。
4-10	甕？	№2 トレンチ	Ⅱ	外面；黄赤褐色，内面；黄白色	角閃石，石英，砂粒を多く含む	口縁部；ヨコナデ，内面；ナデ	摩滅のため外面の調整は不明
4-11	高坏	№2 トレンチ	SD1埋土中	茶褐色	石英，黒色粒を含む。	ナデ？	傾き不明，幅5mm程度の沈線が見られる。

### 第3章 平成元年度（平成2年2月～3月）鹿児島 大学構内における立合調査報告

平成元年度（平成2年2月～3月）においては、下記の工事に伴い、立合調査を実施した。

- ・教養部一号館南側道路舗装工事（平成2年1月16日～20日、郡元団地K-4・5区）
- ・教育学部附属中学校プール上屋建設工事（平成2年2月2・5～8日、郡元団地Q-9・10区）
- ・医学部附属病院MRI-CT装置棟新営電気工事（平成2年2月15日、宇宿団地E・F-9区）
- ・市水引き込み工事（平成2年2月16・21日、3月2・6・19・20・26日、郡元団地）
- ・医学部附属病院MRI-CT装置棟空気調和その他工事（平成2年2月26日、宇宿団地E-8区）
- ・理学部南太平洋海域研究センター前ケーブル埋設工事（平成2年3月1・5日、郡元団地I・J-8・9区）
- ・農学部獣医学科へい獣焼却炉前ケーブル埋設工事（平成2年3月2日、郡元団地D-5・6区）
- ・法文学部北側水道管埋設工事（平成2年3月19・20日、郡元団地k-4・5区）
- ・農学部1号館北側駐車場舗装工事（平成2年3月26日、郡元団地D-5・6区）
- ・教養部車庫西側水道管埋設工事（平成2年3月26日、郡元団地J-6区）
- ・教養部講義棟北側水道管埋設工事（平成2年3月28日、郡元団地I-5区）

#### 教養部一号館南側道路舗装工事に伴う立合調査（第5図）

教養部講義棟の南側を地表下30～40cmにわたり掘削を行ったが、客土のため遺物包含層への影響はなかった。

#### 教育学部附属中学校プール上屋取設工事に伴う立合調査（図版1参照）

埋蔵文化財調査室では昨年度、本地点の発掘調査を行ったが、今回はその際、調査不可

であった部分についての立合調査を行った。立合調査にあたって、発掘調査で成川式土器の遺物包含層であると確認できたV層から、やはり多量の成川式土器が出土した。この出土品については、発掘調査の遺物とともに付編に掲載し、説明を行っている。



第5図 立合調査地点位置図(1) (1/2,000)

#### 医学部附属病院MRI-CT装置棟新営電気工事に伴う立合調査（第6図）

本工事では駐車場北縁部において、3カ所のマンホールとそれをつなぐ溝状の掘削が行われた。掘削は全て盛土ないし既掘部にあたり、埋蔵文化財への影響はなかった。

### 市水引き込み工事に伴う立合調査（図版1参照）

本工事では教育学部と法文学部において、掘削を行い、任意の地点で土層の観察を行った。ここでは、各地点ごとに土層の堆積状況を報告する。

#### 第2地点

- I層 アスファルトおよび客土（層厚27cm）
- II層 灰色の砂混じりシルト層 軽石を含む。（層厚23cm）
- III層 濁褐色砂混じりシルト層 小粒の軽石を含む。（層厚15cm）
- IV層 灰色粘質シルト層 軽石小粒を含む。

#### 第3地点

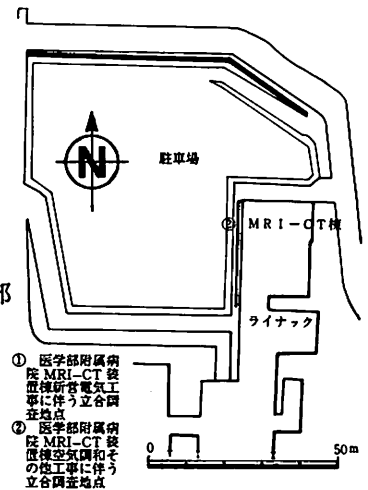
ほとんど既掘部であるが、プライマリーな層が若干残る。その部分について説明する。

- I層 客土（層厚10cm）
- II層 灰色砂混じりシルト層（層厚約40cm）
- III層 明褐色粗砂混じりシルト層

#### 第7地点

- I層 アスファルトおよび客土（層厚10cm）
- II層 淡濁灰褐色砂混じり砂質シルトを基調とした攪乱層（層厚13cm）
- III層 灰褐色砂混じり砂質シルト層（層厚13cm）
- IV層 淡灰褐色砂混じり砂質シルト層（層厚10cm）
- V層 褐色砂混じり粘質シルト層 黄色・灰色土などが混じり、濁っている。（層厚10cm）
- VI層 暗褐色砂混じりシルト層 軽石を含む。（層厚25cm）
- VII層 砂層

VI層は、附属中学校プール上屋における発掘調査の際、成川式土器の包含層を検出したがそれと同一層であり、同包含層の範囲確認の参考となった。



第6図 立合調査地点位置図(2)  
(1/2,000)

### 医学部附属病院MRI-CT装置棟空調和其他工事に伴う立合調査（第6図）

本工事では、MRI-CT棟西側を建物に沿って溝状の掘削を行ったが、掘削部はサツマ火山灰層中にあたり、埋蔵文化財への影響はなかった。

### 理学部南太平洋海域研究センター前ケーブル埋設工事に伴う立合調査（第7図）

本工事では、理学部内の南太平洋海域研究センター西側において、ケーブル埋設に伴う掘削工事が行われた。掘削はマンホール埋設部分とケーブル埋設部分に分けて行われ、それぞれの掘削工事にもなって立合調査を実施し、土層観察を行った。今回の工事地点は昭和60年に発掘調査が行われ、古墳時代の住居跡を確認した理学部3号館建設地南側に隣接した部分にあたり、発掘調査によって確認した古墳時代の遺物包含層への影響を免れ得なかった。付近一帯は、広範囲にわたって遺物包含層が広がっていることが予想され、今後、この地域については埋蔵文化財への十分な配慮

が必要であることが確認された。以下、地点別に土層の説明を行う。

#### マンホール埋設部分

掘削は幅2 m、長さ4～6 m、地表下140cmに及んだ。

- I層 客土及びアスファルト（層厚75cm）
- II層 灰褐色砂混じりシルト層 斑点状の鉄分の浸透がみられ、小粒の白色パミスとブロック状の砂を含む。水田耕作土であると考えられる。（層厚10～15cm）
- III層 淡灰褐色細砂層 小粒の白色パミスを少し含む。II層と同様に鉄分の浸透がみられる。（層厚20～25cm）



第7図 立合調査地点位置図(3) (1/2,000)

- IV層 淡紫灰色シルト層 若干の鉄分の浸透がみられる。（層厚20cm）
- V層 濁黒灰色シルト層 水分を多量に含む。（層厚15cm）
- VI層 濁黄褐色砂層 微細な黄色パミス・2～3 cm大の白色パミスを含む。

III層とIV層の境界部分で土器片を検出したが、小片のためその時期は確定できなかった。また、排土中より弥生時代中期の甕の口縁部を1点採集したが、どの層に伴うものかは確認できなかった。

#### ケーブル埋設部分

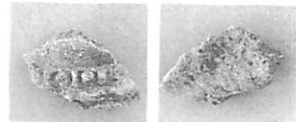
掘削は当初、幅70cm、地表下110cmにわたり行ったが、土器片が出土したため掘削深度を90cmに変更し、土層の観察を行った。掘削部北側は大きく攪乱していたが、その他の部分についてはプライマリーな層が残存していた。以下、土層の説明を行う。

- I層 客土（層厚10cm）
- II層 濁紫灰色細砂混じり土層 小粒の白色パミスを含む。（層厚25～30cm）
- III層 濁灰褐色細砂層 小粒の白色パミスを多く含み、鉄分の浸透がみられる。（層厚15～20cm）
- IV層 暗濁紫灰色シルト層 鉄分の浸透がみられる。

III層とIV層はマンホール埋設部分のIII層・IV層に対応し、マンホール埋設部分と同じく、その境界部分には遺物が包含されている。このうち、1点は第8図に載せている成川式土器の壺であり、その他丹塗りの土器片等も出土している。

第8図の壺は、一条の突帯を施した頸部である。突帯には竹管文によって刺突を施している。外面は横方向のナデに

よって器面調整されているが、粗雑である。若干摩滅している。



第8図 立合調査時出土遺物 (1/3) 写真1 立合調査時出土遺物

#### 農学部獣医学科へい獣焼却炉前ケーブル埋設工事に伴う立合調査 (第9図)

農学部においては、獣医学科校舎北側のへい獣焼却炉敷地部分より、北側のマンホールへ接続す

る電気ケーブル埋設のための掘削工事を行い、立合調査を実施した。掘削は幅、深度ともに60～70cmにわたったが、いずれも盛土中の掘削であり、埋蔵文化財への影響はなかった。

#### 法文学部北側水道管埋設工事に伴う立合調査（第5図）

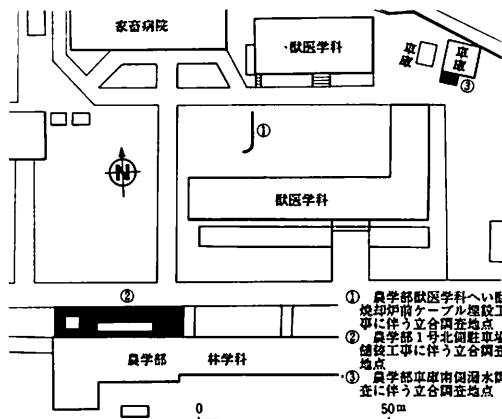
本工事においては、法文学部講義棟の北側を東西に幅50cmにわたって溝状の掘削を行った。当初、地表下75～80cmの掘削を行っていたが、プライマリーな層を検出し、遺物が出土したため、掘削深度をプライマリーな層に影響しない65cmに変更し、掘削を続行した。以下、層の説明を行う。

I層 客土（層厚65cm）

II層 濁茶褐色シルト層（層厚10～15cm）

III層 黒褐色シルト層（硬質）

III層より成川式土器と考えられる多数の土器片が出土し、このあたり一帯に広がる遺物包含層の範囲の一端を確認できた。



#### 農学部1号館北側駐車場舗装工事に伴う立合調査（第9図）

農学部においては、1号館（林学科）

第9図 立合調査地点位置図(4) (1/2,000)

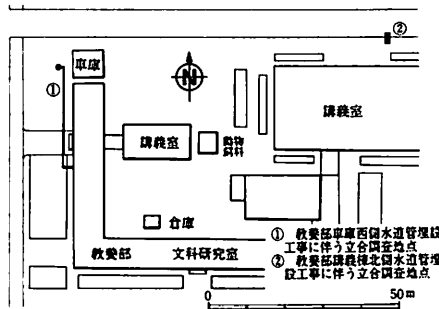
北側の駐車場を舗装することとなり、これにともなう掘削工事についての立合調査を実施した。掘削深度は15cmで、すべてシラス土の客土であったため、埋蔵文化財への影響はなかった。

#### 教養部車庫西側水道管埋設工事に伴う立合調査（第10図）

本工事では教養部車庫の西側において、水道管埋設工事のため、地表下45～80cmにわたって掘削を行ったが、いずれも客土であり、埋蔵文化財への影響はみられなかった。

#### 教養部講義棟北側水道管埋設工事に伴う立合調査（第10図）

本工事では教養部講義棟北側において、水道管埋設工事のため、幅60cm、長さ3m、地表下1mにわたって掘削を行った。ほとんどが攪乱であったが、ごく一部にプライマリーな層が残存しており、その部分については、土層の観察を行った。以下、その説明を行う。



第10図 立合調査地点位置図(5) (1/2,000)

I層 客土（層厚65cm） II層 濁黄白色シルト層（層厚20cm） III層 黒褐色シルト層

III層より成川式土器と思われる土器片と須恵器片が出土し、遺物包含層として確認した。これによって、理学部から教養部にかけて広がっている成川式土器を主体とするの遺物包含層の範囲の一端を確認できた。

## 第Ⅱ部 平成2年度（平成2年4月～平成3年1月）鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告

第1章 平成2年度（平成2年4月～平成3年1月）調査の概要

第2章 鹿児島大学郡元団地S・T-6・7区における試掘調査報告

第3章 鹿児島大学教育学部附属養護学校校舎建設地における試掘調査報告

第4章 平成2年度（平成2年4月～平成3年1月）鹿児島大学構内における立合調査報告

# 第1章 平成2年度（平成2年4月～平成3年1月）調査の概要

平成2年4月～12月においては、下記の本調査（2件）、試掘調査（2件）、及び下記の工事に伴う立合調査（7件）を実施した。

## ・本調査

- ①教育学部附属小学校プール上屋取設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（平成2年11月19日～平成3年1月10日、郡元団地S・T-6・7区）
- ②工学部情報工学科校舎建設予定地における埋蔵文化財発掘調査（平成2年12月6日～平成3年1月31日現在継続中、郡元団地H-11・12区）

## ・試掘調査

- ①教育学部附属小学校プール上屋取設工事に先立つ埋蔵文化財確認試掘調査（平成2年8月6日～10日、郡元団地S・T-6・7区）
- ②教育学部附属養護学校校舎建設予定に伴う埋蔵文化財確認試掘調査（平成2年8月20日～30日）

## ・立合調査

- ①法文学部屋外給水管改修工事（平成2年4月27日・5月1日、郡元団地K-5区）
- ②三井ホームとの共同研究に伴う実験住宅の建設（平成2年5月10日、郡元団地G・H-11・12区）
- ③農学部車庫南側漏水調査（平成2年5月23日、郡元団地C-4区）
- ④大学院連合農学研究科校舎新営空調その他工事（平成2年5月22日・6月8・12・13日、郡元団地F-3・4区）
- ⑤工学部九州電力との共同研究に伴う電柱取設工事（平成2年7月18日、郡元団地H-10区）
- ⑥郡元地区量水器改修工事（平成2年8月31日、9月3・4・7・10・14日、郡元団地各地点）
- ⑦大学院連合農学研究科棟周辺の環境整備（平成2年9月28日、郡元団地F-4区）

平成2年11月から平成3年1月にかけて実施した教育学部附属小学校プール上屋取設工事に伴う発掘調査は、上記の試掘調査②の調査結果をうけて行われたものである。調査は3m×3m程の上屋支柱の基礎部分18ヶ所について行った。本地点は、運動場の整備やプールの建設に伴いかなりの削平を受けたと考えられる部分であるが、北東に位置するグリッドを除き遺物包含層の残存状況は概ね良好で、住居址15軒以上、溝状遺構7条以上が検出された他、調査面積に比してきわめて多量の遺物が出土している。検出された住居址は古墳時代成川式土器を伴い、全て方形を呈すると考えられるものであるが、これらの中には周囲に幅50cm程の溝を巡らせるものも存在する。また、住居址埋土中から石庖丁が検出されており、南九州地域における石庖丁使用時期の下限を検討する上で貴重な資料を提供することとなった。なお、この調査の報告は、整理作業の都合上、平成3年度年報に掲載する予定である。



工学部情報工学科校舎建設予定地においては、平成元年3月に行った試掘調査において柱穴列、自然河川等が検出されている。<sup>(1)</sup>このうち柱穴列は成川式土器包含層の下から検出されたものであり、また河川埋土中からは縄文時代晩期・弥生～古墳時代・中近世の遺物が出土している。この試掘調査結果をもとに、平成2年12月6日より校舎建設予定地内の全面発掘調査を開始しているが、平成3年1月31日現在の時点で自然河川3条以上、及び成川式土器包含層の存在を確認している。本調査についてはまだ調査中であり、調査結果については平成3年度年報に報告したい。

今年度実施した試掘調査の内、②は教育学部附属養護学校敷地内における初めての調査であった。調査の結果、1.4m程の盛り土の下から中近世の陶磁器片が数片出土している。当該地点は周辺に擦り切り石庖丁を出土した弥生時代前期の玉里遺跡<sup>(2)</sup>などが存在しており、今後とも埋蔵文化財包蔵の有無について注意を払っていく必要がある。

立合調査については上記の7件について実施したが、このうち②・③・⑤・⑦については掘削がプライマリーな層に及ばず、埋蔵文化財への新たな影響は認められなかった。④は大学本部棟周辺において行われたが、この掘削工事によって畦と考えられる高まりを伴う灰色粘土層の存在が確認された。これは大学本部棟の東に隣接する大学院連合農学研究科棟の建設地において調査された近世の水田址<sup>(3)</sup>に連続するものと考えられ、本地点にかなり広範に該期の水田址が広がっていることが明らかとなった。①・⑥においては、若干の遺物を採集するとともに、郡元団地各地点における土層堆積状況の観察を行った。

#### 註

(1) 本年報第I部第2章参照。

(2) 麻生孝行「有溝の石包丁」『鹿児島県考古学会紀要』第2号 鹿児島県考古学会 1952年

(3) 松永幸男・砂田光紀「鹿児島大学郡元団地F-3・4区（大学院連合農学研究科校舎建設予定地）における発掘調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報V』鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1990年

## 第2章 鹿児島大学郡元団地S・T-6・7区（教育学部 附属小学校プール上屋建設予定地）における試掘 調査報告

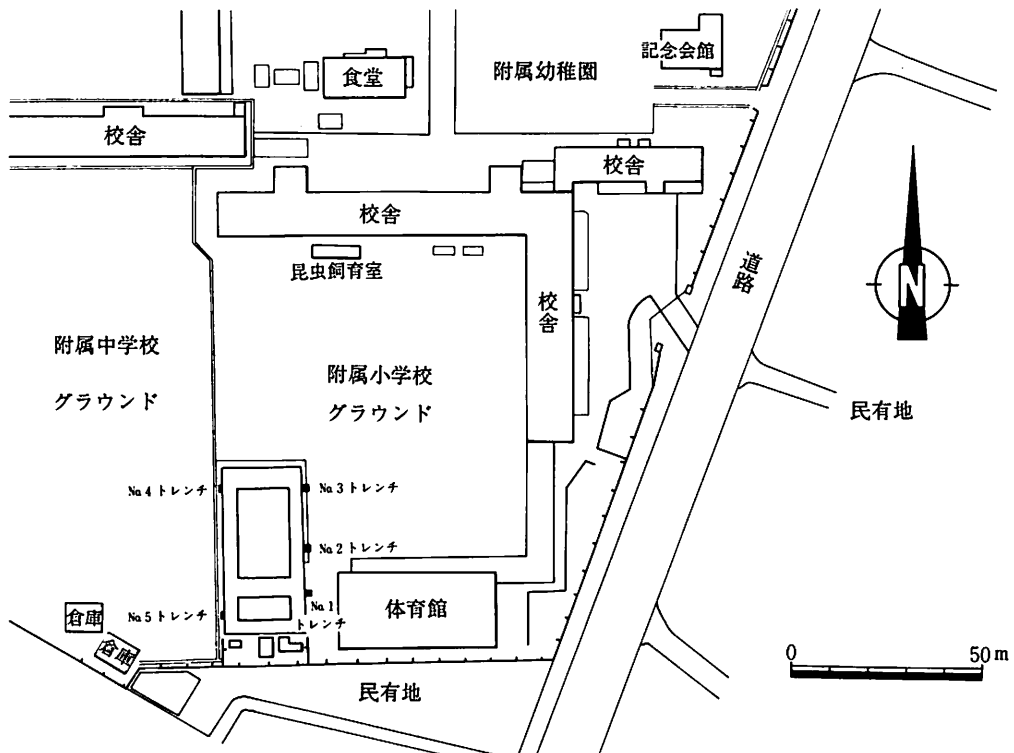
### 1. 調査に至る経過

鹿児島大学では、教育学部附属小学校にプール上屋建設工事を計画している。建設予定地は、平成元年度発掘調査を行った附属中学校プールの南西約250mに位置し、また周辺地域の掘削工事の立合調査の結果などから、成川式土器を主体とする遺物包含層の存在が予測されていた。このため、埋蔵文化財調査室では、本予定地において埋蔵文化財確認試掘調査を実施した。

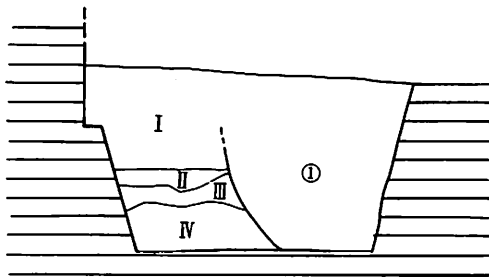
### 2. 調査体制

本試掘調査は、下記の体制で平成2年8月6日から8月10日まで行った。

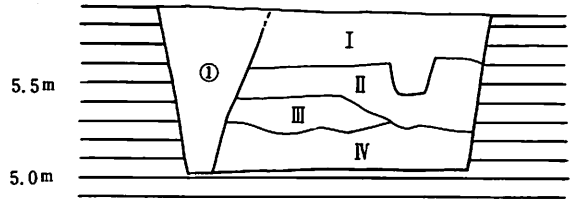
調査主体者 鹿児島大学埋蔵文化財調査室長 上村俊雄  
調査担当 鹿児島大学埋蔵文化財調査室  
室長 上村俊雄 室員 中村直子・栗林文夫・黒木綾子  
発掘調査作業員 岩戸エミ子・狩集エミ子・名越ヒデ子・野下ヨブ子・盛満アイ子



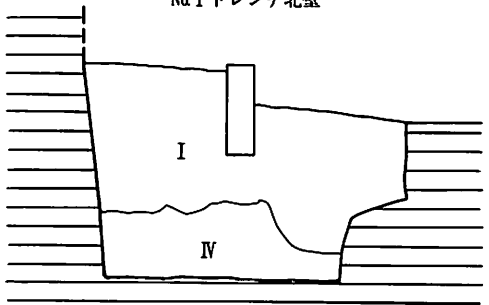
第11図 調査地点位置図 (1/200)



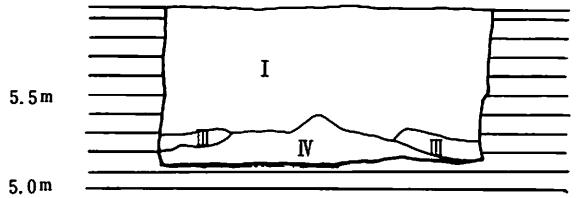
Na.1 トレンチ北壁



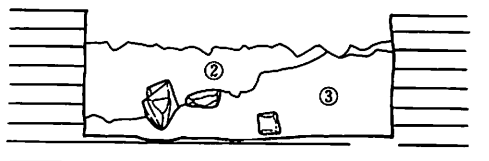
Na.1 トレンチ東壁



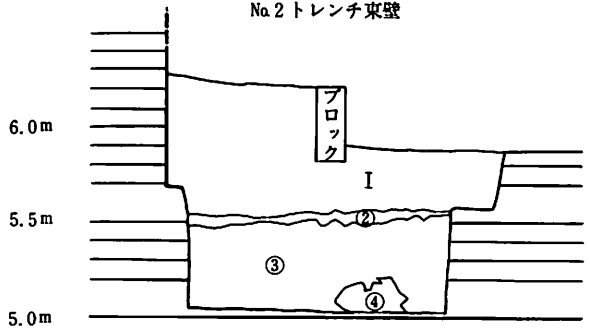
Na.2 トレンチ北壁



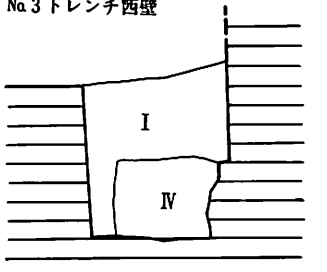
Na.2 トレンチ東壁



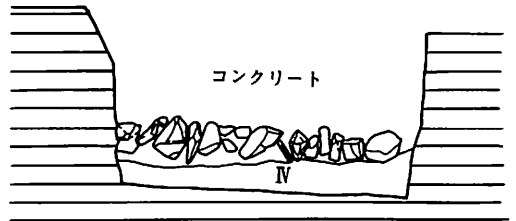
Na.3 トレンチ西壁



Na.3 トレンチ北壁

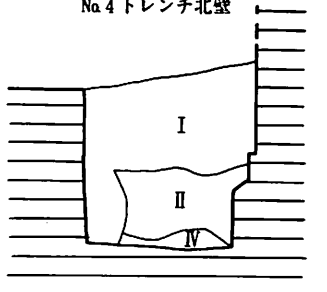


Na.4 トレンチ北壁

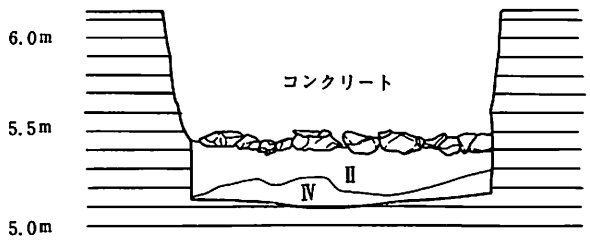


Na.4 トレンチ東壁

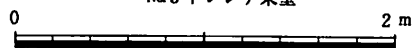
- ① 攪乱
- ② 砂混じり黒褐色シルト質砂  
軽石を多く含む。
- ③ 黄褐色～灰白色砂層 軽石を  
含む。
- ④ 暗褐色粘質土



Na.5 トレンチ北壁



Na.5 トレンチ東壁



第12図 土層図 (1/40)

### 3. 調査の経過

建設工事では、プール上屋の基礎支柱部分にあたる14ヶ所を掘削する予定である。そのため、本試掘調査では、建設予定地の内、5ヶ所を調査することにした。プール東側は、1.8m×1.8mの正方形の区画を3ヶ所、本調査区として設定し、南からNo.1トレンチ、No.2トレンチ、No.3トレンチと呼称した。また、プール西側は1.8m×0.8mの長方形の区画を2ヶ所設置し、北側からNo.4トレンチ、No.5トレンチを設定した（第11図）。

全トレンチとも取設工事計画が地表下80cmまでの掘削予定であったため、本試掘調査も90cm程度の掘り下げを行ったところ、地山と考えられる砂層が検出したため、その時点で調査を終了した。

この結果、プール造成時の攪乱と思われる既掘部が広がっていたが、No.1トレンチとNo.5トレンチでは、成川式土器を主体とする遺物包含層および遺構が残存していた。

### 4. 基本層位（第12図）

基本層として、I～IV層を確認した。以下、その説明を行う。

I層 客土および攪乱部。

II層 黒色のシルト層。硬くしまっており、オレンジ色のパミスおよび軽石を含む。

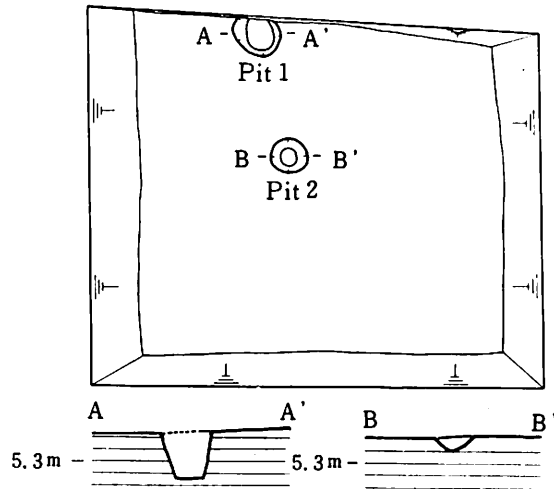
III層 茶褐色のシルト層。硬く粒子が細かい。オレンジ色のパミスおよび軽石を含む。

IV層 黄灰色の粗い砂層。2～8cm大の軽石礫を多く含む。

II層から多量の成川式土器や須恵器などの遺物が出土している。

### 5. 遺構（第13図）

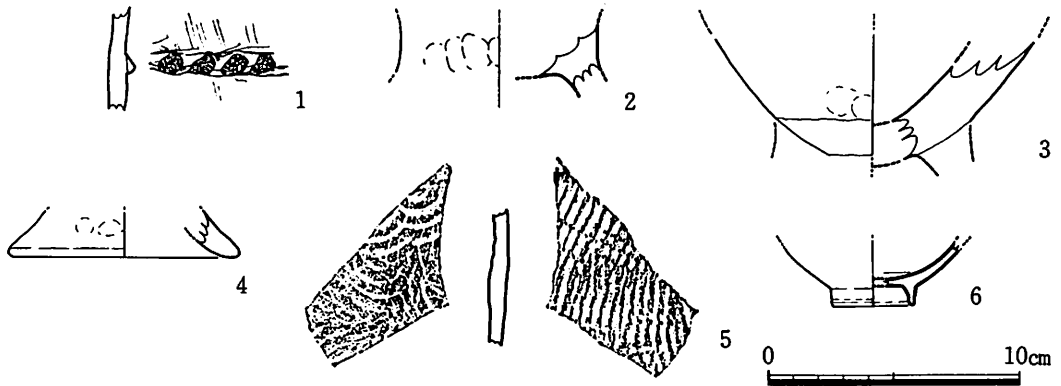
No.1トレンチより、ピットを2基検出した。検出面は、IV層上面であったが、埋土がいずれもII層土であるため、おそらくIII層上面からの掘込みであつたらうと推定できる。なお、ピット1については、西壁の観察の結果、III層上面からの掘込みであることは確実である。ピット1は検出面で、直径19cm、深度約20cm、ピット2は直径15cm、深度約5cmを測る。両ピットからは遺物は出土しなかった。



第13図 検出遺構（1/30）

### 6. 遺物（第14～15図）

本調査区からは、土器・須恵器・陶磁器が出土しており、土器は成川式土器が中心である。また、II層からの出土遺物が主体を占める。本稿では、図化できるもののみ各層ごとに図示し、説



第14図 出土遺物(1) (1 / 3)

明を加える。

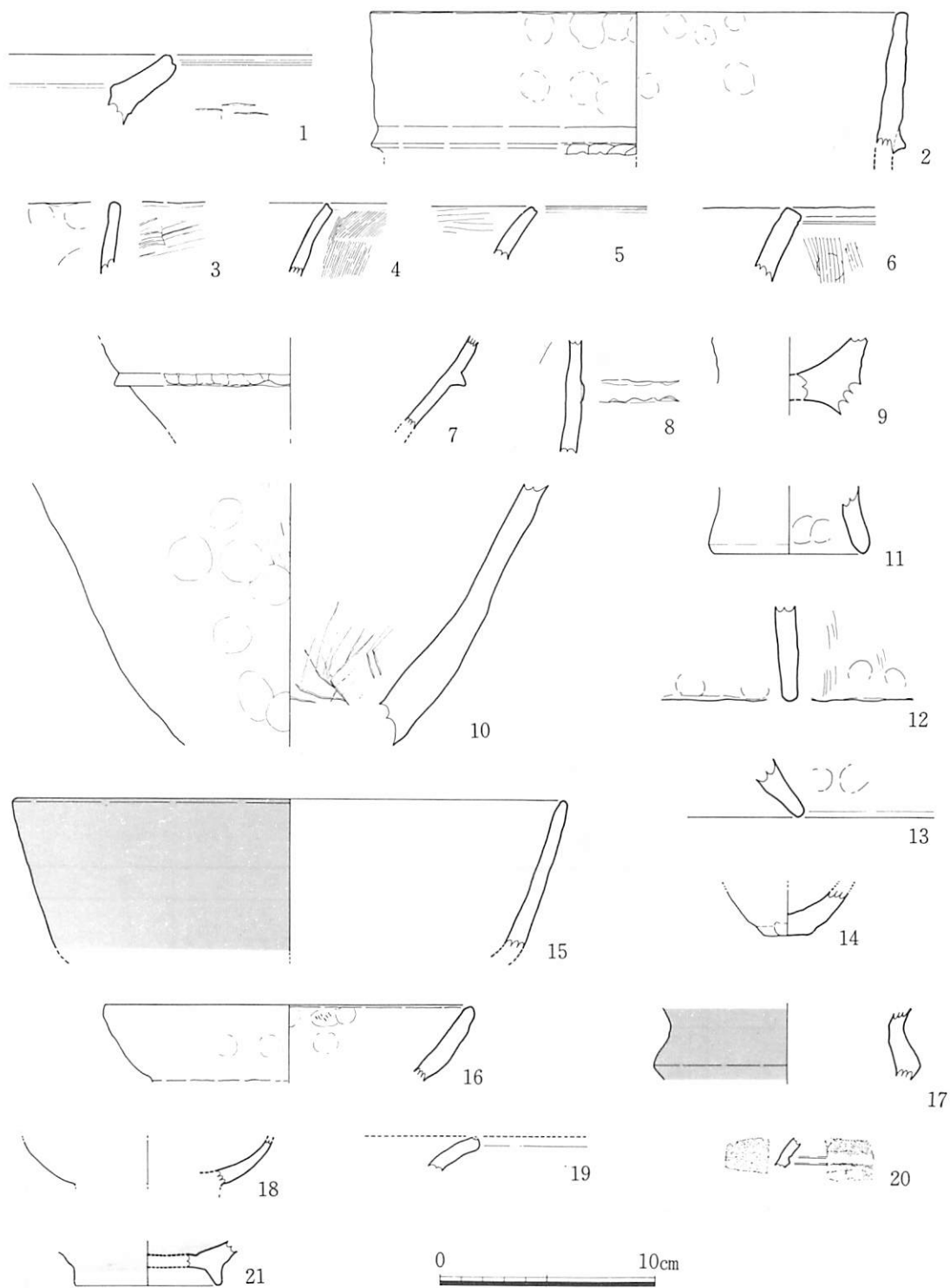
#### I層出土土器 (第14図)

第14図は、I層から出土したものである。1～4は、いわゆる成川式土器の甕である。1は、突帯部で、突帯は断面三角形を呈し、刻み目には、織布の圧痕が明瞭に残っている。2・3は甕の体部から脚部の接合部付近である。2は、脚台内面と外面にユビオサエの痕が明瞭である。3は脚部が接合部で剥落しており、体部に接合痕が明瞭に認められる。4は、脚部である。ハの字状に内傾し、先端部は丸く収められている。外側にユビオサエの痕が認められる。5は須恵器である。外面には格子目状のタタキ痕が、内面には同心円文状の当て具痕が明瞭に残っている。6は、磁器碗の底部である。全体に施釉しているが、高台畳付け部のみ釉が掻き取られている。

#### II層出土土器 (第15図)

第15図は、II層から出土したものである。1は甕の口縁部である。上面はわずかに内湾し、口唇部はヨコナデによって凹線状にくぼんでいる。頸部には非常に細かいハケ調整を施している。

2から13は、成川式土器の甕で、2～6は、口縁部である。2は、1条の突帯を持ち、ほぼ直立する口縁部である。口唇部には、外面・内面にユビオサエの痕が明瞭である。突帯は、断面三角形を呈し、突帯の下部はユビオサエの痕が明瞭であるが、上部はヨコナデによって平坦に仕上げられているため、若干絡縄突帯とは形態を異にする。3～6は口縁部である。3は口唇部が摩滅しているが、若干丸みを帯び、外面にはスガが付着している。4・5は若干外反する器形のもので、口唇部に平坦面を作り、ヨコナデによるくぼみも認められる。6は外傾する口縁部で、口唇部は平坦である。外面口唇部直下に細沈線を一条施している。7・8は突帯部である。7は、絡縄突帯である。8は、突帯がつぶれて平坦である。9は体部から脚部の接合部付近である。外面は非常に摩滅している。10は体部である。内面下部には、下から上の方に施しているハケ痕が放射状に認められる。11～13は脚部である。11はわずかに外反するが、端部は若干内すばまりである。12は、ほぼ直立するが端部は外面・内面ともユビオサエが明瞭である。13はハの字状に広がる脚部で、端部は丸みを帯びる。



第15図 出土遺物(2) (1 / 3)

14は小型の壺の底部である。側面をつまみ出しているため、底部が厚い。底面は平底だが、ユビオサエのため若干凹凸が認められる。

15は高杯の口縁部である。少し外に開きながら直立する器形を呈す。外面は、赤色顔料が付着しており、横方向の細かいミガキ調整が施されている。

16～18は器種は不明である。16は、内湾する口縁部だが、屈曲部で欠損している。17は、くの字状に屈曲する胴部を持つ。外面は、赤色顔料が施されているが、摩滅が著しいため、所々剥げている。18は頸部付近で、頸部から内湾しながら立ち上がる。胎土は精緻で、調整も丁寧である。

19・20は須恵器である。19は反りながら外へ開く口縁部である。虫食い状に剥落している。器種は不明である。20は瞭の頸部で、一条の突帯を持ち、その上部には波状文を施している。

21は、土師器碗の底部である。外面・内面に赤色顔料が付着しているが、摩滅が著しいため、かなり剥げている。

## 7. まとめ

本調査区一帯は、成川式土器を主体とする遺物包含層や遺構が広がっていると推定されていたが、今回の調査においても、成川式土器でも笹貫式と呼ばれる新しいタイプの多量の遺物を含む包含層とピットが検出された。当初考えられていたよりも、浅いレベルで遺物包含層が検出され、今後の周辺の掘削工事の際は、十分な注意が必要とされる。

ピットからは遺物は出土しなかったが、その埋土が遺物包含層であるⅡ層土であり、同時期の遺構である可能性は高い。昨年度発掘調査を行い、住居跡と考えられる遺構を検出した郡元団地Q-8・9区が近接し、また、本地点の東約600mには、やはり同時期の住居を検出した一宮遺跡が位置し、本調査区一帯にも住居などの遺構が存在する事が推定できるが、No.1トレンチのピットもその一部である可能性が高いと考えられる。

表2 土器観察表

図番号	器種	出土トレンチ	出土層	色調	胎土	調整	備考
14-1	壺	Na.3	I層	外面：明褐色。内面：灰褐色。	粗砂粒を含む、黒色粒・角閃石・石英。	外面：ハケ(?)のちナデ。内面：横方向のナデ。突帯部：布目圧痕によるきざみ目。	
14-2	壺	Na.2	I層	褐色。	粗砂粒を含む、白色粒、石英。	ナデ。	
14-3	壺	Na.1	I層	外面：黄褐色。内面：灰褐色。	粗砂粒を含む、白色粒・石英。	ナデ。	接合痕明瞭。
14-4	高杯	Na.2	I層	外面：濁灰褐色。内面：淡濁褐色。	砂粒を多く含む、白色粒。	ヨコナデ。	脚径(9.2)cm。
14-5	須恵器	Na.3	SK4	外面：(自然釉風化のため)乳白色。内面：暗茶褐色。	細砂粒を多く含む、白色粒。	タタキ。(外面：格子状のタタキ痕。内面：同心円文の当て具痕)	
14-6	碗	Na.4	I層	透明釉、白色。	白色。	高台皿付け部：無釉。他：施釉。	底径(3.2)cm。
15-1	壺	Na.1	Ⅱ層	外面頸部：黒色。他：褐色。	砂粒を多く含む、石英・カクセン石・白色粒。	口唇部付近：ヨコナデ。外面：ハケ(15本/cm)。内面：ナデ。	傾き不明。
15-2	壺	Na.5	Ⅱ層	外面：明褐色。内面：淡褐色。	粗砂粒・砂粒を含む、カクセン石・石英。	突帯部：ヨコナデ。他：ナデ。	口径(24.8)cm。

図番号	器種	出上トレンチ	出上層	色調	胎上	調整	備考
15-3	甕	Na.5	II層	外面：(スス付着のため)黒色、内面：明黄白色	粗砂粒・砂粒を含む、カクセン石・石英・赤色粒・白色粒。	外面：ハケ、内面：ナデ。	外面：スス付着。
15-4	甕	Na.1	II層	外面：明褐色、内面：淡濁褐色。	粗砂粒～細砂粒を含む、石英・白色粒・赤色粒。	外面：ハケ(11本/cm)のちナデ、内面：ナデ。	
15-5	甕	Na.5	II層	外面：暗褐色、内面：明茶褐色。	砂粒・細砂粒を含む、白色粒、カクセン石、石英。	口唇部～外面上部：ヨコナデ、外面下部：ナデ、内面：ハケ(5本/cm)のちナデ。	
15-6	甕	Na.5	II層	外面：暗濁褐色、内面：明褐色。	粗砂粒・砂粒を含む、石英・カクセン石・白色粒・黒曜石細片。	口唇部：ヨコナデ、外面：ハケ(6本/cm)のちナデ、内面：ナデ。	
15-7	甕	Na.5	II層	外面：濁褐色、内面：淡白褐色。	砂粒・細砂粒を含む、カクセン石、石英。	ナデ。	
15-8	甕	Na.5	II層	外面：明褐色～暗褐色、内面：灰褐色。	砂粒を多く含む、カクセン石、白色粒、赤色粒、金雲母。	外面：ナデ、内面：ハケ(?)のちナデ。	
15-9	甕	Na.5	II層	外面：橙白色、内面：暗茶褐色。	砂粒を含む、白色粒、カクセン石、石英、黒色粒。	外面：ハケ(?)のちナデ、内面：ナデ。	摩滅が著しい。
15-10	甕	Na.5	II層	濁灰褐色～淡黄褐色。	粗砂粒・砂粒を多く含む、カクセン石・石英、赤色粒、白色粒。	外面上部：ハケのちナデ、外面下部：ナデ、内面：ハケのちナデ。	
15-11	甕	Na.5	II層	外面：明褐色、内面：橙褐色。	砂粒を多く含む、カクセン石・白色粒・赤色粒・石英。	ナデ。	底径(7.4)cm。
15-12	甕	Na.5	II層	外面：明灰褐色～橙褐色、内面橙褐色。	砂粒を多く含む、石英、白色粒、カクセン石。	外面：ハケのちナデ、内面：ナデ。	
15-13	甕	Na.5	II層	明褐色。	砂粒を多く含む、カクセン石・白色粒・石英・赤色粒。	ナデ。	摩滅が著しい、傾き不明。
15-14	壺	Na.5	II層	外面：淡黄褐色、内面：淡褐色。	砂粒を含む、石英、白色粒、カクセン石。	ナデ。	底径(2.1)cm。
15-15	高坏	Na.5	II層	外面：赤色、内面：明褐色。	微細な砂粒を含む、白色粒・カクセン石。	外面：横方向のミガキ、内面：ハケのちナデ。	口径(25.7)cm、外面：赤色顔料付着。
15-16	不明	Na.1	II層	淡褐色。	砂粒を含む、白色粒・カクセン石・赤色粒・石英。	外面：ヨコ方向のナデ、屈曲部付近・内面：ハケのちヨコナデ。	口径(17.2)cm。
15-17	不明	Na.4	II層	外面：(赤色顔料付着のため)赤色、内面：灰褐色。	砂粒・細砂粒を多く含む、カクセン石、白色粒、石英。	外面：ミガキ、内面：ヨコナデ。	摩滅している。
15-18	不明	Na.5	II層	淡黄褐色。	微細な砂粒を含む。	外面：ヨコナデ、内面：ナデ。	
15-19	須恵器	Na.5	II層	灰色。	細砂粒を含む、白色粒・石英・黒色粒。	ヨコナデ。	
15-20	須恵器	Na.3	II層	外面：灰色、内面：灰白色。	細砂粒を含む、白色粒。	外面突帯部：ヨコナデ、内面：ナデ。	外面：波状文あり。
15-21	碗	Na.5	II層	外面・内面：(赤色顔料付着のため)赤色、脚台内面：黄白色。	細砂粒を含む、金雲母(?)・カクセン石。	回転ナデ。	高台器付け部：赤色顔料が剥けている。底径(6.8)cm。



# 第3章 鹿児島大学教育学部附属養護学校校舎建設予定地 における試掘調査報告

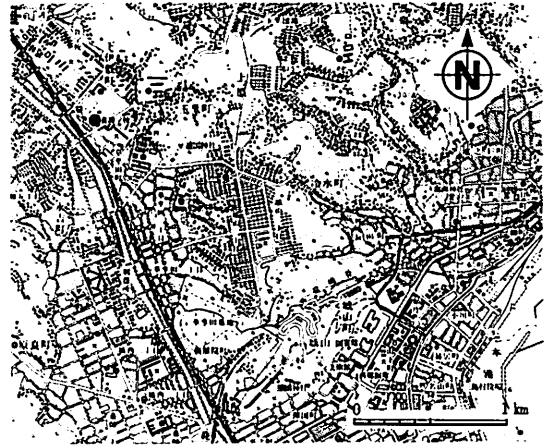
## 1. 調査に至る経過

鹿児島大学では、教育学部附属養護学校校舎の建設を計画している。予定されている地点は、鹿児島市下伊敷44-5に所在し（第16図）、弥生時代前期の遺物が出土した玉里遺跡の南約200mに位置している。そのため、埋蔵文化財調査室では、本建設予定地において発掘調査を実施し、埋蔵文化財包蔵の有無を確認することとなった。

## 2. 調査組織

本試掘調査は下記の体制で平成2年8月20日から8月3日まで行った。

調査主体者 鹿児島大学埋蔵文化財調査室長 上村俊雄  
調査担当 鹿児島大学埋蔵文化財調査室  
室長 上村俊雄  
室員 中村直子・栗林文夫・黒木綾子  
作業員 岩戸エミ子・狩集エミ子・名越ヒデ子・野下ヨブ子・盛満アイ子



第16図 教育学部附属養護学校位置図（1/50,000）

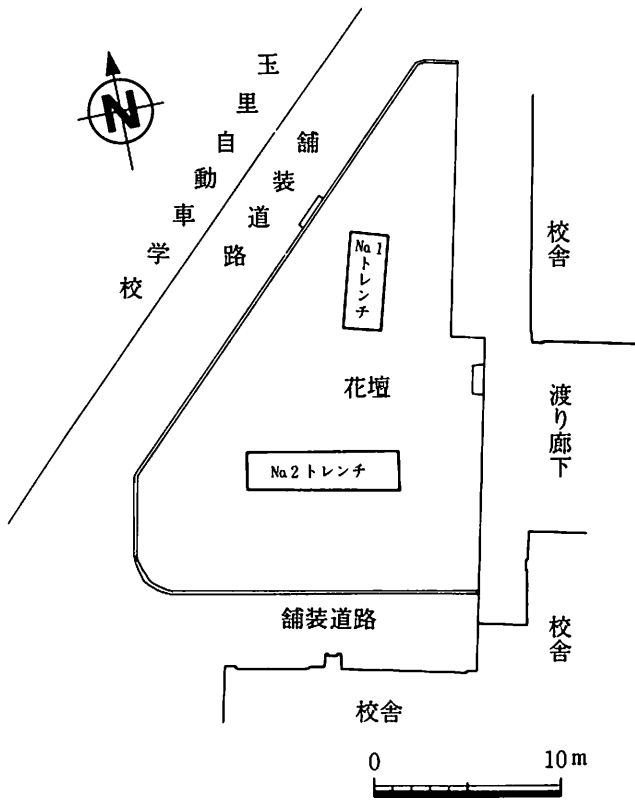
## 3. 調査の経過

今回の調査においては、東西方向に長軸をとる2×8mのトレンチと、南北方向に長軸をとる2×5mのトレンチを建設予定地の中心にT字状に設定し、北からNo.1トレンチ、No.2トレンチと呼称した（第17図）。

まず、客土を重機によって除去した。客土は1.5m堆積していた。その後、両トレンチを並行して掘り下げたが、調査期間の関係上、両トレンチにそれぞれ深掘部を設けた。両トレンチとも地表下約4mで地山の砂層を検出し、この時点で調査を終了した。

調査の結果、No.1トレンチは9層に、No.2トレンチは10層に分層できたが、遺構は確認できなかった。これらの土層のうち、両トレンチともⅠ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層からごく少量の陶磁器、青磁、土器、瓦、木製品等が出土している。

## 4. 層序（第18～20図）



第17図 調査地点位置図 (1/400)

No.1 トレンチ、No.2 トレンチともIV層までは共通した土層の堆積状態であったが、それより下層は異なっており、両トレンチの対応関係については明確にできなかった。以下、各トレンチごとに説明することにする。

**No.1 トレンチ**

- I層 客土。
- II層 灰色シルト質砂。粒子が粗く、1 cm大の軽石を含む。
- III a層 黄灰色粗砂層。1～2 cm大のオレンジ色の軽石を含む。
- III b層 赤褐色粗砂層。1 cm大のオレンジ色の軽石を含む。部分的にIV層をブロック状に含む。1～2 cm大の軽石を含む。

**IV層 明灰褐色を基調とする砂**

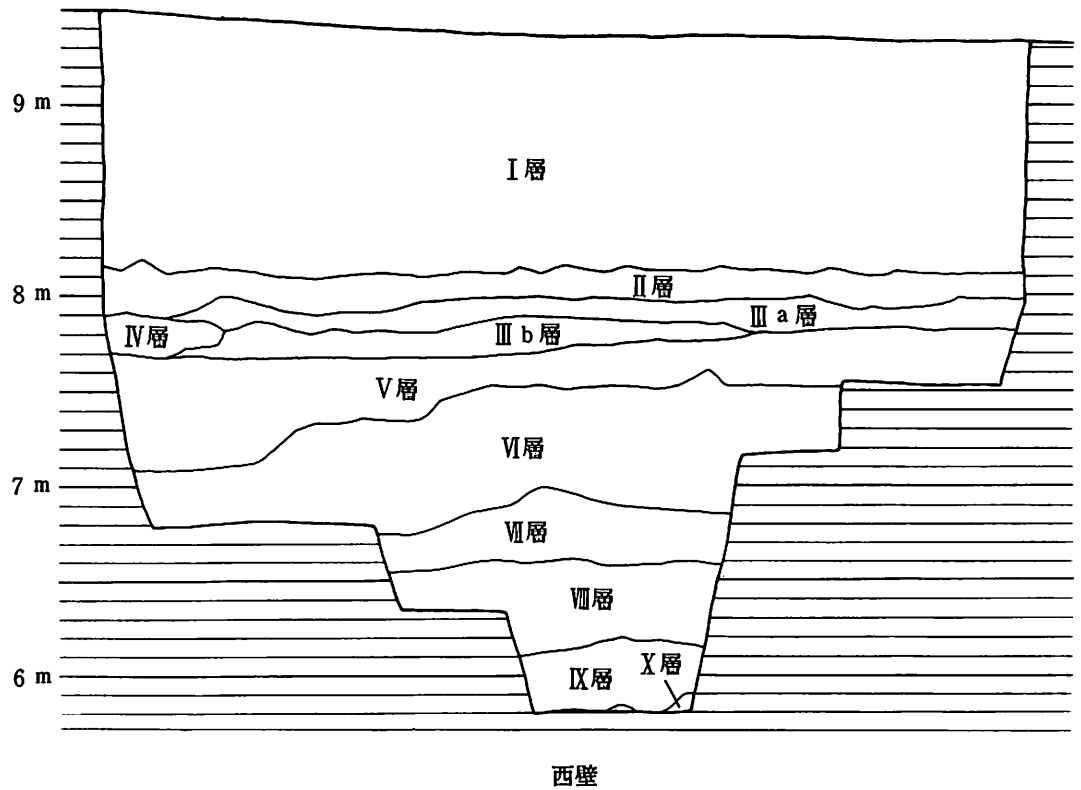
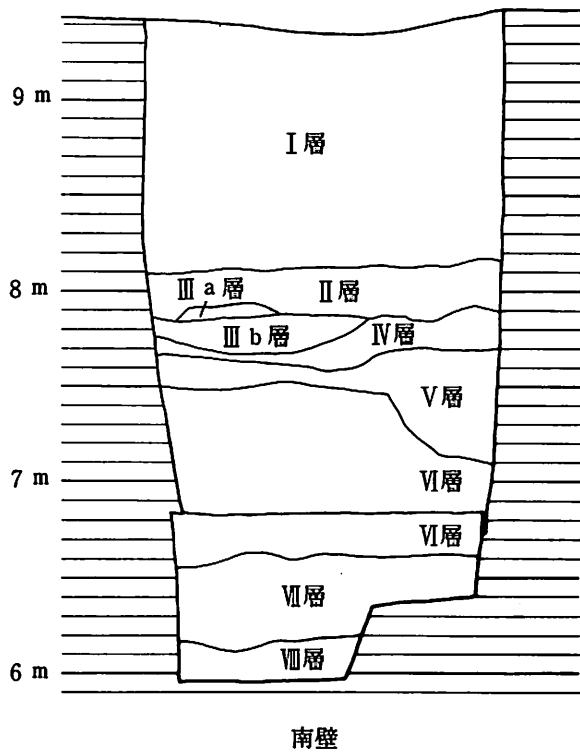
質シルト層。黒灰色の粘質土をブロック状に含む。1～2 cm大の軽石を含む。IV層下にIII b層がもぐり込んでいる箇所があるが、水性作用によるものと思われる。

- V層 灰褐色砂質シルト層。粒子は粗く、粗砂混じり。2～3 cm大の軽石を少し含む。
- VI層 灰褐色砂質シルト層。1～4 cm大の軽石を含む。
- VII層 暗灰褐色シルト層。1～3 cm大の軽石を含む。
- VIII層 明灰褐色細砂層。少し粘質である。
- IX層 青灰色細砂層。粒子が非常に細かい。水分を含み、粘質である。

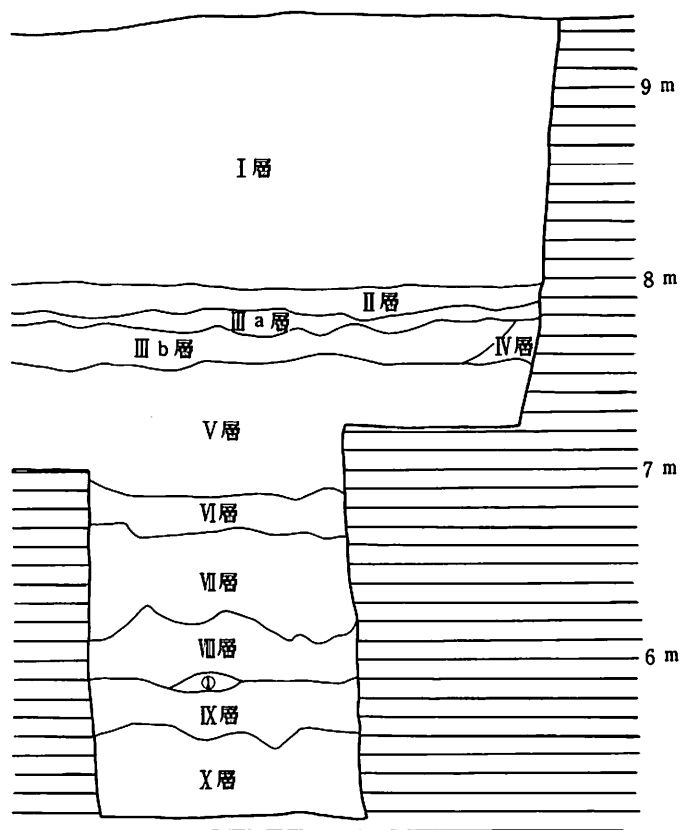
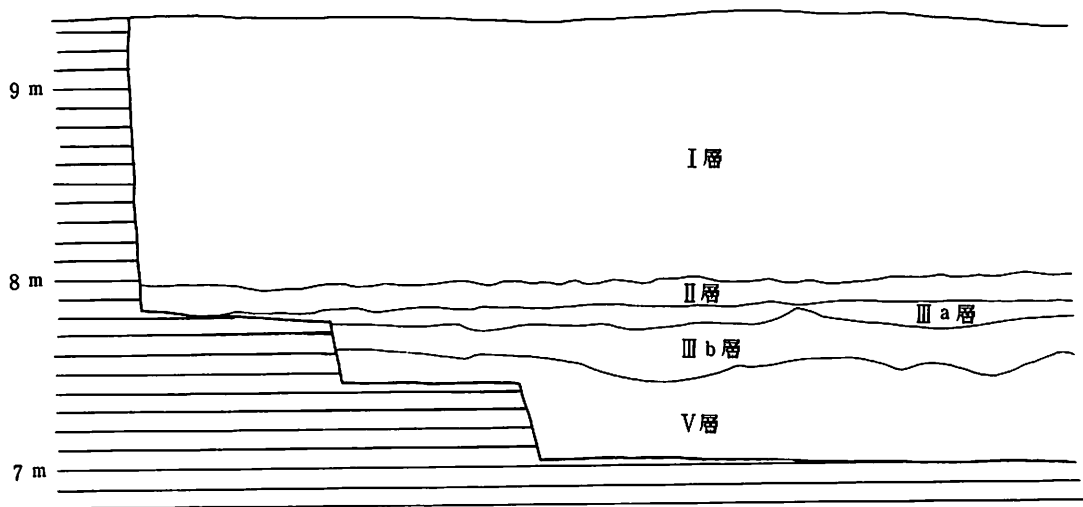
**No.2 トレンチ**

I～IV層は、No.1 トレンチのI～IV層に対応するため、ここではV層から説明を加えることにする。

- V層 灰色シルト層。粒子が細かい。0.5 cm大の軽石を多く含む。
- VI層 灰色砂質シルト層。2～3 cm大の軽石を含む。
- VII層 灰色シルト層。粒子が細かい。2～3 cm大の軽石を含む。
- VIII層 黒灰色を基調とするシルト層。黒灰色・黄白色の粘質土をブロック状に多く含む。3～4 cm



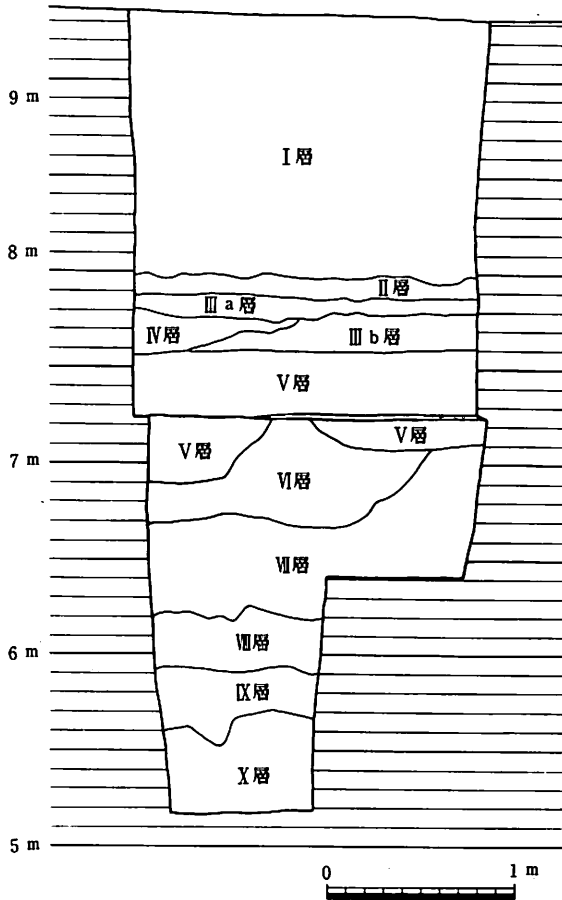
第18図 No.1トレンチ土層図 (1/40)



① 明茶褐色粗砂。  
軽石を含む。



第19図 No. 2 トレンチ南壁土層図 (1/40)



第20図 No. 2 トレンチ西壁 (1/100)

器碗の底部で全体に青灰白色の釉がかかっているが、畳付け部は釉を掻きとっている。外面には高台付け根から上部に、数条の圈線と縦線が施されている。4は、磁器碗の底部である。やや厚めの底部の中央部分を削ることにより、上げ底状の底部を作り出している。全体に明青白色の釉がかかっているが、畳付け部のみ釉を掻きとっており、無釉である。5は、陶器の鉢の口縁部である。口縁部はS字状に屈曲し、端部は丸く収められている。屈曲は比較的緩やかで稜線は鈍い。6は、陶器壺の底部である。外面は欠損しているため、ごく一部しか残っていないが、白色の呉須で文字が施されていたと観察でき、横方向のナデで丁寧に成形されている。内面は、ロクロ成形による跡が数条の凹線として残存しており、見込み部は若干盛り上がっている。底面には、目痕が残っており、砂粒が付着している。7は、須恵質の土器で、器種は不明であるが、壺か鉢の底部付近の破片と思われる。胎土に白色の砂粒を多く含む。外面の調整は粗雑な横方向のナデで、灰白色を呈し、若干摩滅している。8は、素焼きの鉢の底部である。平底から、わずかに内湾しながら立ち上がる形態を呈している。内外ともに摩滅している。

## 5. まとめ

本発掘調査地点は、弥生時代前期の遺物が出土した玉里遺跡に近接し、同時期の遺跡の存在が予

大の軽石を含む。

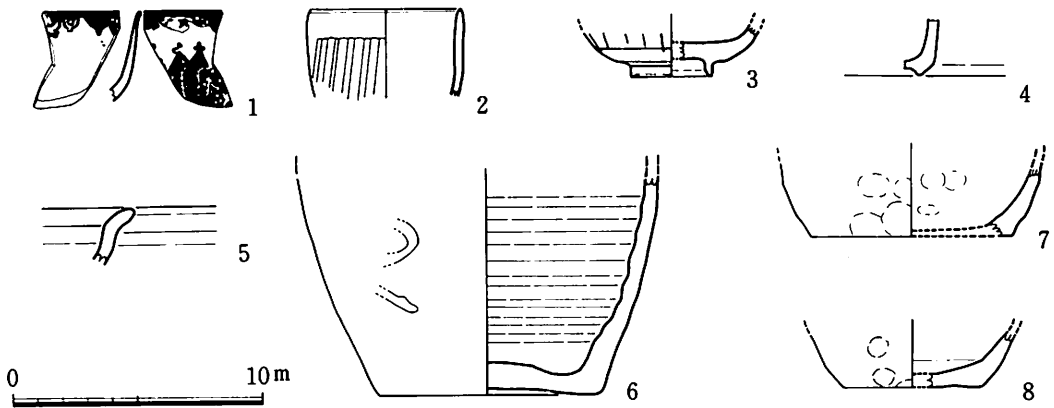
IX層 暗灰色細砂層。粒子が非常に細かい。

X層 明茶褐色粗砂層。軽石を含む。

## 4. 遺物 (第21図)

今回の調査では、I～V層より遺物が出土したが、いずれも小片で少量のものであった。ここでは、図示できる物のみ掲載し、説明を行うことにする。

1は、染付けの磁器碗である。口縁部は若干外反し、外面と内面口唇部に文様が施されている。2は、磁器碗の口縁部で、ほぼ直立した形態を呈する。胴部外面には縦位の刻線を連続して施し、内外面ともに青味を帯びた透明釉が全体にかかっている。3は、高台付き磁



第21図 出土遺物 (1/3)

想された。今回の調査では、土層の堆積状態が水性作用等による二次堆積とも考えられ、また、中・近世の陶磁器等が出土したものの、小片かつ少量であったため、それぞれの包含層の時期については確定できなかった。

表3 土器観察表

図番号	器種	出土トレンチ	出土層	色調・釉調	胎土・磁胎	調整・施文	備考
21-1	碗	Na 2	Ⅲ	白色	白色	施釉	磁器
21-2	碗	Na 1	Ⅳ	外面：薄い水色を帯びた白色。内面：白色	白色	ヘラケズリ	磁器
21-3	碗	排土中	表採	淡青灰色釉	淡灰白色	高台登み付け部：無釉；他：施釉	磁器
21-4	碗	Na 2	Ⅳ	淡青白色釉	白色。黒色細砂粒を含む	高台登み付け部：無釉；他：施釉	磁器
21-5	鉢	Na 2	Ⅲ	灰白色	灰白色	施釉	陶器
21-6	壺	Na 1	Ⅲ b	外面：暗茶色。内面：黒褐色	灰褐色	外面；ナデ。内面；ロクロによる凹線	陶器。底径(8.8) cm
21-7	壺	Na 1	Ⅲ	暗灰色	砂粒を含む	横方向のナデ	須恵質土器
21-8	碗	Na 1	Ⅳ	赤褐色	黒色粒・白色粒・セキエイ・カクセン石を含む	外面；ナデ。内面；ナデ・ハケ	底径(5.5) cm

## 第4章 平成2年度（平成2年4月～平成3年1月） 鹿児島大学構内における立合調査報告

平成2年4月から平成3年1月にかけて、下記の工事にともない、立合調査を実施した。

- ・法文学部屋外給水管改修工事（平成2年4月27日・5月1日、郡元団地K-5区）
- ・三井ホームとの共同研究にともなう実験住宅の建設（平成2年5月10日、郡元団地G・H-11・12区）
- ・農学部車庫南側漏水調査（平成2年5月23日、郡元団地C-4区）
- ・連合大学院農学研究科棟校舎新営空調和其他工事（平成2年5月22日・6月8日・12日・13日、郡元団地F-3・4区）
- ・工学部九州電力との共同研究にともなう電柱取設工事（平成2年7月18日、郡元団地H-10区）
- ・郡元地区量水器改修工事（平成2年8月31日・9月3・4・7・10・14日、郡元団地）
- ・連合大学院農学研究科棟周辺の環境整備（平成2年9月28日、郡元団地F-4区）

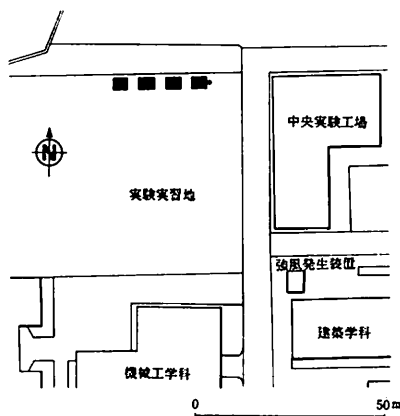
以下、順に調査結果について報告を行う。

### 法文学部屋外給水管改修工事に伴う立合調査（第5図）

本工事は、法文学部講義・研究棟の車庫北側において行われた。幅60cm、北へ3メートルにわたって地表下65cm掘削した。ほとんどが、水道管や電話線埋設のため、既掘部であったが、北から50cmの部分に、地表下45cmから粘質のある明褐色砂混じりシルトのプライマリーな層を確認した。この層からは遺物の出土はなかったが、攪乱土中より、土器片が2点出土しているため、今後埋蔵文化財の注意が必要となろう。

### 三井ホームとの共同研究にともなう実験住宅の建設に伴う立合調査（第22図）

本工事は、工学部中央実験工場の西、長さ東西約30m、幅5mの範囲に、3×4mの建築部が4カ所設定されたが、工事に先だて、工事範囲内に4カ所のポケットを設定し、工事対象地の様相を把握した。掘削は地表下30cmであったが、客土であることを確認した。また、本工事部の東側に電柱埋設のため、径50cm、地表下80cmの掘削を行ったが、これも客土であり、遺物包含層への影響はなかった。



第22図 立合調査地点位置図(1)（1/2,000）

### 農学部車庫南側漏水調査に伴う立合調査（第9図）

農学部の車庫南側を、1×1mの範囲において、地表下30～40cmほどの掘削を行ったが、配管埋

設のため、既掘部であり、埋蔵文化財への影響はなかった。

**連合大学院農学研究科棟新営空気調和其他工事に伴う立合調査（第23・24図）**

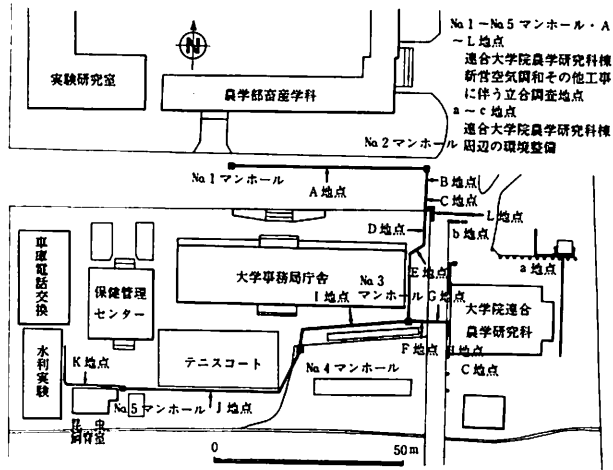
本工事は、大学本部周辺に5カ所のマンホールと、それらをつなぐ溝の掘削を行った。当該地は、平成元年に、発掘調査を行った郡元団地F-3・4区に近接し、掘削の結果、No.2マンホールにおいて郡元団地F-3・4区で検出した畦の続きと考えられる灰色の粘土層の一部の盛り上がりを確認できた（第24図）。マンホールは2×2mを地表下150cm、溝は幅60cm、地表下80cmから110cmにわたって掘削し、任意の地点で土層の観察を行った。ここでは、掘削が客土内にとどまったI～L地点を除いた各地点における土層観察結果について報告する。

**No.1 マンホール**

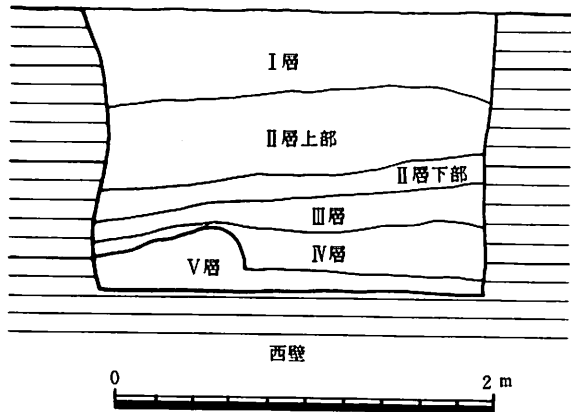
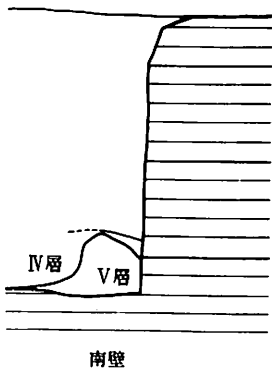
- I層 客土（層厚約75cm）
- II層 鉄分が浸透した粘質土（層厚約25cm）
- III層 黄白色から灰土白色の砂層（層厚約10cm）
- IV層 茶褐色味を帯びた灰色の粘土層（層厚約20cm）

**No.2 マンホール（第24図）**

- I層 客土及びアスファルト
- II層 上部：灰白色砂層（粒子が粗い）  
下部：灰褐色～茶褐色砂混じり軽石礫層。



第23図 立合調査位置図(2) (1/2,000)



第24図 No.2 マンホール土層図 (1/40)



Ⅲ層 灰白色～灰褐色細砂層

Ⅳ層 灰白色～明灰褐色細砂層

Ⅴ層 灰色シルト層（鉄分の浸透がみられる）

西壁と南壁において、畦と思われる高まりが確認できた。基底部約60cm、高さ20cmを測り、Ⅴ層土を集土して造成している。方向は、北西－南東方向に延びていると観察できる。平成元年の郡元団地F-3・4区の発掘調査において検出した畦と同一層であり、調査区外での遺構の広がりを確認できた。

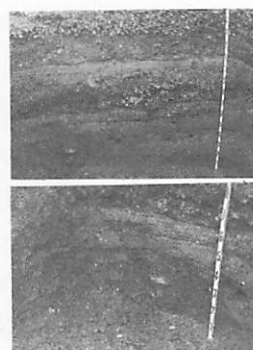


写真2 No.2マンホール検出畦

No.3マンホール

Ⅰ層 客土（層厚約140cm）

Ⅱ層 粘土層 郡元団地F-3・4区のⅡa層に対応するものと考えられる。（層厚約7cm）

Ⅲ層 灰色の粘土層 郡元団地F-3・4区のⅡb層に対応する。（層厚約10cm）

No.4マンホール

Ⅰ層 客土（層厚約90cm）

Ⅱ層 客土 灰色粗砂混じり粘質のシルトと黄褐色粗砂混じり粘質シルトとの混土。（層厚約30cm）

Ⅲ層 灰色粘土 軽石礫を少し含む。（層厚約30cm）

Ⅳ層 鉄分を含む淡褐色～灰白色の砂層



写真3 No.5マンホール検出畦

No.5マンホール

Ⅰ層 客土（層厚約80cm）

Ⅱ層 灰色の粘土層（層厚約25cm）

Ⅲ層 淡褐色の砂混じり灰色粘土層

土層観察は西壁で行ったが、南端60cmの部分に、畦と思われる土層の高まりが確認できた。基底部幅40cm、高さ13cmを測り、Ⅴ層土を集土して造成したと思われる。他の壁の観察を行ったが、南北壁どちらかの既掘部にあたる西側幅70cmほどの間にあると思われ、残存部においては畦の方向を確認できなかった。

A地点

幅60cm、地表下80～90cmの掘削が行われた。

Ⅰ層 客土（層厚約75cm）

Ⅱ層 濁灰褐色粗砂混じりシルトと明褐色粗砂混じりシルトの混土層。これは、東側では、漸意的に明褐色の粗砂層に変わる。

Ⅲ層 灰褐色の粘質土

排土中より現代のものと思われる陶磁器、瓦片が出土している。

B地点

Ⅰ層 客土（層厚135cm）

Ⅱ層 灰色の粘質土（層厚約15cm）

Ⅲ層 青みがかった灰色の粘質土（軽石礫を含む）

C地点

I層 客土(層厚135cm)

II層 灰色の粘質土

E地点

I層 客土(層厚110cm)

II層 淡褐色砂層(層厚40cm)

III層 灰色粘質土

F地点

地表下120cmまで掘削を行った。配管のため大部分が既掘部であったが、東側に若干プライマリーな層が残存しており、その部分について説明を行う。

I層 客土(層厚80cm)

II層 灰白色の砂混じりシルト層(郡元団地F-3・4区発掘調査のI b層に対応する。)

G地点

I層 客土(層厚85cm)

II層 灰白色砂混じりシルト層(郡元団地F-3・4区発掘調査のI b層に対応する。層厚15cm)

H地点

東半分は郡元団地F-3・4区の発掘調査地区内であるため、西半分についてのみ土層観察を行ったところ、G地点と堆積状態は同じであった。

連合大学院農学研究科棟新営空調和其他工事に伴う立合調査(第23図)

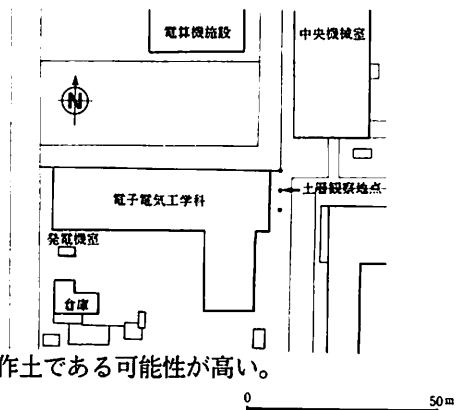
連合大学院農学研究科棟周辺を、幅60cm、地表下80cmにわたって溝状に掘削を行ったが、盛土のため、埋蔵文化財への影響はなかった。

工学部九州電力との共同研究にともなう電柱取設工事に伴う立合調査(第25図)

工学部電気電子工学科棟東側に3カ所、地表下150~170cmの掘削を行い、No.1地点での土層観察を行った。

I層 客土(層厚130cm)

II層 灰褐色砂混じりシルト層 鉄分を含み、水田耕作土である可能性が高い。



第25図 立合調査地点位置図(3) (1/2,000)

郡元地区量水器改修工事に伴う立合調査(図版1)

本工事は、量水器改修工事に伴うものである。工事を行う箇所の内、19カ所の立合調査を行った。ほとんど水道管埋設などのため、既掘部で、プライマリーな層は残っていなかったが、第8地点、第11地点、第19地点の3カ所はプライマリーな層が残存していた。このうち、教養部講義棟北の第11地点は、黒色土から成川式土器と考えられる土器片も数点出土しており、遺物包含層の存在が確認できた。これらの地点では、土層観察を行い、ここでは、これそれぞれについて報告する。

#### 第8地点

工学部車庫東側を地表下40cm掘削し、そこから車庫北側を幅40cmの溝状に深さ50cmにわたって掘削を行った。

I層 客土(層厚25cm)

II層 茶褐色砂質シルト層

#### 第11地点

教養部講義棟の北西隅において、地表下105cmまで掘削を行った。

I層 客土(層厚70cm)

II層 黒色砂質シルト層 軽石を少し含む。

II層より成川式土器と考えられる土器片が出土しており、理学部から教養部へ広がる成川式土器の包含層が、本地点において確認でき、同包含層の分布範囲を知る上での参考となる。

#### 第19地点

附属小学校校舎北側を、地表下160cmにわたって掘削を行った。この地点では、掘削工事を行った後で、本工事の連絡を受けたため、立合調査を行えず、土層観察のみにとどまった。

I層 客土(層厚80cm)

II層 茶褐色砂質シルト層(層厚40cm)

III層 黒褐色砂質シルト層(層厚20cm) IV層 軽石礫層(層厚20cm)

V層 茶褐色粗砂層

このうち、III層は附属中学校・小学校敷地一帯に広がる成川式土器包含層に同質であるが、露出している土層壁では、遺物の包含は確認できなかった。

#### 連合大学院農学研究科棟周辺の環境整備に伴う立合調査(第23図)

本工事では、連合農学研究科棟周辺、A・B・C3地点において、掘削を行ったが、地表下30～45cmと浅く、いずれも客土の掘削にとどまったため、埋蔵文化財への影響はなかった。

## 鹿児島大学構内遺跡調査要項

### ・鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則

(設 置)

第1条 本学に、鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(審 議)

第2条 委員会は、本学の施設計画を円滑に行なうため埋蔵文化財に関する次の事項を審議する。

- (1) 基本計画の策定に関すること。
- (2) 調査結果に基づく対策に関すること。

(組 織)

第3条 委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 学長
- (2) 各学部長、教養部長、附属図書館長、医学部附属病院長及び歯学部附属病院長
- (3) 事務局長
- (4) 学生部長

(委 員 長)

第4条 委員会に委員長を置き、学長をもって充てる。

- 2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

(議 事)

第5条 委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立し、議事は出席委員の3分の2以上をもって決する。

(委員以外の者の出席)

第6条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことができる。

(調査委員会)

第7条 委員会は、本学の埋蔵文化財の調査を行なうため、埋蔵文化財調査委員会（以下「調査委員会」という。）を置く。

第8条 調査委員会は次の事項を審議する。

- (1) 調査実施計画に関すること。
- (2) 第13条に規定する調査室の室長等の選任に関すること。
- (3) 第13条に規定する調査室の予算に関すること。
- (4) その他埋蔵文化財及び第13条に規定する調査室の業務に関すること。

第9条 調査委員会は、次に掲げる委員をもって組織し、学長が任命する。

- (1) 各学部及び教養部の教授、助教授、講師の中から選任された者各1名
- (2) 第15条2項に規定する調査室長

2 前項第1号の委員の任期は2年とし、委員に欠員を生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

第10条 調査委員会に委員長を置き、前項第1項第1号の委員の中から互選により選出する。

2 委員長は委員会を招集し、その議長となる。

第11条 調査委員会は、委員の過半数の出席をもって成立し、議事は、出席委員の過半数をもって決する。

第12条 調査委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことができる。

(調査室)

第13条 調査委員会に、本学の埋蔵文化財の調査に関する業務を行なうための埋蔵文化財調査室(以下「調査室」という。)を置く。

第14条 調査室は、次の業務を行なう。

- (1) 調査実施計画の立案
- (2) 発掘調査、分布調査及び確認調査
- (3) 調査報告書の作成
- (4) その他必要な事項

第15条 調査室に、室長、主任及びその必要な職員を置く。

2 室長は、本学の考古学に関する教官の中から委員会が推薦し、学長が任命する。

3 室長は、調査委員会の定める方針に基づき調査室の業務を掌理する。

4 室長の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

5 主任は、調査室の職員の中から、特に埋蔵文化財に関する専門知識を有する者を調査委員会が推薦し、学長が任命する。

6 主任は、室長の命を受けて調査室の業務を処理する。

7 職員は、調査室の業務に従事する。

(その他)

第16条 埋蔵文化財に関する事務は、事務局施設部において行なう。

## 付 則

1 この規則は、昭和60年4月18日から施行する。

2 この規則の施行後最初に任命される委員及び室長の任期は、第9条第2項及び第15条第4項の規定にかかわらず、昭和62年3月31日までとする。

3 鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則(昭和51年1月22日制定)は、廃止する。

・鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会委員(平成2年4月1日現在)

委員長 井形 昭弘(鹿児島大学学長)

委員 中村 雅麿(法文学部長)

早坂 祥三(理学部長)

浅地 明(教育学部長)

松本 啓(医学部長)

仙波 輝彦 (歯学部長)	立川 正夫 (工学部長)
植木 健至 (農学部長)	平田 八郎 (水産学部長)
荒川 讓 (教養部長)	河原田禮次郎 (連合農学研究科長)
朝倉 哲彦 (医学部附属病院長)	税所 俊郎 (附属図書館長)
辰村 吉康 (学生部長)	自見 忠 (歯学部附属病院長)
伊藤才一郎 (事務局長)	

・鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会委員 (平成2年4月1日現在)

委員長 難波 直彦 (農学部教授)	
委員 梶尾 達哉 (法文学部助教授)	安藤 保 (教育学部教授)
稲田 浩一 (理学部助教授)	秋山 伸一 (医学部教授)
浦郷 篤史 (歯学部教授)	入佐 俊幸 (工学部教授)
中村 薫 (水産学部助教授)	新田 栄治 (教養部助教授)
上村 俊雄 (調査室長併任 法文学部教授)	

・鹿児島大学埋蔵文化財調査室 (平成2年4月1日現在)

室長 (併)	法文学部教授	上村 俊雄
主任 (併)	法文学部助手	松永 幸男
(併)	法文学部助手	中村 直子
	技術補佐員	栗林 文夫
	技術補佐員	黒木 綾子

# 受贈図書目録(1990年2月1日～1991年1月31日)

書名	発行機関	発行年
<b>単行本</b>		
神奈川県 <small>の</small> 遺跡	神奈川県教育委員会	1990年
銅鐸講演会記録集	勸八尾市文化財調査研究会	1990年
日本古代葬制の考古学的研究	大阪大学文学部考古学研究室	1990年
ヨーロッパに眠る日本の宝 シーボルト・コレクション	㈱文藝春秋・勸シーボルト・カウンスル	1990年
豊後キリシタン史	大分市歴史資料館	1990年
野鳥はともだちー沖縄県の探鳥地ー	沖縄県立博物館	1990年
<b>定期刊行物・雑誌・冊子</b>		
調査年報2 平成元年度	勸北海道埋蔵文化財センター	1989年
東北大学埋蔵文化財調査年報3	東北大学埋蔵文化財調査委員会	1990年
埋文 あおもり 第9号	青森県埋蔵文化財調査センター	1990年
横浜市天屋遺跡調査の概要	神奈川県立埋蔵文化財センター	1990年
神奈川の考古学 第1集	神奈川県立埋蔵文化財センター	1990年
秦野市草山遺跡調査の概要	神奈川県立埋蔵文化財センター	1990年
神奈川県立埋蔵文化財センター年報9 平成元年度	神奈川県立埋蔵文化財センター	1990年
君津郡市文化財センター 研究紀要Ⅲ	勸君津郡市文化財センター	1989年
ほりのうち Na13	市立市川考古・歴史博物館	1990年
昭和63年度市立市川考古博物館年報(年報Na17)	市立市川考古博物館	1990年
千葉県立房総風土記の丘だより 第19号	千葉県立房総風土記の丘	1990年
年報9 平成元年度	勸茨城県教育財団	1990年
歴史人類 第18号	筑波大学歴史・人類学系	1990年
名古屋市博物館研究紀要 第13巻	名古屋市博物館	1990年
名古屋市博物館だより 72	名古屋市博物館	1990年
名古屋市博物館だより 73	名古屋市博物館	1990年
名古屋市博物館だより 74	名古屋市博物館	1990年
名古屋市博物館だより 75	名古屋市博物館	1990年
名古屋市博物館だより 76	名古屋市博物館	1990年
名古屋市博物館だより 77	名古屋市博物館	1990年
金大考古 第18号	金沢大学考古学研究室	1990年
金沢大学資料館だより 第1号	金沢大学資料館	1990年
福井ミュージアム Na18	福井県立博物館	1990年
三重県埋文センター通信 みえ Na1	三重県埋蔵文化財センター	1990年
三重県埋文センター通信 みえ Na2	三重県埋蔵文化財センター	1990年
滋賀埋文ニュース 第119号	滋賀県埋蔵文化財センター	1990年

滋賀埋文ニュース 第120号	滋賀県埋蔵文化財センター	1990年
滋賀埋文ニュース 第121号	滋賀県埋蔵文化財センター	1990年
滋賀埋文ニュース 第122号	滋賀県埋蔵文化財センター	1990年
滋賀埋文ニュース 第123号	滋賀県埋蔵文化財センター	1990年
滋賀埋文ニュース 第124号	滋賀県埋蔵文化財センター	1990年
滋賀埋文ニュース 第125号	滋賀県埋蔵文化財センター	1990年
滋賀埋文ニュース 第126号	滋賀県埋蔵文化財センター	1990年
滋賀埋文ニュース 第127号	滋賀県埋蔵文化財センター	1990年
滋賀埋文ニュース 第128号	滋賀県埋蔵文化財センター	1990年
滋賀埋文ニュース 第129号	滋賀県埋蔵文化財センター	1990年
大阪市文化財情報 葦火 24号	財大阪市文化財協会	1990年
大阪市文化財情報 葦火 25号	財大阪市文化財協会	1990年
大阪市文化財情報 葦火 26号	財大阪市文化財協会	1990年
大阪市文化財情報 葦火 27号	財大阪市文化財協会	1990年
大阪市文化財情報 葦火 28号	財大阪市文化財協会	1990年
大阪市文化財情報 葦火 29号	財大阪市文化財協会	1990年
東大阪市文化財協会ニュース Vol. 4, No. 4	財東大阪市文化財協会	1990年
東大阪市文化財協会ニュース Vol. 5, No. 1	財東大阪市文化財協会	1990年
八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度	財八尾市文化財調査研究会	1990年
ひらかた文化財だより 第3号	財枚方市文化財研究調査会	1990年
ひらかた文化財だより 第4号	財枚方市文化財研究調査会	1990年
ひらかた文化財だより 第5号	財枚方市文化財研究調査会	1990年
高槻市文化財年報 昭和61・62年度	高槻市教育委員会	1989年
京都府埋蔵文化財情報 第34号	財京都府埋蔵文化財調査研究センター	1990年
京都府埋蔵文化財情報 第35号	財京都府埋蔵文化財調査研究センター	1990年
京都府埋蔵文化財情報 第36号	財京都府埋蔵文化財調査研究センター	1990年
京都府埋蔵文化財情報 第37号	財京都府埋蔵文化財調査研究センター	1990年
京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度	京都大学埋蔵文化財研究センター	1990年
榎原考古学研究所年報15 昭和63年度	奈良県立榎原考古学研究所	1990年
文化財学報 第6集	奈良大学文学部文化財学科	1988年
昭和63年度 遺跡現地説明会資料	神戸市教育委員会	1989年
地下に眠る神戸の歴史展	神戸市教育委員会	1989年
昭和61年度 神戸市埋蔵文化財年報	神戸市教育委員会	1989年
八雲立つ風土記の丘 No.101	八雲立つ風土記の丘	1990年
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第3号	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	1990年
岡山大学構内遺跡調査研究年報 7	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	1990年
蒜山研究所研究報告 第15号	岡山理科大学蒜山研究所	1989年
広島県立歴史博物館ニュース 第2号	広島県立歴史博物館	1990年
広島県立歴史博物館ニュース 第3号	広島県立歴史博物館	1990年
広島県立歴史博物館ニュース 第4号	広島県立歴史博物館	1990年
広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報Ⅶ	広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会	1990年



山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ	山口大学埋蔵文化財資料館	1990年
徳島県博物館報 No.63	徳島県博物館	1990年
九州文化史研究所紀要 第35号 [考古学関係抜刷集]	九州大学文学部九州文化史研究施設	1990年
福岡市博物館だより 創刊号	福岡市博物館	1990年
福岡市立歴史資料館研究報告 第14集	福岡市立歴史資料館	1990年
福岡市立歴史資料館年報 No.14	福岡市立歴史資料館	1990年
本渡市立歴史民俗資料館だより No.6	本渡市立歴史民俗資料館	1990年
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館年報 1989	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	1990年
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館ニュース No.20	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	1990年
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館ニュース No.21	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	1990年
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館ニュース No.22	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	1990年
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館ニュース No.23	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	1990年
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館ニュース No.24	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	1990年
大分市歴史資料館年報 1989年	大分市歴史資料館	1990年
鹿児島大学情報処理センター広報 Vol. 3, No.1	鹿児島大学情報処理センター	1990年
鹿児島大学南科研資料センター報告 No.43	鹿児島大学南方科学研究資料センター	1990年
鹿児島大学南科研資料センター報告 No.44	鹿児島大学南方科学研究資料センター	1990年
鹿児島大学南科研資料センター報告特別号第3号	鹿児島大学南方科学研究資料センター	1990年
鹿児島大学南方科学研究委員会総合研究 昭和62・63年度 桜島		1990年
川内市歴史資料館資料目録(5) 図書資料	川内市歴史資料館	1990年
川内市歴史資料館年報 平成元年度	川内市歴史資料館	1990年
南九州 縄文通信 No.3	南九州縄文研究会	1990年
県立博物館 総合調査報告書Ⅶ-浜比嘉島-	沖縄県立博物館	1990年
沖縄県立博物館紀要 第16号	沖縄県立博物館	1990年
沖縄県立博物館年報 No.23	沖縄県立博物館	1990年
沖縄県立博物館だより	沖縄県立博物館	1990年
調査報告書		
釧路市幣舞遺跡調査報告書	北海道釧路市教育委員会	1990年
釧路市材木町5遺跡調査報告書Ⅱ	北海道釧路市埋蔵文化財調査センター	1990年
下鶴間甲1号墳 第3次調査	下鶴間甲1号遺跡調査団	1990年
神奈川県埋蔵文化財調査報告 32	神奈川県埋蔵文化財センター	1990年
宮久保遺跡Ⅲ	神奈川県埋蔵文化財センター	1990年

天屋遺跡	神奈川県立埋蔵文化財センター	1990年
宮ヶ瀬遺跡群 I	神奈川県立埋蔵文化財センター	1990年
草山遺跡 III	神奈川県立埋蔵文化財センター	1990年
海老名本郷遺跡 (VI)	富士ゼロックス株式会社	1990年
千葉県木更津市 蔵玉砦跡	蔵玉台土地改良区・(財)君津都市文化財センター	1990年
千葉県富津市 三条塚古墳	富津市教育委員会・(財)君津都市文化財センター	1990年
小浜遺跡群 II マミヤク遺跡	木更津市小浜土地区画整理組合・(財)君津都市文化財センター	1990年
千葉県木更津市 小浜遺跡群 III	木更津市小浜土地区画整理組合・(財)君津都市文化財センター	1990年
一般国道 4 号線改築工事地内埋蔵文化財調査報告書 3 (三和地区)	(財)茨城県教育財団	1990年
柴崎遺跡 I 区・柴崎遺跡 II - 1 区	(財)茨城県教育財団	1990年
永国地区	(財)茨城県教育財団	1990年
金木場遺跡・向畑遺跡	(財)茨城県教育財団	1990年
松原古墳群・松原遺跡・南谷津遺跡	(財)茨城県教育財団	1990年
森戸遺跡・北郷 C 遺跡	(財)茨城県教育財団	1990年
長峰遺跡	(財)茨城県教育財団	1990年
田宮古墳群	(財)茨城県教育財団	1990年
一丁田・櫛名社西遺跡	高崎市教育委員会	1988年
島野村東遺跡	高崎市教育委員会	1988年
道場遺跡群 (II) 谷津・道場遺跡	高崎市教育委員会	1988年
並榎北遺跡	高崎市教育委員会	1988年
矢中遺跡群 (X) 矢中村東遺跡	高崎市教育委員会	1988年
矢島竹之内遺跡	高崎市教育委員会	1988年
高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告	高崎市教育委員会	1988年
高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告書	高崎市教育委員会	1989年
柴崎遺跡群 (V)	高崎市教育委員会社会教育課文化財保護係	1989年
西横手遺跡群 (I)	高崎市教育委員会社会教育課文化財保護係	1989年
東町遺跡調査報告書	高崎市教育委員会社会教育課文化財保護係	1989年
特別史跡 金井沢碑・山上碑及び古墳保存対策検討の報告	高崎市教育委員会社会教育課文化財保護係	1989年
浜川北遺跡	高崎市教育委員会社会教育課文化財保護係	1989年
上中居辻薬師遺跡	高崎市教育委員会社会教育課文化財保護係	1989年
道場遺跡群	高崎市教育委員会社会教育課文化財保護係	1989年
愛知県西春日井郡師勝町 能田旭古墳 - 第 2 次発掘調査報告 -	南山大学人類学博物館	1989年
石川県鹿島郡鹿西町における考古学的分布調査概報 - 1989年度 -	金沢大学考古学研究室・(財)古代学協会北陸支部	1990年
難波宮跡・大阪城跡発掘調査中間報告 II	(財)大阪市文化財協会	1990年

大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 昭和63年度	大阪市内文化財協会・大阪市教育委員会	1990年
鬼虎川遺跡調査概要Ⅰ 遺物編 木製品	財東大阪市文化財協会	1988年
神並古墳群遺跡第3次発掘調査報告	財東大阪市文化財協会	1990年
財東大阪市文化財協会概報集 1989年度	財東大阪市文化財協会	1990年
鬼虎川遺跡第1-3次発掘調査報告	財東大阪市文化財協会	1990年
吉田遺跡 第1次発掘調査報告	財東大阪市文化財協会	1989年
鬼虎川遺跡第31次発掘調査報告	財東大阪市文化財協会	1990年
若江遺跡第32・33次発掘調査報告	財東大阪市文化財協会	1990年
西ノ辻遺跡第21次発掘調査報告	財東大阪市文化財協会	1990年
八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 昭和63年度	財八尾市文化財調査研究会	1989年
亀井遺跡-南亀井町4丁目41-1の調査-	財八尾市文化財調査研究会	1989年
水越遺跡(第1次調査)・竹淵遺跡(第1次調査) ・恩智遺跡(第1次調査)	財八尾市文化財調査研究会	1989年
矢作遺跡(第1次調査)・矢作遺跡(第2次調査) ・花岡山遺跡(第1次調査)	財八尾市文化財調査研究会	1989年
福万寺遺跡-上之島町北3丁目22-1の調査-	財八尾市文化財調査研究会	1990年
跡部遺跡-八尾市春日町出土-銅鐸	財八尾市文化財調査研究会・八尾市教育委員会	1989年
嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要14	高槻市教育委員会	1990年
長法寺南原古墳Ⅳ	大阪大学南原古墳調査団	1990年
雪野山古墳-第1次発掘調査概報	大阪大学文学部考古学研究室	1990年
鳥居前古墳-総括編-	大阪大学文学部考古学研究室	1990年
満久谷遺跡	河内城・満久谷遺跡調査会・奈良大学考古学研究室	1989年
奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成元年度	奈良市教育委員会	1990年
平城京東市跡推定地の調査Ⅶ 第10次発掘調査概報	奈良市教育委員会	1990年
神戸市須磨区 戎町遺跡第1次発掘調査概報	神戸市教育委員会	1989年
日暮遺跡発掘調査報告書	神戸市教育委員会	1989年
楠・荒田町遺跡Ⅲ	神戸市教育委員会	1990年
郡家遺跡-神戸市東灘区所在御影中町地区第3次調査概報-	神戸市教育委員会	1990年
狩口台遺跡発掘調査報告書	神戸市教育委員会	1990年
住吉宮町遺跡-第11次調査-	神戸市教育委員会	1990年
長田神社境内遺跡発掘調査概報	神戸市教育委員会	1990年
楠・荒田遺跡発掘調査概報-第5次-	神戸市教育委員会	1990年
舞子・東石ヶ谷遺跡Ⅱ	神戸市教育委員会	1990年
鹿田遺跡Ⅱ	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	1990年
草戸千軒町遺跡-第40・41次発掘調査概要-	広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	1990年
棕の木古墳・大石北谷古墳発掘調査報告書	長尾町教育委員会	1989年

文京遺跡第8・9・11次調査	愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室	1990年
津古生掛遺跡Ⅲ	小郡市教育委員会	1989年
みくに野第2土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書-14-総集編	小郡市教育委員会	1990年
横隈井の浦遺跡	小郡市教育委員会	1990年
大板井遺跡	小郡市教育委員会	1990年
津古土取遺跡	小郡市教育委員会	1990年
津古東宮原遺跡Ⅱ	小郡市教育委員会	1990年
津古牟田遺跡Ⅱ	小郡市教育委員会	1990年
津古脇田遺跡Ⅱ	小郡市教育委員会	1990年
力武宮脇遺跡・吹上南立石遺跡	小郡市教育委員会	1990年
中堂遺跡・長立寺跡	人吉市教育委員会	1990年
下堀切遺跡Ⅰ-熊本県八代市豊原町所在の遺跡の調査概要-	八代市教育委員会	1988年
下堀切遺跡Ⅱ-熊本県八代市豊原町所在の遺跡調査-	八代市教育委員会	1989年
下郡遺跡群	大分市教育委員会	1990年
相原廃寺Ⅱ・大下遺跡	中津市教育委員会	1990年
奈留地区遺跡	串間市教育委員会	1990年
久玉遺跡(第2次調査)・野々美谷遺跡・向原第1・2遺跡・竹山・胡麻ヶ野地区試掘調査	都城市教育委員会	1990年
東馬渡遺跡・馬渡遺跡	肝属郡根占町教育委員会	1990年
中島ノ下遺跡	指宿市教育委員会	1990年
後藤迫遺跡	鹿児島県肝属郡串良町教育委員会	1990年
水流遺跡・横井坂遺跡	鹿児島県肝属郡吾平町教育委員会	1990年
上原遺跡	鹿児島県肝属郡根占町教育委員会	1990年
立神遺跡	鹿児島県肝属郡田代町教育委員会	1990年
奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書Ⅱ	鹿児島県教育委員会	1990年
一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書(Ⅲ) 中ノ原遺跡(Ⅱ)・中原山野遺跡・西原掩体壕遺跡・前畑遺跡	鹿児島県教育委員会	1990年
榎木原遺跡Ⅲ	鹿児島県教育委員会	1990年
川原遺跡・屋根添遺跡他	鹿児島県薩摩郡東郷町教育委員会	1990年
鎌石遺跡・田吹野遺跡	鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会	1990年
前谷B遺跡	鹿児島県曾於郡松山町教育委員会	1990年
牧ノ段遺跡・香ノ田遺跡	鹿児島県曾於郡松山町教育委員会	1990年
松尾山遺跡	鹿児島県大口市教育委員会	1990年
一字治城跡-都市公園整備に伴う発掘調査概報-	鹿児島県日置郡伊集院町教育委員会	1990年
大園遺跡・桜木遺跡	鹿児島県日置郡吹上町教育委員会	1990年
塚ノ越遺跡・鳥越坂遺跡・内門堀遺跡	鹿児島県日置郡吹上町教育委員会	1990年

鞍谷遺跡	鹿児島県枕崎市教育委員会	1990年
城ヶ崎遺跡・辻堂頭遺跡	鹿児島県揖宿郡瀬郷町教育委員会	1990年
登立遺跡・下水洗迫遺跡	川辺郡知覧町教育委員会	1990年
上城跡・上城遺跡	大島郡与論町教育委員会	1990年
一字治城跡－都市公園整備に伴う発掘調査概報－	鹿児島県日置郡伊集院町教育委員会	1988年
黒木田遺跡	鹿児島県日置郡伊集院町教育委員会	1990年
桑原遺跡	鹿児島県枕崎市教育委員会	1990年
溝原遺跡	名護市教育委員会	1989年

# 付 編

- I. 鹿児島大学大学院連合農学研究科校舎建設地内出土遺物の紹介
- II. 教育学部附属小学校プール上屋建設地内出土遺物の紹介
- III. 鹿児島大学電子計算機室新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（昭和58年度 鹿児島県教育委員会調査）

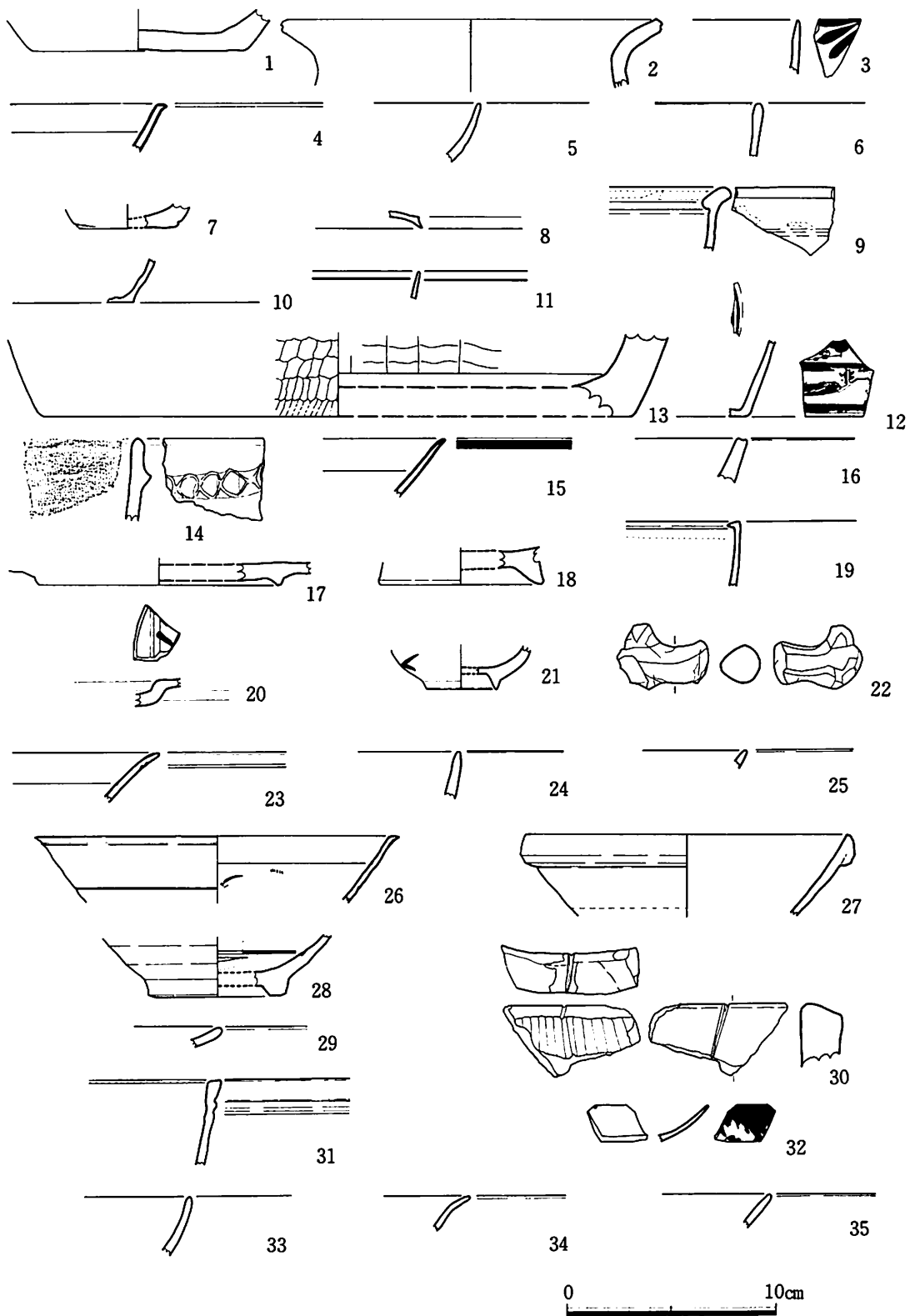
# I. 鹿児島大学大学院連合農学研究科校舎建設地内 出土遺物の紹介

鹿児島大学埋蔵文化財調査室では、平成元年10月2日から12月18日にかけて、鹿児島大学大学院連合農学研究科校舎の建設にともなう事前の埋蔵文化財発掘調査を行った。その調査結果については既に『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅴ』において報告しているが、その際、出土遺物の報告については整理の都合上本年報において行うことにした。本調査区では、土器・土師器・陶磁器・石鍋・土製品・古銭・煙管・軽石製品等が出土している。ここでは、土製品・煙管・古銭・軽石製品についてはそれぞれ一括して、また、これ以外の遺物については出土遺構、及び出土層別に図示し説明を行っている。以下、遺構出土遺物・包含層出土遺物・土製品・煙管・古銭・軽石製品の順に説明を行う。

## 1. 遺構出土遺物（第26・27図）

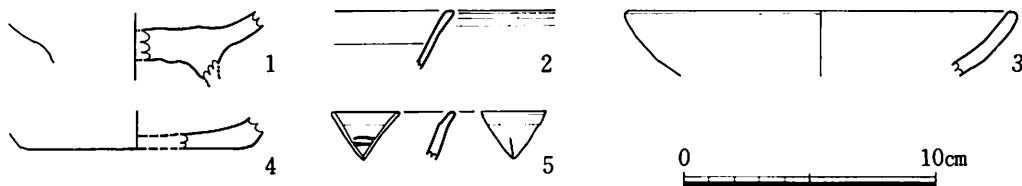
### S K 20出土遺物

第26図1～3はS K 20Aから出土している。1は、土器の底部である。平底で、内面は虫食い状に剝落し、器種は不明である。2は、「く」の字状に屈曲する甕の口縁部片で、やや摩滅している。口唇部が、ヨコナデによって若干くぼんでいる。3は、陶器の碗と考えられる口縁部である。花卉の文様が外面に施されている。第26図4～13はS K 20Bから出土している。4は、白磁碗の口縁部片で、外反する口唇部の上面を水平に仕上げている。5・6は、土師器の口縁部である。5は碗で全体に摩滅しているが、外面に回転ナデによるわずかな凹凸を認めることができる。口縁部から内面にかけて黒灰色を呈する。6は、内面から口唇部にかけて黒灰色を呈する。摩滅が著しく、器種は不明である。7は土師器皿の底部である。底面は、糸切り底である。摩滅が著しい。8は須恵器の蓋である。先端の断面は、三角形を呈する。9は陶器鉢の口縁部である。内面に張り出しがあり、口縁部上面は釉が拭き取られている。外面も、所々無釉の部分がある。10は陶器の底部である。器種は不明である。平底で内面のみ釉が施されており、外面は無釉である。11は磁器碗の口縁部である。外面・内面に灰白色の横線が施されている。12は染め付け鉢の底部である。13は滑石製の石鍋である。外面・内面ともケズリ痕が明瞭である。外面・内面はススが附着している。第26図14～22は、S K 20Cから出土したものである。14は甕の口縁部である。口縁部下に一条の突帯を張り付け、刻みを施している。刻み目の内部には爪痕と考えられる圧痕が認められる。15は白磁碗の口縁部である。口縁端部をわずかに外反させる。内面に圏線を1条施す。16は土師器の口縁部である。口唇部がヨコナデ調整によってわずかにくぼんでいる。摩滅が著しい。器種は不明である。17は土師器皿の底部である。底面に、低い台形状の高台を張り付けている。18は土師器碗の底部である。内黒土師器である。19は、陶器鉢の口縁部である。口縁部内面に張り出す形状を呈し、その直下から外面にかけて釉を施し、内面に施文している。摩滅が著しい。20は内面に文様を施しているが、釉は風化して白く変色している。器種は不明である。21は、いわゆる白薩摩の小鉢である。高



第26図 遺構出土遺物(1) (1/3)





第27図 遺構出土遺物(2) (1/3)

台登付け部のみ無袖で、全体に施釉している。体部外面に、「千鳥印」が施されている。22は、器種は不明だが、把手であると考えられる。左右の両端が欠損している。ケズリによる調整が施されているが、粗雑な作りである。第26図23は、白磁碗の口縁部である。外面の口縁部下に、2条の、内面に1条の圏線を施す。

#### S K 21 出土遺物

第26図24・25は、土師器の口縁部である。どちらも摩滅し、小片のため器種は不明である。

#### S K 22 出土遺物

第26図26～30は、S K 22より出土したものである。26・27は、白磁碗の口縁部である。26は、口唇部を外反させ、上面が水平のもので、外面・口縁部直下に段を有し、体部に圏線を一条めぐらす。内面には1条の圏線をめぐらし、その下に櫛目による文様を施している。27は、玉縁状の口縁部をもつ。外面体部下部は、無袖である。28は、白磁碗の底部である。低く太い高台を持ち、内面には片彫り沈線の圏線を一条施している。29は、土師器皿の口縁部である。端部を丸く収めたものであるが、摩滅が著しい。30は滑石製の石鍋である。外面はケズリ痕が明瞭である。内面は、丁寧なナデており、表面に凹凸はなく、光沢がある。口縁部上面と内面には断面V字状の溝がある。

#### S K 24 出土遺物

第26図31は、S K 24から出土した陶器鉢の口縁部である。

#### S D 2 出土遺物

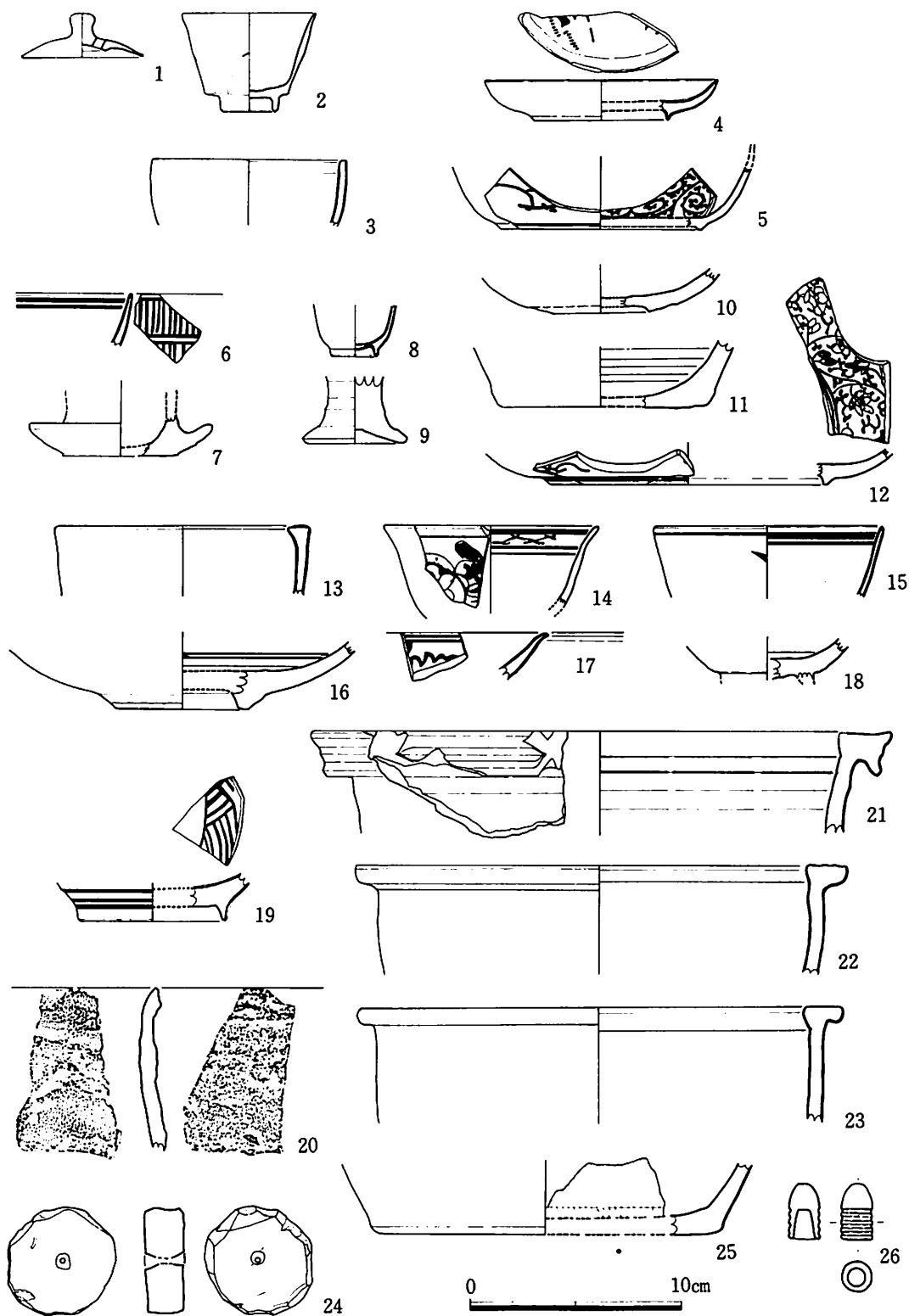
第26図32はS D 2より出土した染め付け鉢の口縁部である。

#### S D 3 出土遺物

第26図33～35は、S D 3から出土したものである。33・34は、土師器の口縁部で、碗であろうと考えられる。33はくの字状に外反している。34は口唇部から内面にかけて灰色を呈する。いずれも摩滅が著しい。35は器種は不明だが、直線的に開く口縁部である。

#### ピット1 出土遺物

第27図はピット1より出土したものである。1は甕の脚部である。摩滅している。2は、白磁碗の口縁部で、端部を外反させ、上面を水平に仕上げている。内面には、一条の圏線が施されている。3・4は土師器である。3は、若干内湾する口縁部で、内黒土師器である。坏ではないかと考えられる。4は平底の底部で、器種が不明である。5は器種は不明だが、青磁の口縁部である。緩やかなくの字状に外反し、外面・内面に施文が認められる。



第28图 包含層出土遺物(1) (1/3)

## 2. 包含層出土遺物

### I a層出土遺物（第28図1～5）

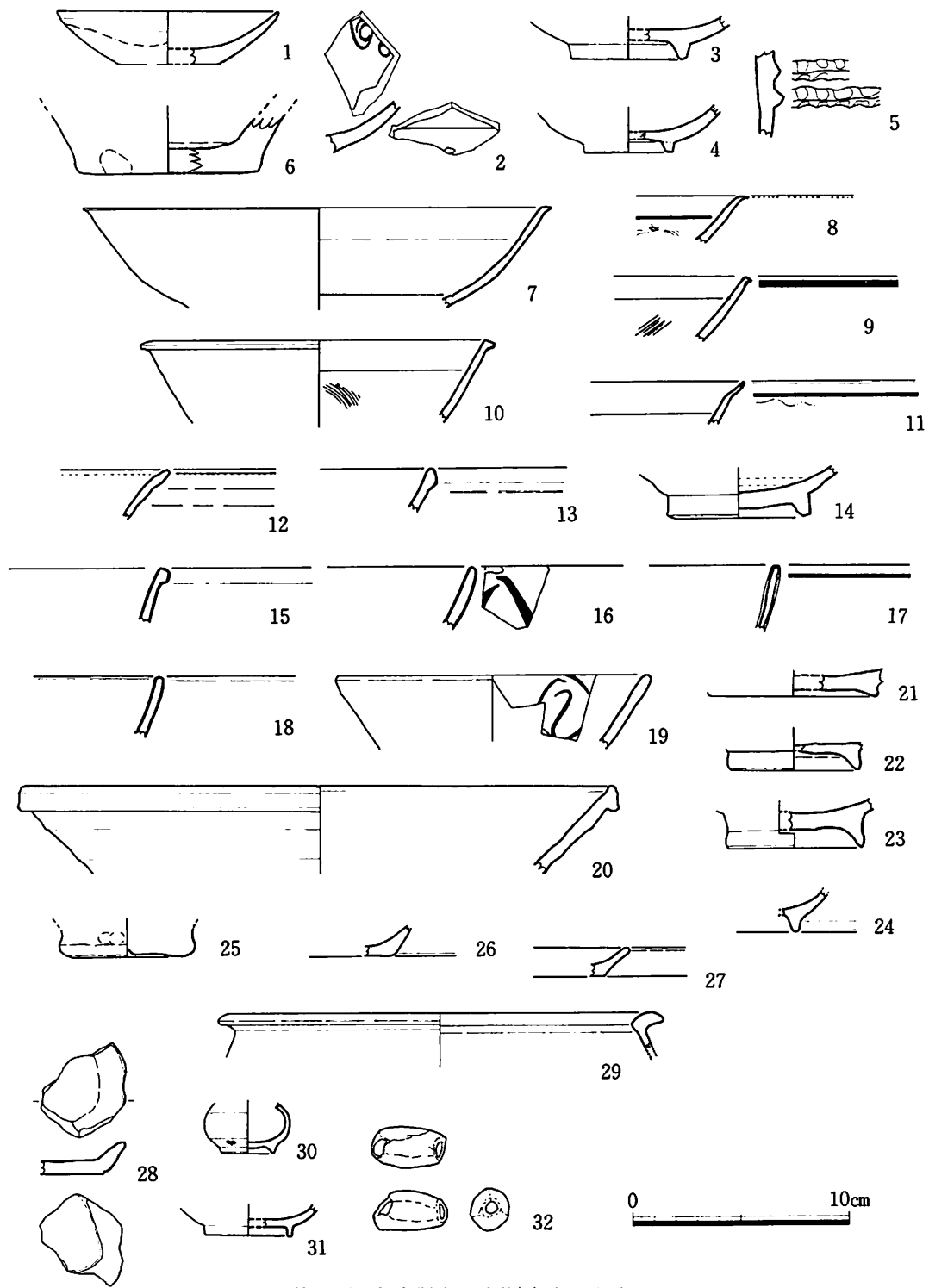
第28図の1～5は、I a層より出土したものである。1は、陶器の蓋である。外面には、緑灰色の蛇褐釉を施している。宝珠脇に穿孔を一つ施している。2は、磁器小碗である。高台外付け根に二条の圈線を施す。体部立ち上がり部の外面は、面取り状に削っている。高台畳付け部のみ釉が削り取られている。3は、陶器碗の口縁部である。いわゆる白サツマで、口縁部は上面から内面にかけて無釉である。4は、磁器皿である。細い高台が付いている。高台畳付け部は、釉が掻き取られている。内面にスタンプで文様を施している。5は、磁器染め付け碗である。高台付け根から丸みを帯びて立ち上がり、底部は低く削って高台を作り出している。外面は、高台付け根に一条の圈線と内面は、蛸足唐草文様が施されている。

### I b層出土遺物（第28図6～12）

第28図6～12は、I b層から出土したものである。6は、磁器碗の口縁部である。外面は、圈線を巡らし、その間に縦線を施している。内面には、二条の圈線を施している。7は白サツマの小碗である。外面、内面とも釉を施しているが、高台畳付け部分は釉を掻き取られている。8は、燭台の底部付近である。外面から底面にかけて無釉で、底面は回転糸切り底である。9は、陶器の脚台である。脚は低く踏んばるような形状を呈し、回転ナデによる凹凸が明瞭である。10は陶器の鉢の底部で、底面を削り出し、上げ底を呈する。底面付近は無釉である。11は、陶器甕の底部である。平底で体部は外へ開きながら直線的に立ち上がる。内面には、回転ナデによる凹凸が著しい。12は磁器皿の染め付けの底部である。高台付け根付近に圈線を二条施し、外面体部と内面に唐草文を施している。高台は低く、断面台形様を呈し、畳付け部は釉を掻き取っている。

### II a層出土遺物（第28図13～26）

第28図13～26は、II a層より出土している。13は青磁の口縁部である。内面に張り出し上面は水平だが、釉を施しているために若干丸みを帯びる。鉢ではないかと考えられる。14は、磁器碗の口縁部である。口縁部は若干外反する。外面には梅文を、内面口縁部には圈文を施している。15は磁器碗の口縁部である。口縁部に外面一条、内面二条の圈線を施す。16は染め付け皿の底部である。断面台形状の太く低い高台を持ち、畳付け部は釉を掻き取っている。内面は見込み部分に無釉部分が環状に残り、重ね焼きの痕と看守できる。また二条の圈線を施している。17は磁器皿の口縁部である。口唇部を外反させ、釉は厚い。内面は、釉の上から赤色と黄色の顔料で文様を施している。18は陶器碗の底部である。高台は欠損している。内面見込みは環状に無釉で、重ね焼きの痕と考えられる。19は磁器碗の底部である。高い高台を持ち、外面の高台内面から見込み部分は無釉である。20は素焼きの土器の口縁部である。上部は外面・内面とも剝落している。口縁部は断面三角形を呈する。外面はスタンプによる亀甲文を施している。器種は不明である。21～23は深鉢の口縁部である。21は口唇部が一部欠損しているが、上面は水平で内面に張り出し、外面は部分的につまみ上げている。口縁部上面は釉を拭き取っている。内面は回転ナデによる凹凸が著しい。22・23は上面を水平に仕上げ、端部は若干丸みを帯びる。内面は張り出している。上面のみ釉が拭き取られている。24は播り鉢の底部である。平底である。内面には平行の細い溝が施されている。底面は無釉



第29图 包含层出土遗物(2) (1/3)

である。25は瓦を転用した紡錘車である。側面を打ち搔いて成形し、中心部を両面から穿孔している。26は銃弾である。長さ2.65cm、幅1.5cm、厚さ0.3cmを測り、円筒形で端部は丸く収められ下部には3段の突部がある。

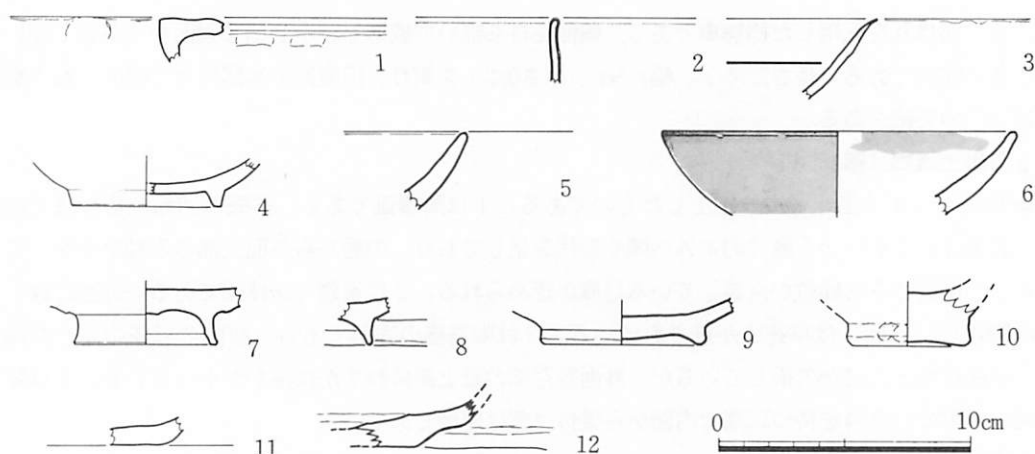
### Ⅲ a層出土遺物（第29図1～4）

第29図1～4はⅢ a層より出土したものである。1は陶器皿である。平底の回転糸切り底である。底部立ち上がりから直線的に外へ開く形状を呈しており、内面から外面上部のみ釉がかかっている。内面見込みに砂粒が付着している目痕が認められる。2は青磁の碗体部である。外面には1条の圏線が、内面には草花文が施されている。3は陶器碗の底部である。断面台形様の高台を持つ。体部はほとんどが欠損しているが、外面残存部の最上部にわずかに釉がかかっている。4は陶器碗の底部で、高台を持つ。高台内面から畳付け部は無釉である。

### Ⅲ b層出土遺物（第29図5～32）

第29図5～32は、Ⅲ b層より出土したものである。

5は甕の絡縄突帯である。少し摩滅している。6は甕の底部である。平底で、摩滅している。7～13は白磁碗の口縁部である。7～10は口縁端部を外反させ、上面を水平に仕上げるものである。7は内面に1条の圏線が施されている。8は口縁部上面は水平ではなく、若干下がっている。先端は少し平坦面を持つ。内面には圏線を一条巡らし、櫛書きの文様が施されている。9は、内面に圏線を一条と櫛書きの文様が施されている。10は口縁部上面が若干下がるもので、内面には一条の圏線と櫛書きの文様を施している。11はくの字状に緩やかに外反する。外面屈曲部付近と内面に圏線が施されている。12は口縁端部の釉が掻き取られている。外面は、緩やかな段状の凹凸が認められる。13は玉縁状の口縁部である。断面三角形を呈する。14は白磁碗の底部である。若干外に開く高台を持ち、内面には釉を施しているが見込み部は環状に無釉である。重ね焼きの痕であると考えられる。外面は無釉である。15～19は青磁碗の口縁部である。15は青磁の玉縁状の口縁部である。表裏とも粗い貫入が入る。16は端部を丸く収め、若干内湾するもので外面に蓮弁が施されている。釉が厚い。17は口縁部を丸く収めるもので、外面口唇部直下に圏線を一条施し、釉が厚い。18は口縁部を丸く収め、若干内湾するものだが釉は他より白っぽい。19は端部を丸く収めるが、内面に片彫りで草花文を施す。釉は透明釉である。20は須恵器のこね鉢である。口縁部は肥厚させ、断面三角形様を呈し直線的に外へ開く。外面は回転ナデによる凹凸が認められ、口縁部上面はスス付着のため黒灰色になっている。21～28は土師器である。このうち、21～23は内黒土師器で碗の底部ある。21は上げ底状の高台を持つ。23は高い高台を持つ。24も碗の底部で高台を持つ。21～24とも摩滅している。25は、少し上げ底気味の底部で、器種は不明である。底面には「一」字状の凹部がある。26～28は土師器の平皿である。26・27は回転糸切り底である。28は底面形が隅丸方形を呈する。29～31は陶器である。29は甕の口縁部で若干内側に張り出し、口縁部上面は丸みを帯び、釉は拭き取られている。30は小壺の底部で低い高台を持つ。高台付け根付近に千鳥印を施している。高台畳付け部分は釉を掻き取っている。31は高台付近である。細く、断面方形を呈する。高台を持ち、外面の高台付け根部分付近まで釉を施す。他は無釉である。32は土錘で筒状を呈する。外面は赤色で二次焼成を受けている。



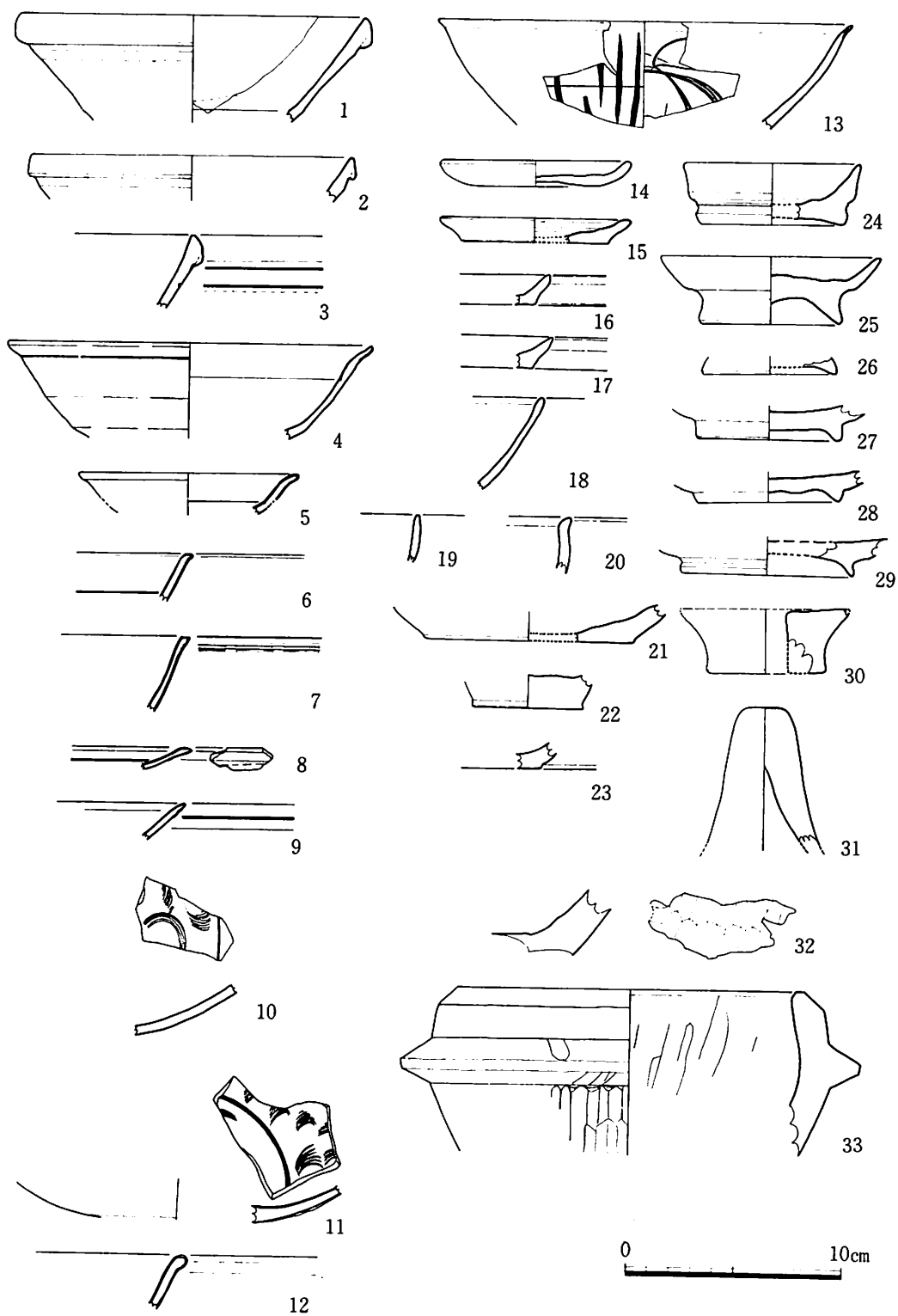
第30図 包含層出土遺物(3) (1/3)

### III c 層出土遺物 (第30図)

1は甕の口縁部である。口縁部を水平に伸ばし、口唇部をなで、平坦面を作っている。上面にはユビオサエの痕が認められる。摩滅している。2は白磁の口縁部で端部を外反させる器形を呈する。器種は不明である。3は白磁碗の口縁部である。端部は先細りしながら緩やかに外反し、先端が所々つぶれている。内面には一条の圏線が施されている。4は碗の高台である。断面台形様を呈する。全体に白く無釉で、表面はなめらかで光沢がある。5から12は土師器である。5・6は碗で内湾する口縁部である。6は表裏とも赤色顔料が付着している。7から12は底部である。7～9は碗で高台を持つ。7は細く高い高台で、高台見込みの中心部はヘソ状に盛り上がっている。9は低く踏んばるような高台で、内黒土師器である。10は器壁が厚く若干上げ底気味である。杯ではないか考えられる。外面にユビオサエ痕が残る。11・12は皿である。11は平底の底部である。底面から緩やかに体部へ立ち上がる。12も平底の底部であるが、体部に向かって立ち上がり段状に屈曲する。底面は回転糸切りである。土師器はいずれも摩滅している。

### IV層出土遺物 (第31図)

1～11は白磁である。1～3は碗で玉縁状の口縁部を持つものである。1は外面口縁部下から内面の体部稜線直下までしか施釉されていない。3も外面は口縁部下の片彫り沈線が一条施されており、その直下までしか釉が施されていない。釉は灰色を帯びた透明釉である。2は外面・内面に施釉している。4～7は碗である。4は外反する口縁部である。外面は屈曲部付近に沈線を一条巡らし、体部は回転ケズリにより成形され、稜線が認められる。内面は屈曲部下に一条沈線を施し、屈曲部付近には釉が溜まっている。5は緩やかに屈曲しながら外反する口縁部である。外面は口唇部直下に小さな段を持ち、内面には一条沈線を施している。6は口縁部端部を外反させ、上面を水平に仕上げているが口縁部上面に釉が厚くのっているため、外形としては丸くおさめているように見える。内面に一条の沈線が施されている。7は口唇部を外反させ、口縁部上面を水平に仕上げたものである。外面口縁部直下には2段の凸線を持つ。他の白磁とは異なり、釉は黄白色を呈する。8は皿である。若干反りながら外に大きく開く口縁部である。外面はわずかに段を持ち、その下まで



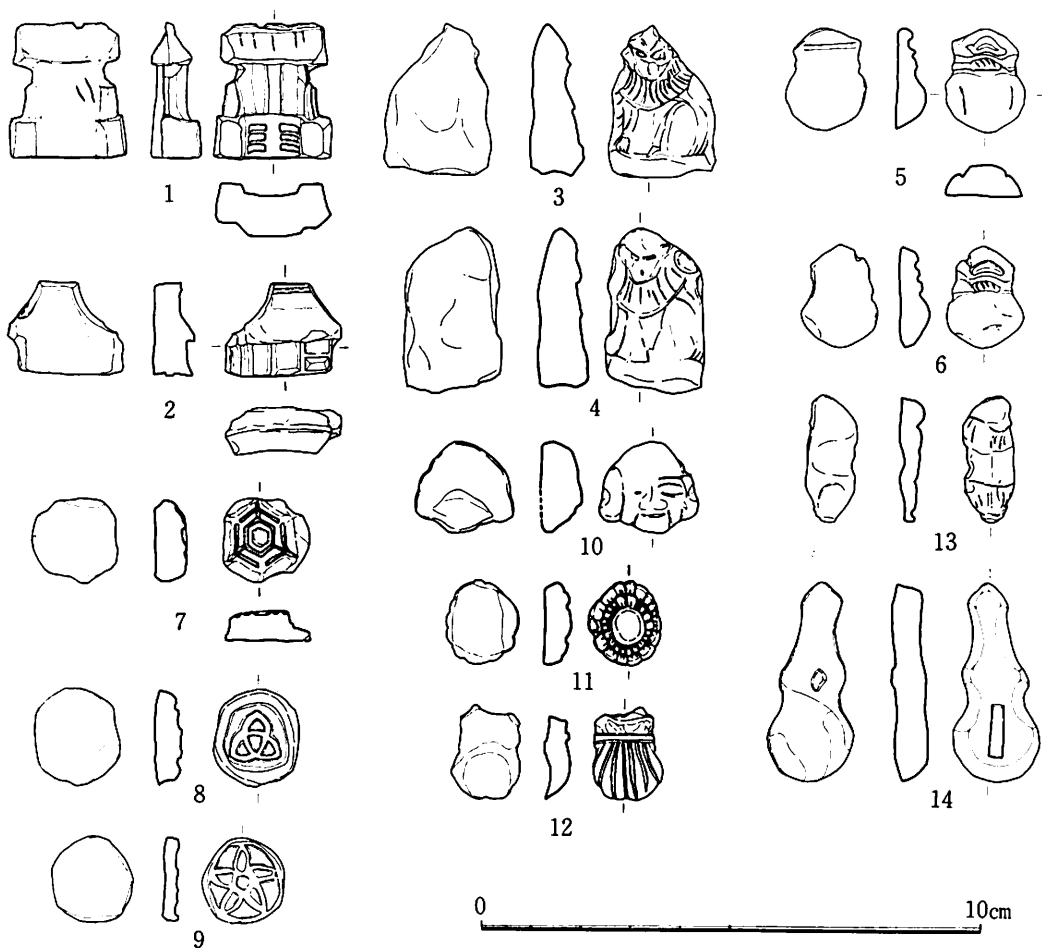
第31图 包含层出土遗物(4) (1/3)

しか釉は施されていない。内面には一条の沈線が施されている。9は直線的に外に開く口縁部である。皿ではないかと考えられる。外面には、口縁部下に細かい凸部がめぐっている。10・11は白磁碗である。10は体部片で、内面に一条の圈線がめぐらされ、その内面に櫛描きの曲線文を施している。11も体部片である。外面は見込み部分まで施釉している。内面は見込み部分に一条の圈線を巡らし、その外側に櫛描きの文様を施している。12・13は青磁碗である。12は口縁部だが、端部は外反し、口唇部は少し肥厚させ丸くおさめる。釉は厚い。13は口縁部端部がわずかに外反している。外面には縦方向にヘラ状の工具による片彫りの沈線を施し、体部に圈線を施す。内面には櫛描きで草花文を施している。同安窯系の青磁であると考えられる。14～30は土師器である。14～17は土師器の皿である。14は上げ底気味の底部で、底部と体部との境は明瞭ではなく、そのまま内湾しながら立ち上がる。底部は糸切り底である。非常に摩滅している。15～17は底部と体部立ち上がりの境は明瞭で、直線的に立ち上がる。15は平底で回転糸切り底である。いずれも非常に摩滅している。18～21は土師器の口縁部である。18・19は内黒土師器の碗で、内湾気味に立ち上がり口唇部を丸くおさめる。20も碗で、口縁部端部を若干外反させた口縁部である。21～23は、土師器皿の平底の底部である。21は回転糸切り底である。22は器壁が厚い。23は体部立ち上がり部に段を有す回転糸切り底である。24は土師器の高台付き皿である。やや直立する口縁部を持ち、上げ底気味の底部で、底部付近外面は強いヨコナデのためくびれている。25も高台付き皿である。高台は外開きで内面見込み部分が若干盛り上がっている。高台付け根部分はヨコナデのためくぼんでいる。26は土師器の底部であるが、上げ底気味の高台であろうと推定できる。器種は不明である。27～29は内黒土師器碗の高台である。27はほぼ垂直に立つ高台を持ち、摩滅している。28は低い高台を持つ。29は小さな高台を持ち、付け根部分はヨコナデのためくぼんでいる。30・31は器種は不明である。30は側面形が台形状を呈し、中心は空洞で筒状になっている。いずれも非常に摩滅している。32・33は滑石製の石鍋である。33は底部立ち上がり部付近で、縦方向の連続したケズリ痕が明瞭である。34は内湾する口縁部で、鐔状の突帯をその下につける。外面の突帯下部の内面ケズリ痕は明瞭である。

### 3. 土製品 (第32・33図)

第32図はいわゆる「泥面子」と呼ばれる型作りの土製品である。ほとんどI b層から出土している。1は祠である。側面にタガがあり、表裏別々の型を張り合わせていると考えられる。摩滅しているが、裏面は無調整である。底面は削って平坦に仕上げている。2は家屋である。これも表裏別々の型を張り合わせており、底面から側面にかけて所々にタガが残存している。横断面は表面へ反り返るように弧状を呈している。全体にナデ調整で、丁寧に仕上げられている。3・4は狛犬である。3は眼と尾の部分に青い顔料が付着している。両者とも裏面は比較的平坦で、ユビオサエの痕が認められる。摩滅している。5・6は巾着袋である。いずれも裏面は平坦である。特に5は丁寧に仕上げられている。6は摩滅している。7は亀甲文である。裏面は平坦だがタガが大きく残存している。8・9は周囲を縁取りし、その内側に文様を陽刻している。断面形は扁平だが裏面にはユビオサエの痕が認められる。10は人面である。摩滅が著しい。11は菊花である。これも摩滅しているが、裏面にユビオサエの痕が認められる。12は巾着袋であると考えられる。これも裏面にユビ

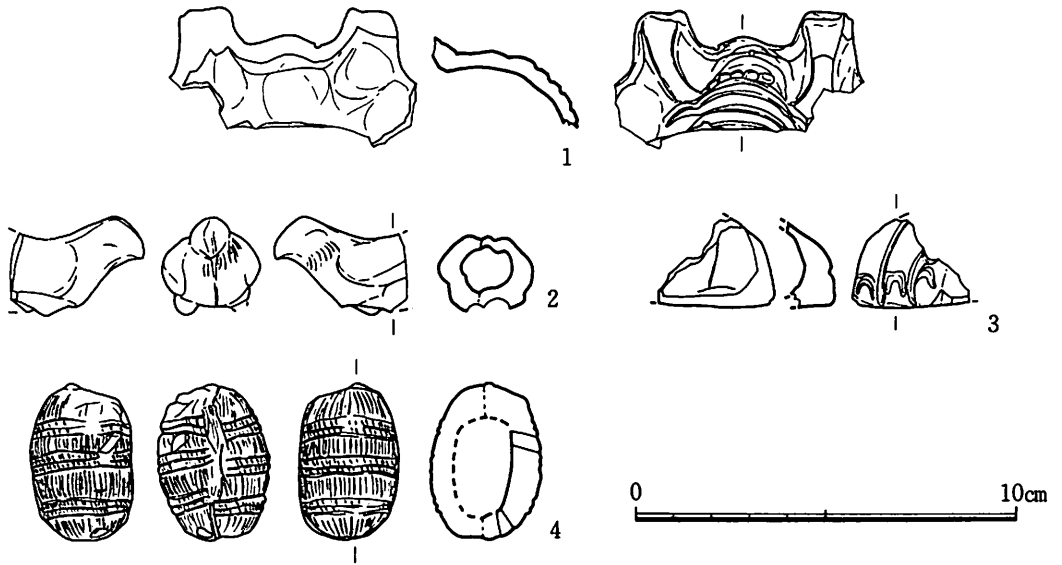




第32図 土製品(1) (2 / 3)

オサエの痕が明瞭である。14は瓢箪の形態を呈している。裏面にユビオサエの痕が認められる。

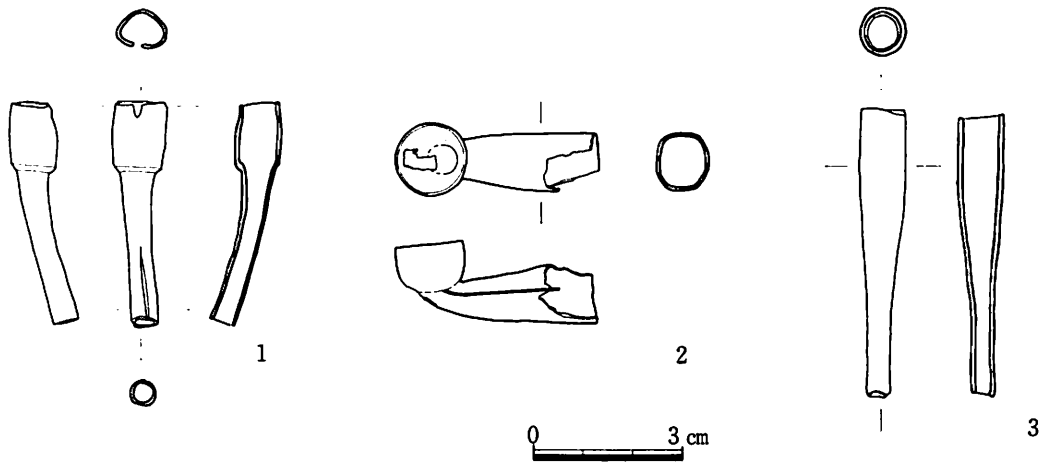
第33図 1～4 は、表裏二つの型を張り合わせて成形した土製品である。第33図に示した土製品よりより大型である。1は兜の一部である。表裏二つの型の型を張り合わせたものが接合の部分で分離した表側であると考えられる。内面にはユビオサエの痕が明瞭である。表面は著しく摩滅している。2は鳥の頭部である。これも二つの型を張り合わせて成形しており、中央にタガ状の凸部が認められる。摩滅している。3は全体の形態は不明だが、残存部は台座の一部であると考えられる。摩滅している。4は米俵である。これも二つの型を張り合わせており、側面にはタガ状の凸部が残る。また、その凸部を部分的にハケ状の工具でなでている。文様は細沈線で施され、2ヶ所、穿孔を施している。内部は空洞である。



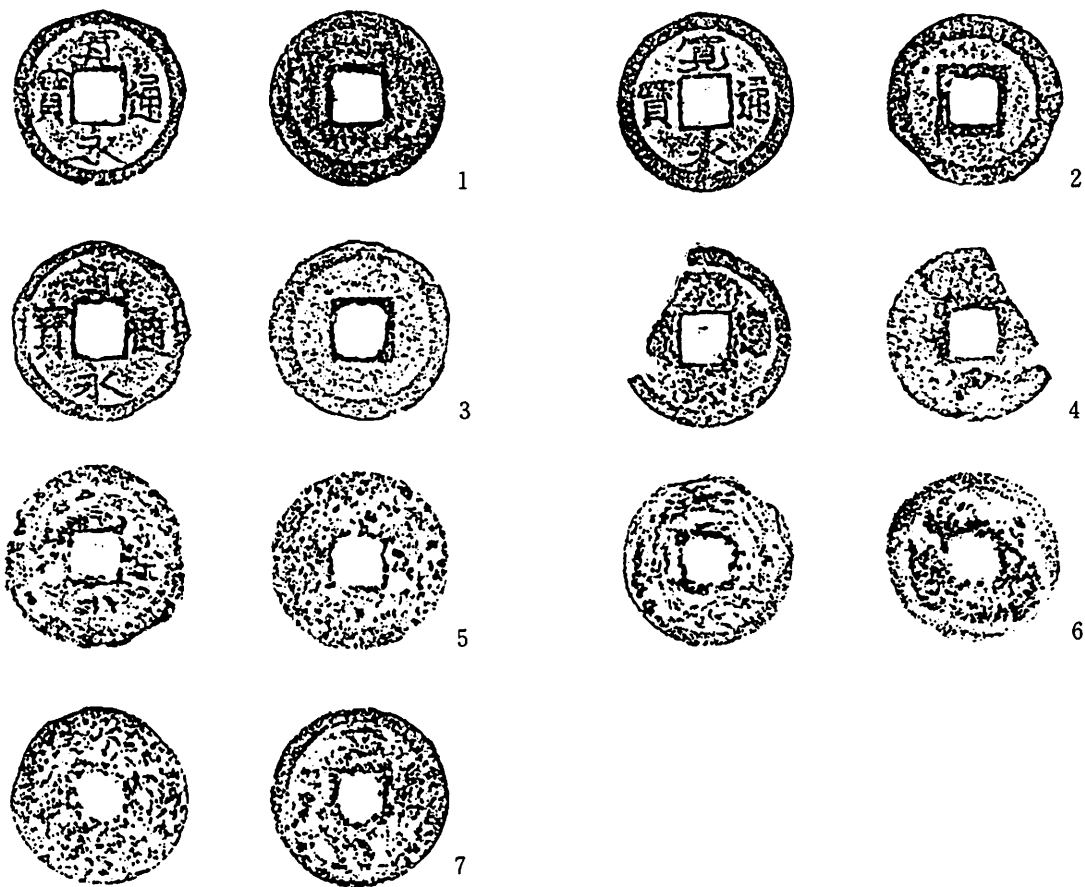
第33図 土製品(2) (1/2)

4. 煙管 (第34図)

第34図は銅製の煙管である。1は吸い口で、上下がつぶれている。2は雁首の部分で、火皿と端が欠損している。うしろからみて、ろう接部分は左側である。雁首上面は平につぶれている。3は、吸い口で両側が少し欠損している。内側に羅字が残存している。



第34図 煙管 (2/3)



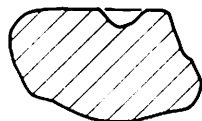
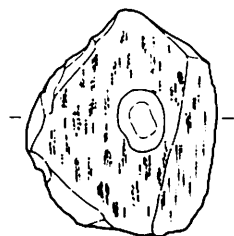
第35図 古銭 (1/1)

5. 古銭 (第35図)

1はSK19から、他はいずれもI b層から出土している。1～5は寛永通寶である。6・7は文字の判読が不能である。1・2・4は、直径2.35cm、穿孔部の一辺が6mmを測る。いわゆる「ハ」寶銭である。3は直径2.4cm、穿孔部の一辺6mmを測る。同じく「ハ」寶銭である。5はかなり腐食しているが、直径2.5cm、一辺6mmを測る。「寛永通□」と認められる。6・7とも直径2.3cm、一辺約6mmを測る。3のみが他よりも若干大きく、「通」の文字が「マ」になっている点で、他と異なっている。

6. 軽石製品 (第36図)

第36図は、軽石製の凹石である。側面を粗く打ちかいて成形し、裏面は擦っている。表面は擦って平坦に仕上げ、中央をくぼませている。くぼみ部は長さ2.5cm、幅1.5cmの楕円形で、深さは0.5cmほどである。



第36図 軽石製品 (1/3)

表4 土器観察表

図番号	器種	出上区	出上層	色調・釉調	胎土・磁胎	調整・施文	備考
26-1	不明	b-3	SK20A	外面：橙褐色。内面：黒灰色。底面：明橙褐色。	粗砂粒(1)～砂粒を含む。白色粒、赤色粒、石英、角せん石。	ナデ。	底径(10.1)cm。
26-2	甌	b-3	SK20A	褐色。	砂粒を含む。石英、角せん石。	外面上部：ヨコナデ。外面下部：ユビオサエのちナデ。内面：摩擦のため不明。	口径(18.4)cm。
26-3	碗	b-3	SK20A	透明釉。黄灰色。貫入細かい。	灰白色。微細な砂粒を含む。	施釉。	
26-4	碗	c-3	SK20B	透明釉。明緑灰色。貫入なし。気泡あり。	灰白色。細砂粒を少し含む。白色粒。	施釉。内面；二条の横線。	白磁。
26-5	碗	c-3	SK20B	外面上部～内面；黒灰色。外面下部；明黄白色。	砂粒を含む。白色粒、石英。	外面；ヨコナデ？。内面；ナデ。	
26-6	碗	c-3	SK20B	内面～外面口唇部付近；黒色。他；黄白色。	細砂粒を多く含む。白色粒、赤色粒。	ナデ。	摩擦している。
26-7	皿	c-3	SK20B	明黄白色。	細砂粒を含む。白色粒、角せん石、石英。	底面；糸切り痕。他；ナデ。	底径(4.7)cm。
26-8	蓋	c-3	SK20B	黒灰色。	微細な砂粒を少し含む。白色粒。	ヨコナデ。	須恵器。
26-9	鉢	c-3	SK20B	不透明釉。暗緑褐色。	赤褐色。砂粒を多く含む。白色粒、黒色粒。	口縁部上面；無釉。他；施釉。	
26-10	不明	c-3	SK20B	黒灰色。	黒灰色。砂粒を含む。白色粒。	外面；ナデ？。無釉。内面；施釉。	
26-11	碗	c-3	SK20B	透明釉。	白色。	外面；内面；一条の横線。	
26-12	鉢	c-3	SK20B	半透明釉。白色。	白色。微細な砂粒を含む。黒色粒。	施釉。	染め付け。
26-14	甕	b-3	SK20C	外面；茶褐色。内面；灰褐色。	砂粒を含む。角せん石、石英、白色粒。	ヨコナデ。	
26-15	碗	b-3	SK20C	透明釉。緑灰色。貫入なし。	灰白色。微細な砂粒を含む。白色粒。	施釉。内面；一条の横線。	白磁。
26-16	不明	b-3	SK20C	明黄白色。	細砂粒を多く含む。白色粒、角せん石、赤色粒。	ナデ？。	摩擦している。
26-17	皿	b-3	SK20C	黒褐色。	砂粒を含む。赤色粒、黒色粒、石英。	外面・底面；ナデ。	底径(11.5)cm。
26-18	碗	b-3	SK20C	外面；灰白色。内面；黒色。	微細な砂粒を含む。白色粒。	ナデ？。	底径(7.8)cm。 内黒土師器。
26-19	鉢	b-3	SK20C	不透明釉。黒褐色。	白褐色。微細な砂粒を少し含む。白色粒、赤色粒。	回転ナデ。内面下部；無釉。他；施釉。	
26-20	不明	b-3	SK20C	灰白色。	赤褐色。砂粒を含む。角せん石。	施釉。	
26-21	小鉢	b-3	SK20C	白色。貫入あり。	白色。	施釉。	底径(3.4)cm。
26-22	不明	b-3	SK20C	褐色～赤褐色。	砂粒を含む。赤色粒、角せん石。		
26-23	碗	b-4	SK20	透明釉。灰白色。気泡なし。	灰白色。細砂粒をわずかに含む。白色粒。	施釉。	白磁
26-24	不明	b-5	SK21	明黄白色。	細砂粒を多く含む。白色粒、赤色粒、角せん石、雲母。	ナデ？。	
26-25	不明	b-5	SK21	明橙褐色。	細砂粒を含む。白色粒、赤色粒、黒色粒。	ナデ？。	
26-26	碗	c-3 c-4	SK22 II	透明釉。暗緑灰色。貫入あり。	細砂粒を少し含む。黒色粒。	外面；一条の横線。内面；ハケ状。一条の横線の施文。	白磁。口径(17.5)cm。
26-27	碗	c-5	SK22	透明釉。灰白色。貫入なし。気泡なし。	灰白色。細砂粒を少し含む。	外面下部；無釉。他；施釉。	白磁。口径(15.6)cm。
26-28	碗	c-5	SK22	透明釉。緑がかった灰白色。	細砂粒をわずかに含む。白色粒。	外面；無釉。回転ナデ。内面；施釉。	底径(6.6)cm。 白磁。
26-29	皿	c-5	SK22	黄褐色。	細砂粒を少し含む。黒色粒。	ナデ？。	

図番号	器種	出上区	出土層	色調・釉調	胎土・磁胎	調整・施文	備考
26-31	鉢	b-5	SK24	不透明釉, 暗緑褐色。	砂粒を含む, 白色粒。	口縁部上端; 無釉, ヨコナデ, 他; 施釉。	
26-32	鉢	c-5	SD2	透明釉, 貫入あり。	白色, 微細な砂粒を少し含む, 黒色粒。	施釉。	染め付け。
26-33	碗?	c-5	SD3	半透明釉, 明灰白色, 貫入あり。	砂粒を少し含む, 黒色粒。	施釉。	
26-34	碗?	c-5	SD3	明黄白色。	微細な砂粒を含む, 赤色粒, 雲母。	ナデ?。	
26-35	不明	c-5	SD3	口唇部~内面; 淡黒灰色, 外面; 明褐色。	微細な砂粒を含む, 石英, 白色粒, 角せん石。	ナデ?。	
27-1	甕	c-3	P1	赤褐色。	砂粒を含む, 黒色粒, 石英。	外面; 摩滅のため不明, 内面; ナデ。	
27-2	碗	c-3	P1	灰白色, 貫入あり。	乳白色。	施釉。	
27-3	坏?	c-3	P1	外面; 黒褐色~灰白色, 内面; 黒褐色。	砂粒を含む, 白色粒。	ナデ。	口径(15.4) cm。
27-4	不明	c-3	P1	白橙色。	砂粒を含む, 赤色粒, 石英。	内面; ヨコナデ。	底径(8.5) cm。
27-5	不明	c-3	P1	灰白色。	緑灰色。	施釉。	外面; 蓮弁あり。
28-1	蓋	不明	la	不透明釉, 暗褐色。	暗褐色, 精選されている。	内面; 回転ケズリのチナデ。	口径(5.8) cm。
28-2	小碗	Na2トレ ンチ	la	淡灰白色。	白色。	施釉。	底径(2.8) cm。
28-3	碗	Na2トレ ンチ	la	白色, 貫入あり。	白色。	口縁部付近; 無釉, 他; 施釉。	口径(8.9) cm。
28-4	皿	不明	la	明緑色, 透明釉。	白色。	高台髷付け部; 無釉, 他; 施釉。	口径(11.0) cm, 底径(6.4) cm, 器高1.9cm。
28-5	碗	不明	la	淡水色。	淡灰白色。	施釉。	底径(9.45) cm。
28-6	碗	d-3	lb	淡水色。	乳白色。	施釉。	
28-7	小碗	c-3	lb	透明釉, 乳白色, 貫入あり。	白色。	施釉。	底径(2.1) cm。
28-8	燭台	b-3	lb	淡明褐色。	微細な砂粒を含む。	外面・内面; 回転ナデ, 底面; 回転糸切り。	底径(5.4) cm。
28-9	脚台	a-4	lb	不透明釉, 外面; 濁褐色, 内面; 淡褐色。	淡褐色, 精選されている。	回転ナデ。	底径(5.0) cm。
28-10	皿	b-3	lb	濁緑色。	濁白色。	外面体部下部~底面; 無釉, ヨコナデ, 他; 施釉。	底径(4.55) cm。
28-11	甕	b-2	lb	灰褐色。	砂粒を含む, 赤色粒, 石英, 角せん石。	外面; ナデ, 内面; 回転台によるヨコナデ。	底径(9.6) cm。
28-12	皿	b-3	lb	淡灰白色。	淡灰白色。	高台髷み付け部; 無釉, 他; 施釉。	底径(13.0) cm。
28-13	鉢?	g-2	lla	灰白色, 貫入あり。	明灰白色, 細砂粒を少し含む。	施釉。	青磁, 口径(12.0) cm。
28-14	碗	g-1	lla	淡水色。	白色。	施釉。	口径(10.3) cm。
28-15	碗	e-5	lla	淡水色。	白色。	施釉。	口径(10.5) cm。
28-16	皿	g-1	lla	透明釉, 薄い水色, 貫入あり。	白色。	内面; 重ね焼痕(無釉), 他; 施釉。	底径(6.35) cm。
28-17	皿	d-5	lla	白色。	乳白色。	施釉。	
28-18	碗	f-2	lla	薄緑色。	淡灰色, 微細な砂粒を含む, 黒色粒。	内面; 重ね焼痕(無釉)あり, 他; 施釉。	
28-19	碗	e-1	lla	淡水色。	乳白色。	施釉。	底径(7.05) cm。
28-20	不明	f-5	lla	暗褐色。	細砂粒を含む, 石英, 白色粒。	外面下部; スタンプ状の工具による龜甲文の施文, 他; 剥落のため不明。	
28-21	深鉢	g-1	lla	不透明釉, 外面; 暗緑色, 内面; 茶褐色。	赤褐色。	ヨコナデ。	口径(27.4) cm。
28-22	深鉢	d-1	lla	外面; 暗緑色, 内面; 茶褐色。	赤褐色。	ヨコナデ, 口縁部上面; 無釉, 他; 施釉。	口径(23.0) cm。
28-23	深鉢	g-1	lla	緑褐色。	褐色。	ヨコナデ, 施釉。	口径(22.6) cm。
28-24	掃り鉢	d-1	lla	不透明釉, 外面; 暗緑色, 内面; 黒褐色。	黒褐色, 砂粒を含む, 赤色粒, 石英, 角せん石。	内面; 縦方向のケズリ。	底径(15.4) cm。

図番号	器種	出土区	出土層	色調・釉調	胎土・磁胎	調整・施文	備考
28-25	紡錘車	g-3	Ⅱ a	側面；灰白色。他；黒灰色。	砂粒・細砂粒を含む。金雲母、白色粒。	側面；打ちかいている。	瓦の転用。焼成後穿孔。
29-1	皿	a-3	Ⅲ a	淡緑色。	褐色。	外面下部～底面；無釉。他；施釉。外面；回転ナデ。	内面；砂目痕あり。口径(10.2) cm。底径(4.6) cm。器高2.4 cm。
29-2	碗	d-3	Ⅲ a	緑灰色。透明釉。貫入なし。	灰色。微細な砂粒を少し含む。	施釉。外面；一条の横線。内面；草花文。	青磁。
29-3	碗	c-4	Ⅲ a	外面；茶褐色。内面；淡茶色。	青灰色。	回転ナデ。外面上部；施釉。他；無釉。	底径(5.2) cm。
29-4	碗	c-2	Ⅲ a	淡灰褐色。	略褐色～褐色。	高台内面；ナデ。無釉。他；施釉。	底径(3.65) cm。
29-5	甃	b-4	Ⅲ b	外面；黄灰色。内面；褐色。	砂粒を含む。角せん石、石英。	ナデ。	
29-6	甃	d-5	Ⅲ b	外面；淡黄白色。内面；略灰色。	砂粒を含む。角せん石。	ユビオサエのちナデ。	底径(8.6) cm。
29-7	碗	c-3	Ⅲ b	灰白色。	細砂粒をわずかに含む。白色粒。	全体的に釉が剥けている。内面に一条の沈線。	白磁。口径(21.8) cm。
29-8	碗	c-3	Ⅲ b	透明釉。明緑灰色。貫入なし。気泡少しあり。	灰白色。細砂粒を少し含む。	施釉。内面；ハケ状の施文。	白磁。口径(16.4) cm。
29-9	碗	d-4	Ⅲ b	透明釉。明灰白色。貫入なし。気泡あり。	細砂粒を含む。	内面；ハケ状。一条の横線の施文。	白磁。
29-10	碗	b-4、c-3	Ⅲ b、SK21	透明釉。緑灰色。貫入なし。気泡あり。	灰白色。砂粒を少し含む。白色粒。	施釉。内面；一条の横線。ハケ条のうすい施文。	白磁。
29-11	碗	c-1	Ⅲ b	透明釉。緑灰色。貫入なし。気泡なし。	灰白色。細砂粒を少し含む。	施釉。内面；一条の横線。	白磁。
29-12	碗	f-4	Ⅲ b	透明釉。貫入なし。	白色。細砂粒を少し含む。黒色粒。	口唇部付近；無釉。	白磁。
29-13	碗	c-5	Ⅲ b	透明釉。明灰白色。	灰白色。砂粒を少し含む。	施釉。	白磁。
29-14	碗	c-3	Ⅲ b	透明釉。緑灰白色。貫入なし。	細砂粒を含む。白色粒。黒色粒。	外面；無釉。内面；重ね焼痕(無釉)。	白磁。底径(6.6) cm。
29-15	碗	b-4	Ⅲ b	透明釉。緑灰色。あらい貫入あり。	灰白色。細砂粒を含む。	施釉。	青磁。
29-16	碗	c-3	Ⅲ b	透明釉。青緑色。貫入なし。	細砂粒を少し含む。白色粒。	施釉。外面；蓮弁？。	青磁。片彫り。
29-17	碗	e-4	Ⅲ b	透明釉。青緑灰色。貫入なし。釉が厚い。	明灰白色。	施釉。外面；一条の横線。片彫り。	青磁。
29-18	碗	d-5	Ⅲ b	青灰白色。貫入なし。	灰白色。細砂粒を少し含む。黒色粒。	施釉。	青磁。
29-19	碗	c-3	Ⅲ b	透明釉。明緑灰色。貫入あり。	灰白色。砂粒を含む。赤色粒。	施釉。内面；片彫りによる施文。	青磁。口径(14.7) cm。
29-20	こね鉢	d-3	Ⅲ b	外面；明灰色。内面；鉄錆色。	砂粒を含む。石英。	外面体部；ヨコナデ。他；ナデ。	口径(27.0) cm。
29-21	碗	c-3	Ⅲ b	外面；黄褐色。内面；黒褐色。	砂粒を含む。	ナデ。	底径(7.6) cm。
29-22	碗	c-3	Ⅲ b	外面；黄白色。内面；黒褐色。	砂粒を含む。	ナデ。	底径(6.1) cm。内黒土師器。
29-23	碗	c-3	Ⅲ b	外面；黄白色。内面；黒褐色。	砂粒を含む。黒色粒。白色粒。	ナデ。	底径(6.2) cm。
29-24	碗	b-4	Ⅲ b	透明釉。細かい貫入あり。	濁白色。	高台器み付け部；無釉。他；施釉。	
29-25	不明	e-3	Ⅲ b	淡黄白色。	微細な砂粒を含む。	ユビオサエのちナデ。	底径(6.3) cm。底面；「一」字状の凹部あり。
29-26	皿	b-4	Ⅲ b	外面；茶褐色。内面；黄灰白色。	細砂粒を含む。黒色粒。	摩滅のため不明。	
29-27	皿		Ⅲ b	橙白色。	細砂粒を含む。黒色粒。	底面；糸切り。摩滅のため不明。	器高1.3 cm。
29-28	皿	d-4	Ⅲ b	黄白色。	細砂粒を含む。黒色粒。	ナデ。	器高1.5 cm。
29-29	甃	d-4	Ⅲ b	褐色。	灰褐色。微細な砂粒を含む。	口縁部上面；無釉。他；施釉。	口径(20.75) cm。
29-30	小甕	d-4	Ⅲ b	灰色。貫入あり。	灰白色。	外面～高台内面；施釉。内面；無釉。	底径(2.4) cm。外面；「馬」印あり。

図番号	器種	出土区	出土層	色調・釉調	胎土・磁胎	調整・施文	備考
29-31	碗	d-4	Ⅲ b	外面：茶褐色～灰褐色 内面：淡褐色。	灰褐色。	外面：施釉。他：無釉。	底径(4.1) cm.
29-32	土鉢	f-3	Ⅲ b	赤褐色～黒褐色。	砂粒を含む。白色粒、黒色粒。	ナデ？。	長さ3.5cm。幅1.8 cm.
30-1	甕	f-3	Ⅲ c	明茶褐色。	粗砂粒・砂粒を多く含む。白色粒、赤色粒、角せん石、石英。	口縁部上面：ヨコナデ。口唇部：ヨコナデ。口縁部下面：ユビオサエ。内面：ユビオサエ。	
30-2	不明	a-4	Ⅲ c	灰白色。	灰白色。	施釉。ヨコナデ。	白磁。
30-3	碗	b-4	Ⅲ c	透明釉。緑灰白色。貫入なし。	灰白色。砂粒を含む。白色粒。	施釉。内面：一条の横線。	白磁。
30-4	碗	c-4	Ⅲ c	淡黄白色。	白色。	施釉。	底径(6.0) cm.
30-5	碗	b-5	Ⅲ c	黄白色。	細砂粒を含む。赤褐色。黒色粒。	ナデ。	
30-6	碗	b-5	Ⅲ c	外面：茶褐色(赤色顔料)。内面：茶褐色～明褐色。	細砂粒を多く含む。赤色粒、黒色粒。	ヨコナデ。	外面～口縁部内面：赤色顔料付着。
30-7	碗	b-5	Ⅲ c	黄褐色。	砂粒を含む。石英、角せん石。	外面：ナデ。内面：摩滅のため不明。	底径(5.6) cm.
30-8	碗	e-5	Ⅲ c	黄白色。	砂粒を含む。赤色粒、黒色粒。	ナデ。	
30-9	碗	b-4	Ⅲ c	外面：黄白色。内面：黒褐色。	砂粒・細砂粒を含む。	外面：ナデ。内面：工具による調整のちナデ。	底径(6.4) cm.
30-10	杯？	b-4	Ⅲ c	淡黄白色。	微細な砂粒を含む。	外面・内面：ユビオサエのちナデ。底面：へら切り(?)のちユビオサエのちナデ。	底径(5.0) cm.
30-11	皿	c-4	Ⅲ c	橙白色。	微細な砂粒を含む。	摩滅のため不明。	
30-12	皿	c-4	Ⅲ c	外面：淡黄白色～濁灰色。内面：淡濁灰色。	微細な砂粒を含む。	外面：ナデ。内面：回転ナデ。底面：へら切りのちナデ。	
31-1	碗	c-4, g-4	Ⅳ	透明釉。緑灰白色。貫入なし。気泡あり。	灰白色。細砂粒をわずかに含む。	外面・口縁部下面・内面下部：無釉。他：施釉。	白磁。口径(16.6) cm.
31-2	碗	g-3	Ⅳ	透明釉。緑灰白色。貫入あり。	細砂粒を少し含む。白色粒。	施釉。	白磁。口径(15.3) cm.
31-3	碗	g-3	Ⅳ	透明釉。緑灰白色。貫入なし。	砂粒を含む。白色粒。	外面下部：無釉。他：施釉。	白磁。
31-4	碗	c-3	Ⅳ	透明釉。明緑灰色。貫入なし。気泡あり。	明灰白色。微細な砂粒をわずかに含む。白色粒。	外面：；一条の横線。	白磁。口径(17.0) cm.
31-5	碗	c-4	Ⅳ	透明釉。緑灰白色。貫入あり。気泡なし。	灰白色。	施釉。外面・内面：一条の横線。	白磁。
31-6	碗	b-4	Ⅳ	乳白色。	灰白色。	施釉。	白磁。
31-7	碗	d-3	Ⅳ	透明釉。明黄白色。気泡あり。貫入あり。	明黄白色。微細な砂粒を含む。黒色粒。	施釉。	白磁。
31-8	皿	b-4	Ⅳ	灰緑色。	灰白色。	施釉。	白磁。
31-9	皿？	c-4	Ⅳ	明緑灰色。透明釉。気泡あり。貫入なし。	明灰色。	施釉。	白磁。
31-10	碗	c-5	Ⅳ上	透明釉。明緑灰色。	細砂粒を少し含む。黒色粒。	施釉。内面：ハケ状の施文。	白磁。
31-11	碗	b-3	Ⅳ	乳白色。	灰白色。	外面下部：無釉。他：施釉。	白磁。
31-12	碗	f-4	Ⅳ	透明釉。緑灰色。貫入なし。	灰色。微細な砂粒をわずかに含む。白色粒。	施釉。	青磁。
31-13	碗	c-4	Ⅲ c, Ⅳ	透明釉。緑灰色。	灰色。	施釉。外面：蓮弁。内面：草花文。	青磁。口径(19.3) cm.
31-14	皿	c-3	Ⅳ	明褐色。	微細な砂粒を含む。	外面・内面：ナデ。底面：回転糸切り。	口径(9.0) cm。底径(4.9) cm。器高1.2cm。摩滅している。
31-15	皿	b-4	Ⅳ	外面：黄茶褐色。内面：黄白色。	細砂粒を少し含む。黒色粒、赤色粒。	外面：ナデ？。内面：ヨコナデ。	口径(9.0) cm。底径(6.8) cm。器高1.15cm。

図番号	器種	出土区	出土層	色調・釉調	胎土・磁胎	調整・施文	備考
31-16	皿	d-3	IV	黄白色.	砂粒を少し含む. 黒色粒. 赤色粒.	摩滅のため不明.	器高1.4cm.
31-17	皿		IV	外面; 黄白色. 内面; 暗褐色.	砂粒を含む. 黒色粒. 白色粒.	摩滅のため不明.	器高1.5cm.
31-18	碗	f-5	IV	外面; 明茶褐色. 内面; 黒色.	砂粒を含む. 石英.	ヨコナデ.	口径 (12.65) cm.
31-19	碗	d-4	IV	外面; 黄白色. 口縁部附近・内面; 黄黒色.	細砂粒を少し含む. 黒色粒.	外面; ナデ?. 内面; ヨコナデ. 摩滅している.	
31-20	碗	f-5	IV	橙白色.	細砂粒を含む. 黒色粒.	摩滅のため不明.	
31-21	皿	b-4	IV	橙白色.	砂粒を含む. 黒色粒.	摩滅のため不明.	底径 (9.9) cm.
31-22	皿	d-3	IV	外面; 乳白色. 内面; 褐色.	細砂粒を少し含む. 黒色粒.	摩滅のため不明.	底径 (5.2) cm.
31-23	皿	c-3	IV	橙白色.	砂粒を少し含む. 黒色粒.	摩滅のため不明. 底部; 糸切り痕.	
31-24	皿	d-3	IV	橙白色.	細砂粒を少し含む. 黒色粒.	回転台による? ヨコナデ.	口径 (8.0) cm. 底径 (6.6) cm. 器高2.85cm.
31-25	皿	d-3	IV	橙白色.	砂粒を少し含む. 黒色粒. 白色粒.	ナデ?.	口径 (10.2) cm. 底径 (6.4) cm. 器高3.1cm.
31-26	不明	d-3	IV	内面; 黄褐色. 底面; 黒褐色.	砂粒を含む.	ナデ?.	底径 (6.2) cm.
31-27	碗	f-4	IV	外面; 暗白濁色. 内面; 黒色.	砂粒を含む. 黒色粒. 白色粒.	ヨコナデ?.	底径 (6.4) cm.
31-28	碗	e-4	IV	外面; 灰黄色. 内面; 灰褐色.	砂粒を少し含む. 黒色粒.	ナデ?.	底径 (6.6) cm.
31-29	碗	d-3	IV	外面; 橙白色. 内面; 黒色.	細砂粒を少し含む. 白色粒. 黒色粒.	ナデ.	内黒土師器.
31-30	不明	f-3	IV	外面; 赤褐色. 内面; 乳白色.	砂粒を含む. 黒色粒. 赤色粒.	ナデ?.	口径 (7.8) cm. 底径 (5.6) cm. 器高 (3.0) cm.
31-31	不明	不明	IV	淡褐色.	微細な砂粒を含む.	頂部; 平滑に調整を施されている. 外面・内面; ユビオサエのちナデ.	

表5 石鍋観察表

図番号	出土区	出土層	色調	調整	備考
26-13	c-3	SK20B	外面; (スス付着のため) 黒色. 内面; 黒灰色.	外面; 縦方向の鱗状ケズリ (幅5mm)	底径 (28.3) cm. 外面; スス付着.
26-30	c-3	SK22	明灰褐色.	外面; 縦方向の鱗状のケズリ (幅5mm)	口唇部~内面; 縦方向の刻線あり.
31-32	d-3	IV	外面; (ススのため) 黒色. 内面; 明灰褐色.	外面; 縦方向の鱗状のケズリ (幅6mm).	外面; スス付着.
31-33	b-4	IV	黄白色.	外面鏽以下; 縦方向の鱗状のケズリ (幅6mm)	口径 (16.1) cm. 最大径 (20.4) cm.

表6 煙管観察表

図番号	出土区	出土層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
34-1	不明	I	4.35	1.1	0.1	
34-2	d-4	III b	4.2	火皿 1.4	0.1	
34-3	c-5	III b	5.75	吸い口 0.8	0.1	羅字残存.



表7 土製品観察表

図番号	出土区	出土層	色調	胎土	調整	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
32-1	d-3	I b	明褐色。	細砂粒を含む。白色粒。	無調整。	2.7	2.35	1	ほこら。
32-2	d-3	I b	明褐色。	細砂粒を多く含む。金雲母、白色粒、赤色粒。	裏面：ユビオサエのちナデ。	1.85	2.3	0.85	家型。
32-3	c-2	I b	茶褐色。	粗砂粒～細砂粒を多く含む。白色粒、角せん石。	裏面：ユビオサエのちナデ。	3.05	2.2	1.1	駒犬、少し摩滅している。青色顔料が残存。
32-4	c-4	I b	明茶褐色。	細砂粒を含む。白色粒、角せん石、赤色粒。	裏面：ナデ？。	3.35	2	1.1	駒犬、非常に摩滅している。青色顔料が残存。
32-5	d-3	I b	明褐色。	砂粒・細砂粒を含む。金雲母、白色粒、角せん石。	ナデ？	2.05	1.6	0.6	巾着袋。
32-6	c-5	I b	明褐色。	砂粒を含む。白色粒、角せん石、石英。	裏面：ナデ。	2.05	1.55	0.6	巾着袋。
32-7	g-5	I b	明褐色。	細砂粒を少し含む。白色粒。	裏面：ナデ。	1.6	1.7	0.65	亀甲文。
32-8	d-2	II a	黄白色。	細砂粒を少し含む。白色粒。	裏面：ユビオサエ、白色粒。	1.9	1.7	0.55	？
32-9	d-5	I b	正面：茶褐色～黒褐色。裏面：茶褐色。	細砂粒を含む。角せん石、白色粒。	裏面：ナデ？。	1.7	1.65	0.3	花びら。摩滅している。正面：二次焼成を受ける。
32-10	c-4	I b	明褐色。	砂粒・細砂粒を多く含む。白色粒、角せん石。	摩滅のため、不明。	1.8	2	0.9	人面。
32-11	c-3	I b	明褐色。	微細な砂粒を少し含む。赤色粒、白色粒。	裏面：ナデ。	1.7	1.4	0.55	菊。
32-12	g-2	I b	茶褐色。	砂粒を含む。白色粒、角せん石。	裏面：ユビオサエ。	1.85	1.4	0.5	貝殻。
32-13	c-5	I b	茶褐色。	砂粒を少し含む。白色粒。	裏面：ユビオサエ。	2.55	1.05	0.55	罎管？。
32-14	f-5	I b	茶褐色。	細砂粒を含む。白色粒、角せん石、金雲母。	裏面：ユビオサエのちナデ。	3.95	1.75	0.7	甕笠。
33-1	b-1	I b	明黄白色。	細砂粒を含む。金角雲母、白色粒、角せん石。	内面：ユビオサエ。				兜？。非常に摩滅している。器壁0.5cm。
33-2	b-1	I b	明黄白色。	細砂粒を含む。金角雲母、白色粒、角せん石。	摩滅のため不明。				鳥型。摩滅している。器壁約0.6cm。
33-3	不明	I a	明白褐色。	砂粒を含む。金雲母・白色粒・カクセン石。	内面：ユビオサエ。				摩滅している。
33-4	b-1	III b	黄白色～明灰色。	細砂粒を少し含む。白色粒、石英。	細かいハケ状の工具による施文。	4.1	2.65	2.95	米俵。二か所穿孔あり。二次焼成をうける。器壁0.8cm。

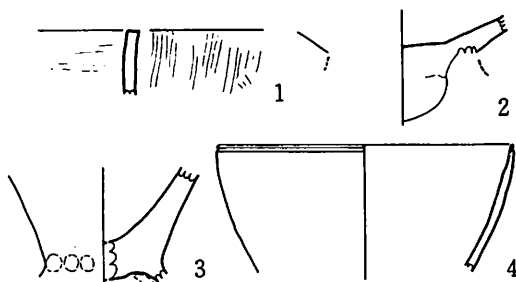
## II. 教育学部附属小学校プール上屋建設地内出土遺物の紹介

鹿児島大学埋蔵文化財調査室においては、平成元年12月18～26日に教育学部附属小学校プール上屋建設に伴い、その掘削部分について発掘調査を行った。その調査成果については既に『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報V』に報告しているが、出土遺物の報告については整理の都合上本年報において行うこととした。以下、遺構埋土中出土遺物・包含層出土遺物・攪乱層出土及び採集遺物の順に、報告を行う。なお、これらの遺物には、建設工事中の立合調査時に採集した遺物も含まれている。

### 1. 遺構埋土中出土遺物（第37図）

本調査においては、No.6 トレンチにおいて、住居址の一部に当たると考えられる落ち込みが検出されている。1は、甕の口縁部片である。小片のためその傾き方は明確にし難いが、直立に近い外反口縁であろう。内外面ともに刷毛目が比較的良好に観察される。2・3は鉢の底部片で、2の底部の瘤状の隆起部は、脚との接合面にあたる。3は小型の鉢で、ごく短い脚がつくようである。4は

1～3とは作りを異にするごく薄手の土器で、碗状の形態を示す。器面は若干磨耗しているが、全面に丁寧なナデ調整が行われたものと考えら



第37図 No.6 トレンチ検出遺構出土遺物（1/3）

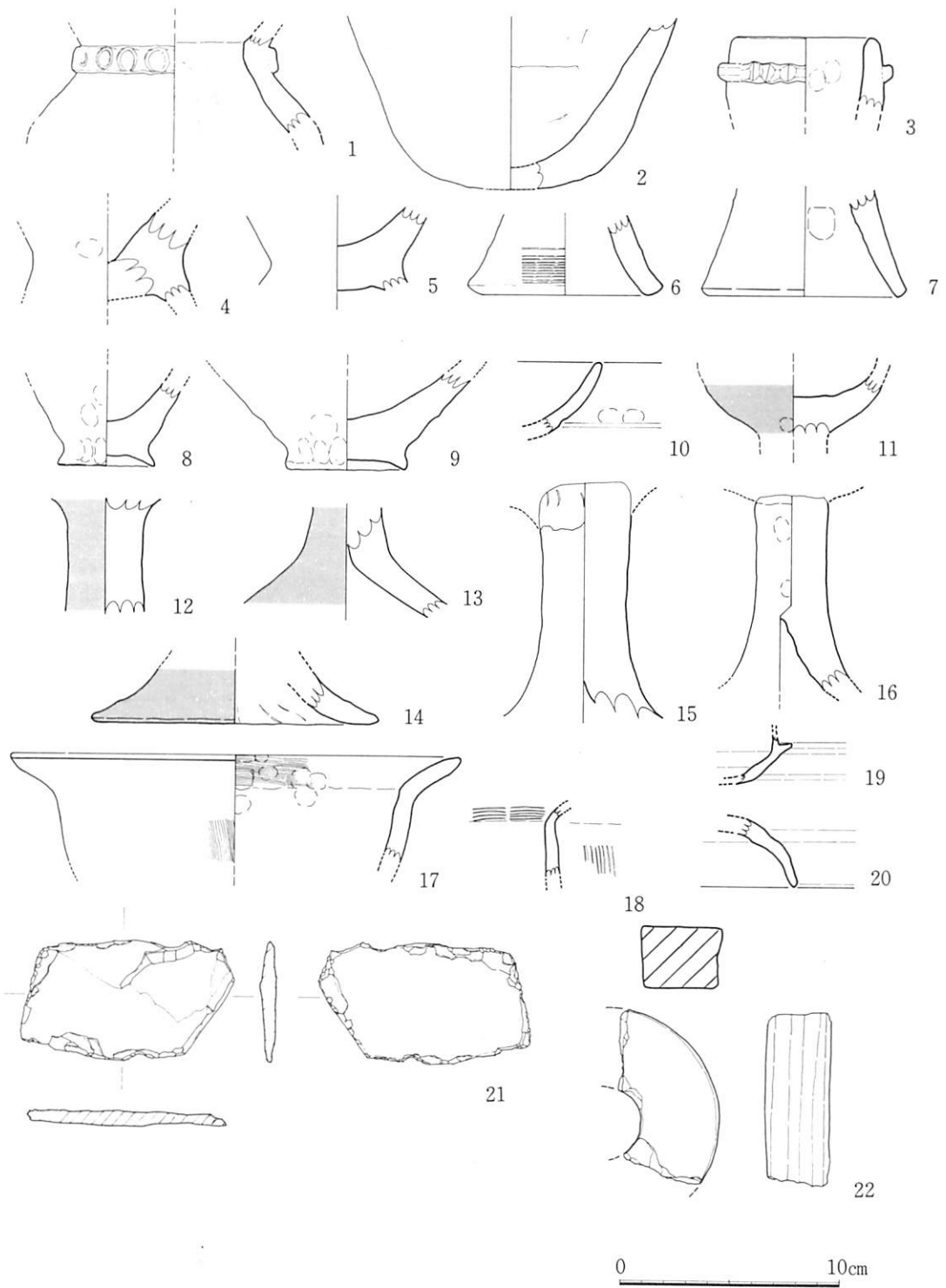
れ、口縁端直下には一条の横走沈線が施されている。

### 2. 包含層出土遺物（第38～43図）

#### (1) 第1層出土遺物（第38図）

第1層からは、現代の製品とともに、ここに紹介する成川式土器・土師器・須恵器・石器等が出土している。

1～16には、成川式土器を壺（1・2）、甕（3～7）、鉢（8・9）、高坏（10～16）の順に示している。1は壺の頸部片で、強く締まった屈曲部外面に断面方形の突帯を一条巡らせている。突帯の外面には竹管によると思われる環状の刺突が連続して施される。2は、壺底部片で、内面にケズリの痕が認められる。3は、口縁部下に刻み目突帯を一条巡らせた甕のミニチュア土器である。4・5は甕の底部付近の、6・7は脚部の破片である。6の外面には横方向の刷毛目調整が認められる。8・9は鉢の底部片である。両者とも底部周縁部を外側から摘むようにユビオサエしてお



第38図 包含層出土遺物(1) (1 / 3)

り、ごく短い脚状の張り出しが生じている。10・11は高坏坏部に相当する破片で、10は坏部底面と立ち上がりの境に段差を作出している。また、11の外面には丹が塗られている。12～16は高坏脚部片で器表面が磨耗している15・16を除き、外面には丹が塗られているのが観察される。外面の調整はユビオサエの痕跡などをかなりよく残すものもあるものの、柱状部分では縦方向の、裾部分では横方向のケンマを施し仕上げている。14には裾端部に、また、15には柱状部に認められる。また、15の杯部との接合面には、縦位の爪の圧痕が一周巡るのが認められる。

17・18は土師器の甕ないし鉢である。17は外方に張らず下方へとすぼまる胴部にかなり外反する口縁部が続く土器で、口縁部内面に横方向の、また胴部外面に縦方向の刷毛目が施されている。18は小片であり、器形等明確にし難いが、17と同様な刷毛目調整痕が認められる。

19・20は、須恵器杯の身と蓋の小片である。19は端部を欠くもののやや長めと思われる立ち上がり部を持ち、外面には自然釉の付着が見られる。

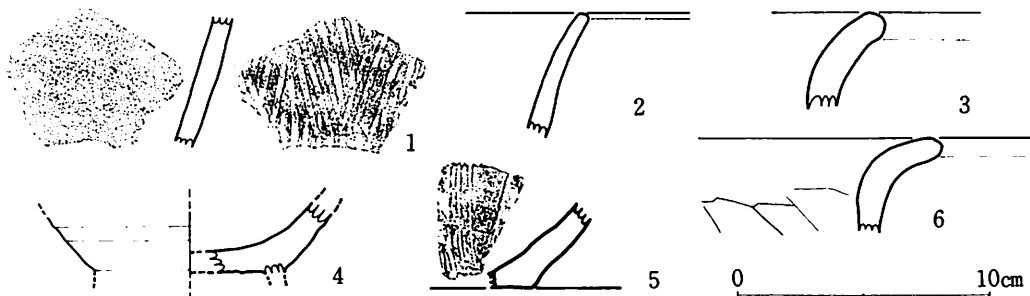
21は横長の板状剝片を用いた石器で、周縁部には二次調整が加えられている。図の上縁・下縁に作り出された袂りが把握のためのものとすれば、中央断面図側の斜辺を使用部位として想定できよう。ただし、具体的な使用法等については不明である。22は滑車形の石製品で、全面にわたり丁寧に整形されている。外周部中央にはごく浅い溝状の凹部が巡っている。

## (2) 第3層出土遺物 (第39図2～6)

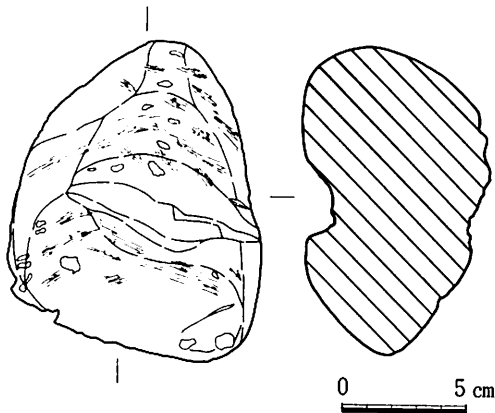
2は成川式土器鉢の口縁部片で、現存部には突帯貼付の痕は認められない。3・6は、土師器の口縁部片である。小片のため口径等の復元は困難であるが、6の内面には図上で左上がりのケズリの痕跡をとどめている。4は土師器の高台付碗の胴下半から底部にかけての破片で、内面を丁寧にナデ調整し平滑に仕上げている。また、外面及び底面には回転ナデ調整が施されている。5は播鉢底部小片で、内面おろし目の櫛目は4条以上である。淡青灰色を呈し、内外両面にユビオサエの痕跡をよく残している。

## (3) 第4層出土遺物 (第40図)

一面に溝状の凹部を作出した軽石製品である。凹部の形成以外には、周縁部の成形を含めてこれ



第39図 包含層出土遺物(2) (1 / 3)



第40図 包含層出土遺物(3) (1/3)

といった調整はなされていないようである。

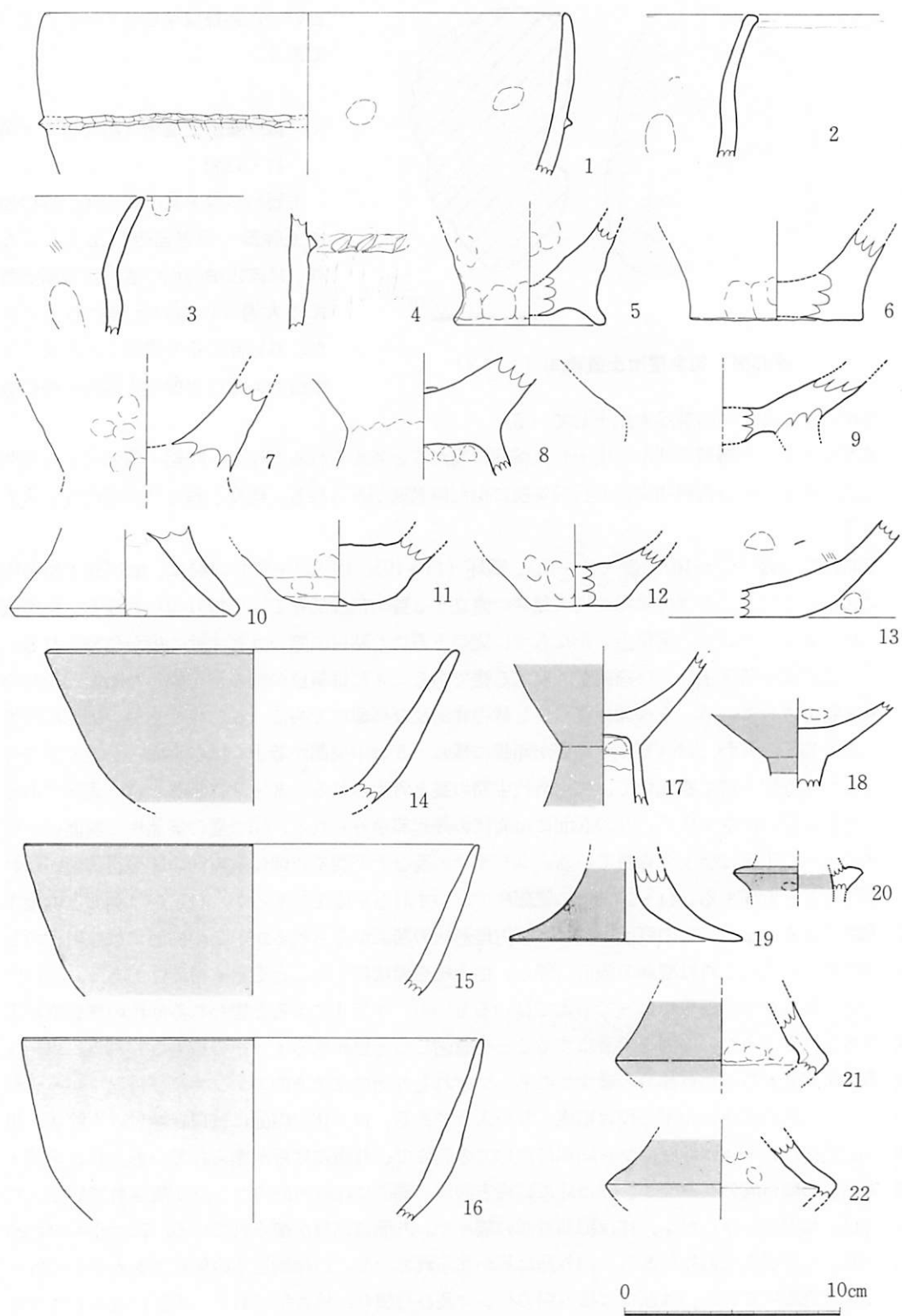
(4) 第5層出土遺物 (第39図1・第41・42図)

本層からは多数の成川式土器の他に土師器・須恵器等が出土しており、ほぼ古墳時代の遺物包含層と考えると大過ないものと思われる。また、外縁部に手で握りしめたような痕跡がある粘土塊や先端部に敲打痕

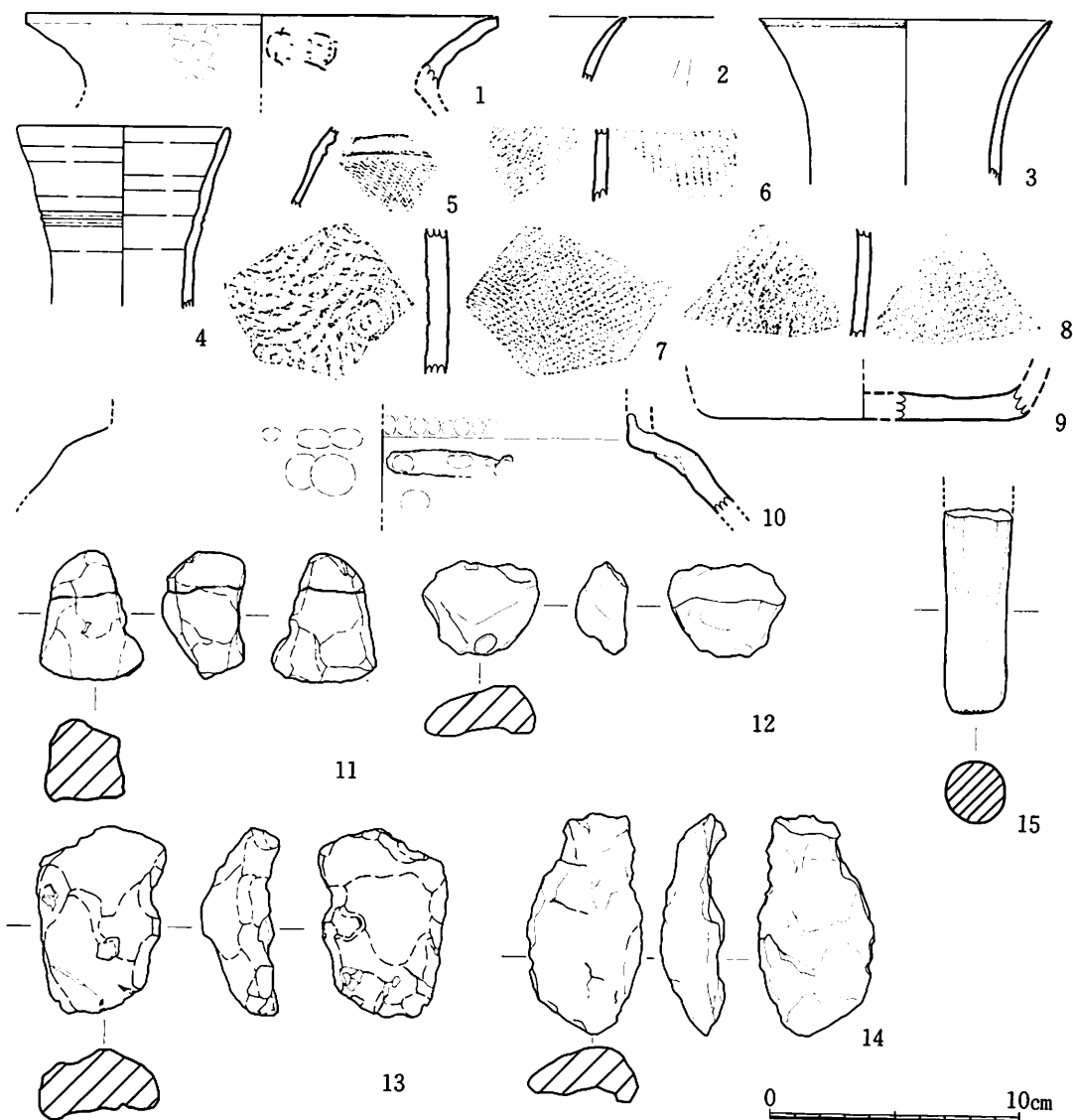
が認められる棒状の石製品も出土している。

第39図1は第5層最下部から出土した胴部に当たると考えられる小片で、時期・器形などは不明である。外面には複合鋸歯文状の貝殻条痕に似た擦過痕がみられる。縄文土器である可能性も考えられる。

第41図には甕(1~10)、壺(11~13)、高坏(14~19)、柑(21・22)の順に、成川式土器を中心に図示している。1は口縁部が内湾気味に直立する甕の口縁部片で、小振りのいわゆる「絡縄突帯」が一条巡っている。突帯上のみならず、突帯下方にも貼付の際のユビオサエ痕が認められる。2~4は肩部が若干張り、口縁部が外反する甕である。4には斜位の刻み目を施した断面三角形の突帯が貼付されている。5~10は甕ないし鉢の底部及び脚部片である。5にはごく短い脚部が付くが、この脚部の外面にはユビオサエ痕が明瞭に残る。6は中央部が若干くぼむ平底から緩やかに外反しながら胴部へ続く底部片で、弥生時代中期の甕と考えられる。8・9は脚部が付く底部であるが、ともに底径がやや広く、9の底面には瘤状の隆起部がみられる。10は甕の脚部片で器面はナデ調整によって丁寧に仕上げられている。ユビオサエ及びナデ調整以前に縦方向の刷毛目調整が行われていることも伺える。11~13は壺の底部片で、いずれも平底を呈するが、11・13は胴部との境が不明瞭である。また、11の底面中央には、円錐形状の凹部がみられるが、この内面には放射状のしわが生じている。これは底部の成形に際し、粘土紐を環状にしたことを示す可能性もある。13の内面には、かなりナデ調整によって消えてはいるものの、ケズリによると思われる砂粒の移動痕が多数認められる。また、内面を平滑にすることを意図したと思われるミガキの痕もみられる。14~16は高坏坏部の立ち上がり部分の破片である。いずれも外面には横方向のケンマ及び丹塗りがみられる。また、坏部底部との境に段は形成しないようである。14・16の内面には口縁端付近を除き、黒斑が広がる。17・18は坏底部から脚部にかけての破片で、外面には丹が塗られている。17は坏部・脚部ともに横方向のケンマが、18は坏には横方向の、脚部には縦方向のケンマが施されている。17の内面には黒斑がみられる。19は脚部裾部の破片で、外面には丹が塗られている。20は小片のため器形等全く不明の土器片である。内外面に丹が塗られている。口縁端近くの破片であろうか。21・22は柑の胴部片である。外面には横方向のケンマ及び丹塗りが施されており、内面にはユビオサエ



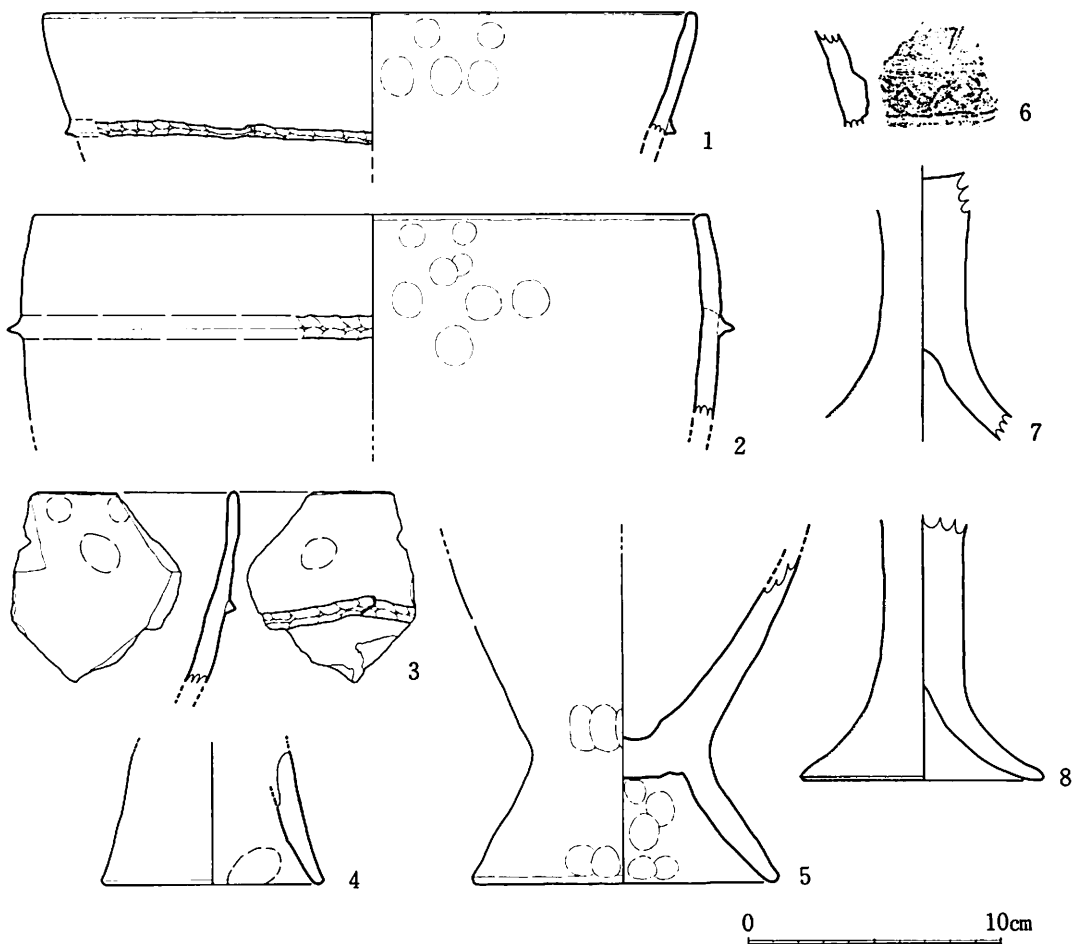
第41图 包含層出土遺物(4) (1/3)



第42図 包含層出土遺物(5) (1 / 3)

の痕跡が明瞭である。

第42図には、第5層出土遺物之内、成川式土器以外のものを図示する。1は短い口縁部が強く外反する甕で、口唇部には摘みだし状の突起がみられる。2・3はおそらく長頸壺であろうと思われる土器の口縁部片である。器壁は薄く、口縁端直下には1～2条の細い沈線を巡らせている。1～3は在地の成川式土器とは趣をかなり異にする土器であり、特に2・3は器形の他、胎土、色調及び器壁の薄さなどの諸点において異なるものである。



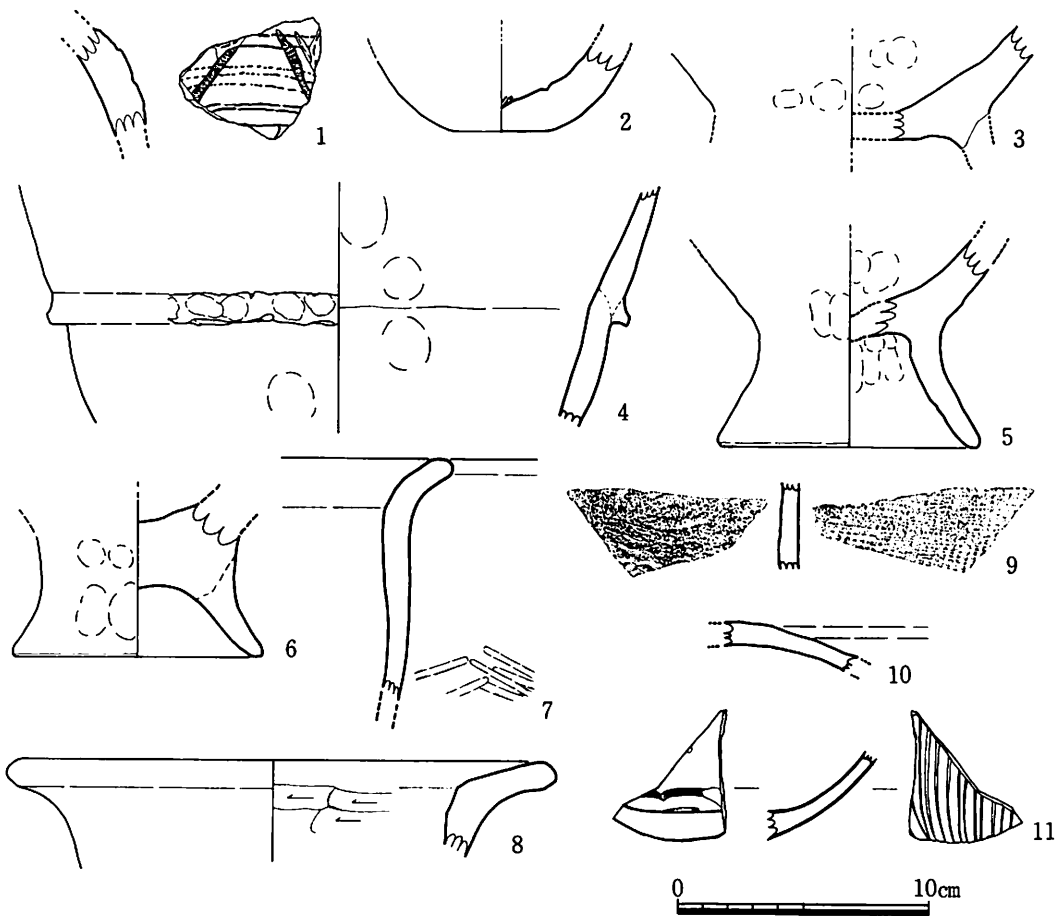
第43図 包含層出土遺物(6) (1/3)

4～8には須恵器を示している。4は長頸壺の口縁部片で、外面には口縁先端部付近を除きカキ目が残る。図中央部に二条の沈線が互いに接して施されている。5は壺の頸部片で、外面には突帯間に櫛描き波状文が施される。内面には自然釉が付着する。6～8は大甕の胴部片と思われる小片で、内面には同心円状の当て具痕が、また、外面には平行叩き目が認められる。

9は径13cm程に復元できる平底の破片で、内面にはユビオサエの痕がかなり明瞭に残るが、外面はかなり摩耗している。器形・時期などは不明であるが、縄文土器である可能性も考えられる。10は肩部が張る壺形を呈すると考えられる土器で、頸部と胴部との接合面が擬口縁をなしている。この接合面においてはユビオサエ痕が明瞭に認められ、また本資料の内面は仕上げの調整が非常に雑であり、粘土紐の接合状況を観察できる。

11～14は粘土塊と考えられるものである。13・14などの比較的残りの良いものには長辺の一方に





第44図 攪乱層出土および採集遺物 (1/3)

指の腹側で抑えた結果生じたとも考えられる窪みがみられる。全体の形状は不整であるものの、ほぼ細長く湾曲した縦断面を呈するようである。土器製作のための粘土紐の一部に当たる可能性も考えられよう。

15は径2.4cm程の棒状の石製品で、平坦面をなす端部には全面に敲打痕が認められる。また、この先端部を除く部分は全て丁寧に擦られている。

#### (5) 黒色粘質シルト層出土遺物 (第43図)

1～8に成川式土器の甕(1～5)、壺(6)、高坏(7・8)を示す。1～3は直行ないし内湾口縁甕の口縁部片で、外面には全ていわゆる「絡縄突帯」を一条貼付している。2においては粘土帯接合部直下に突帯を突帯を施しているのが観察される。2・3は口縁部外面に黒斑が認められる。4は甕の脚部で、ほとんど裾開きをせず直線的にのびる胸部との接合面から剥離しており、接合面においては深い圧痕を示すユビオサエ痕が明瞭に認められる。5はほぼ直線的に開く脚部を持つ甕の底部である。脚部接合部の上方には、斜めにナデ上げたようなユビオサエ痕が認められる。

6は断面低台形状の突帯が貼付されている壺の肩部片である。突帯上には鋸歯状に押圧が施されているが、この押圧された凹面には布目圧痕が認められる。7・8は高坏脚部で両者ともほぼ棒状の脚上部にやや短い裾部が続くようである。7は摩耗しているため器面調整など不明であるが、外面に黒斑がみられる。8は外面に横方向のケンマ及び丹塗りが認められる。

### 3. 攪乱層及び採集遺物（第44図）

1・2は成川式土器の壺である。1は壺肩部の突帯貼付部分小片である。突帯は低平な台形状を呈し、鋸歯状に二平行圧痕線が施されている。この押圧部分には布目の圧痕が認められる。2は成川式土器壺の底部片で、径4cmほどの平底に復元できる。底部内面はほぼ中央には放射状を呈すると思われるしわがみられる。3～6は成川式の鉢ないし甕である。脚が胴部との接合面から剝離しているが、この部分にユビオサエ痕が明瞭に認められることは他の例と同様である。4は若干膨らむ胴部に内湾気味の直行口縁が続く甕の破片で、断面三角形のいわゆる「絡縄突帯」が貼付されている。突帯の整形はあまり丁寧ではなく、突帯の上縁部・下縁部には若干の亀裂もみられる。5・6は脚を伴う甕の底部片で、5では下方へやや突出気味の底部に、6では平底気味の底部になだらかな曲線を描いて開く脚が付く。

7・8は土師器甕の口縁部片である。両者とも胴部内面にケズリ痕を残すが、8では口縁屈曲部直下まで横方向のケズリがなされている。また、8は器壁が若干厚手である。

9は須恵器大甕の胴部と考えられる小片である。外面に平行叩きの痕が、また内面に同心円の当て具痕が認められる。10は須恵器坏蓋の頂部付近の破片と思われるもので、外面にはナデ調整以前の回転ケズリ痕が認められる。回転の方向は頂部側からみたとき、右回りである。

11は内外面に若干不透明な緑灰色の釉がかかる青磁碗の小片で、外面には密な縦線文が内面には櫛状工具により弧文が描かれている。

表8 土器観察表

図番号	器種	出土トレンチ	出土	色調	胎土	調整	備考
37-1	甕	Na.6トレンチ	遺構埋土中	明褐色	砂粒を含む。	外面；ハケのちナデ。内面；ハケのちナデ。	
37-2	甕	Na.6トレンチ	遺構埋土内	外面；橙白褐色。 内面；橙白色。	角閃石、白色粒。	ナデ、ユビオサエ。	
37-3	鉢	Na.6トレンチ	遺構埋土内	外面；赤褐色。 内面；橙白褐色。	角閃石、黒色粒。	ナデ、ユビオサエ。	
37-4	碗形鉢	Na.6トレンチ	遺構埋土内	外面；淡黄白色。 内面；黄灰色。	微細。	内外面ともに丁寧なナデ。	器壁が非常に薄い。
38-1	壺	Na.12トレンチ	1	淡黄白色。	微細な砂粒を含む。 角閃石。	外面；竹管刺突文、ナデ。内面；ユビオサエのちナデ。	やや軟質。
38-2	壺	Na.12トレンチ	1	外面；茶褐色～褐色。 内面；茶褐色。	粗砂～砂粒、白色粒、赤色粒、石英を含む。	外面；丁寧なナデ。内面；ケズリのちナデ。	
38-3	甕	Na.4トレンチ	1	濁褐色。	石英、角閃石を含む。	外面；ナデ。内面；ユビオサエ、ナデ。	堅緻。
38-4	甕	Na.12トレンチ	1	淡褐色。	6mm大の砂粒を含む。 角閃石。	ユビオサエのちナデ。	堅緻。

図番号	器種	出土トレンチ	出土	色調	胎土	調整	備考
38-5	甕	Na12トレンチ	I	赤褐色。	白色粒、黒色粒、角閃石を含む。	ナデ。	器面が摩滅している。
38-6	甕	Na12トレンチ	I	橙白色。	白色粒、角閃石、2mm程度の石英。	外面；ナデ、ヨコナデ。内面；ナデ。	底径7.2cm。
38-7	甕	Na13トレンチ	I	外面；明橙白色。内面；褐色。	白色粒、角閃石、多量の石英。	ナデ。	器面が摩滅している。底径8.6cm。
38-8	鉢	Na12トレンチ	I	淡褐色。	微細粒、角閃石を含む。	外面；ユビオサエ、ナデ。内面；ナデ。	堅緻でやや軟質。底径4.3cm。
38-9	鉢	Na13トレンチ	I	外面；淡褐色。内面；灰褐色。	石英、角閃石を含む。	ユビオサエ、ナデ。	堅緻。底径5.4cm。
38-10	高坏	Na12トレンチ	I	淡黄白色。	石英を含む。	外面；ユビオサエ、ナデ。内面；ナデ。	堅緻。
38-11	高坏	Na12トレンチ	I	外面；丹塗り。内面；淡褐色。	角閃石を含む。	外面；ユビオサエ、横方向のケンマ。内面；ユビオサエ、ナデ。	堅緻。
38-12	高坏	Na9トレンチ	I	丹塗り。	白色粒、角閃石を含む。	ミガキ？。	
38-13	高坏	Na9トレンチ	I	外面；丹塗り。内面；(茶色がかった)橙白色。	白色粒、黒色粒、石英を含む。	外面；横方向のミガキ。内面；ナデ。	
38-14	高坏	Na6トレンチ	I・II	外面；丹塗り。内面；濁褐色。	微細。	外面；横方向のケンマ。内面；ユビオサエ、ナデ。	堅緻。外面に一部黒斑あり。
38-15	高坏	Na9トレンチ	I	明橙白色。	白色粒、角閃石を含む。	縦方向のミガキ。	外面に一部黒斑あり。接合部に爪痕あり。表面は摩滅。
38-16	高坏	Na12トレンチ	I	淡黄褐色。	微細な砂粒、角閃石を含む。	ユビオサエ、ナデ。	堅緻。
38-17	甕	Na6トレンチ	I	濁褐色。	角閃石、石英を含む。	外面；ハケ目のちナデをヨコナデで切る。内面；ユビオサエ、ハケ目、ナデ。	堅緻。外面に一部ススが付着。
38-18	不明	Na12トレンチ	I	外面；淡黄灰色。内面；淡黄褐色。	黒色粒、赤色粒、5mm大の砂粒あり。	外面；ヨコナデ、ハケのちナデ。内面；ヨコハケのちナデ、ユビオサエのちナデ。	堅緻。
38-19	坏蓋	Na13トレンチ	I	青灰色。	微細、白色粒、黒色粒を含む。	外面；回転ケズリのちナデ。内面；回転ナデ。	須恵器、堅緻。
38-20	坏蓋	Na9トレンチ	I	淡青灰色。	微細、1mm大の砂粒を含む。	回転ナデ。	須恵器、堅緻。
39-1	深鉢	Na6トレンチ	III	茶褐色。	白色粒、角閃石を含む。	外面；貝殻条痕。内面；ナデ、ユビオサエ。	
39-2	鉢	Na6トレンチ	III	外面；茶褐色。内面；明橙白色。	白色粒、赤色粒、角閃石を含む。	ナデ。	外面にスス付着。内部に黒斑あり。
39-3	甕	Na4トレンチ	III	外面；黒褐色。内面；赤褐色。	白色粒、角閃石、石英。	ヨコナデ。	
39-4	甕	Na4トレンチ	III	外面；黒褐色。内面；赤褐色。	白色粒、角閃石、石英。	外面；ヨコナデ。内面；ケズリ、ヨコナデ。	外面にスス付着？。
39-5	坏	Na4トレンチ	III	淡褐色。	微細、角閃石、雲母。	外面；回転ナデ。内面；ナデ。	堅緻。
39-6	槽鉢	Na4トレンチ	III	灰色。	赤色粒、微細な砂粒。	ヨコナデ。	須恵器。内面に縦方向の数条の刻線あり。
41-1	甕	Na9トレンチ	V	明橙白色。	角閃石、石英を含む。	外面；ナデ。内面；ヨコナデ。	口唇部内面に赤色顔料が所々付着。口径24.2cm。
41-2	甕	Na6トレンチ	V	外面；黒褐色。橙白褐色。内面；橙白色。	白色粒、赤色粒、角閃石、石英を含む。	外面；ナデ。内面；ハケのちナデ。	内面にハケ具痕が残る。
41-3	甕	Na12トレンチ	V	赤褐色(丹塗り?)。	白色粒、赤色粒、角閃石、石英を含む。	外面；ナデ。内面；ユビオサエ、ナデ。	内面にハケ具痕が残る。

図番号	器種	出土トレンチ	出土	色調	胎土	調整	備考
41-4	甕	№.6トレンチ	V	外面：黒色。内面：茶褐色。	白色粒，角閃石，石英を含む。	外面：ハケのちナデ。内面：横方向のナデ。	傾き不明，器面が摩滅している。
41-5	鉢	№.11トレンチ	V	外面：淡褐色。内面：淡黄褐色。	黒色粒，多量の角閃石を含む。	ユビオサエ，ナデ。	底径6.8cm。
41-6	鉢	№.11トレンチ	V	外面：暗灰褐色。内面：淡黄褐色。	角閃石，雲母を含む。	ユビオサエ，ナデ，底部；ナデ。	底径8.0cm。
41-7	甕	№.12トレンチ	V	外面：淡褐色。内面：暗褐色。	角閃石，石英，6～7mm大の砂粒を含む。	ユビオサエのちナデ。	内面には何らかの工具によると思われる長さ1.4cm程の短沈線状の圧痕が4ヶ所みられる。
41-8	甕	№.9トレンチ	V	明橙白色。	白色粒，赤色粒，角閃石，石英を含む。	ナデ，脚台内面；ユビオサエのちナデ。	外面に接合線が明瞭に見られる。内面底部には爪痕が5つ見られる。
41-9	甕	№.9トレンチ	V	外面：黄白色。内面：暗褐色。	砂粒を多く含む。	ユビオサエのちナデ。	堅緻。
41-10	甕	№.11トレンチ	V	灰褐色。	白色粒，角閃石，石英を含む。	外面：ハケ（7本/cm）のちナデ。内面：ナデ。	底径10.8cm。
41-11	壺	№.9トレンチ	V	外面：濁褐色。内面：褐色。	角閃石，黒曜石の微細片を含む。	ユビオサエのちナデ。	堅緻。底径5.4cm。
41-12	壺	№.4トレンチ	V	淡黄白色。	微細な黒色粒を含む。	ユビオサエのちナデ。	内面がやや摩滅している。底径3.9cm。
41-13	壺	№.9トレンチ	V	外面：茶褐色。内面：明橙白色～灰褐色。	白色粒，石英，角閃石（多数）を含む。	ユビオサエ，ナデ。	内面に爪痕が残る。
41-14	高坏	№.8トレンチ	V	外面：丹塗り。内面：淡黄白色。	微細な砂粒を含む。	外面：ユビオサエのちケンマ（横方向1mm）。内面：ユビオサエ，ナデ。	内面に黒斑が全体に見られる。
41-15	高坏	№.12トレンチ	V	外面：丹塗り。内面：明橙白色。	白色粒，角閃石，石英を含む。	外面：ミガキ（横方向幅1mm程度）。内面：ナデ。	接合線が残る。外面が摩滅している。口径21.2cm。
41-16	高坏	№.9トレンチ	V	外面：丹塗り。内面：橙白色。	白色粒，黒色粒，角閃石を含む。	外面：ミガキ（横方向幅1mm程度）。内面：ヨコナデ。	内面に黒斑あり，赤色顔料が付着。口径21.4cm。
41-17	高坏	№.9トレンチ	V	外面：丹塗り。内面：黒褐色。底部内面：明橙白色。	白色粒，角閃石を含む。	外面：ミガキ（横方向）。内面：ナデ。	接合線が残る。表面が摩滅している。
41-18	高坏	№.9トレンチ	V	外面：丹塗り。内面：明橙白色。	白色粒，黒色粒，角閃石，石英を含む。	外面：ミガキ（横方向幅1mm）。内面：ナデ。	内面に一部赤色顔料が残る。
41-19	高坏	№.9トレンチ	V	丹塗り。	角閃石，石英を含む。	摩滅のため不明。	底径10.9cm。
41-20	不明	№.4トレンチ	V	丹塗り。	石英を含む。	外面：ユビオサエ，ナデ。内面：ナデ。	器種が不明。
41-21	埴	№.12トレンチ	V	外面：丹塗り。内面：淡黄灰色。	微細粒を含む。	外面：ユビオサエ，ケンマ（横方向幅1mm弱）。内面：ユビオサエ，ナデ。	
41-22	埴	№.11トレンチ	V	外面：丹塗り。内面：淡褐色。	微細粒を含む。	外面：ケンマ。内面：ユビオサエ，ナデ。	
42-1	甕	№.12トレンチ	V	外面：淡褐色。内面：淡黄白色～淡褐色。	角閃石，石英を含む。	ユビオサエ，（ヨコ）ナデ。	堅緻，口径19cm。
42-2	壺	№.12トレンチ	V	外面：橙白褐色。内面：明橙白色。	白色粒，黒色粒を含む。	ナデ。	
42-3	壺	№.12トレンチ	V	明橙白色。	白色粒，赤色粒を含む。	ナデ。	口径11.5cm。

凶番号	器種	出土トレンチ	出土	色 調	胎 土	調 整	備 考
42-4	甌	№9 トレンチ	V	青灰色。	微細、石英(径2ミリ)を含む。	外面;カキメ。内面;回転ナデ。	須患器、口径8.2cm。
42-5	甌	№9 トレンチ	V	外面;暗黒褐色、内面;茶褐色。	微細、堅緻。	外面;波状紋。内面;自然釉が風化。	須患器。
42-6	大甕	№9 トレンチ	V	外面;黒褐色、内面;灰色。	微細、白色粒、堅緻。	外面;しま模様タタキ痕。内面;同心円あて具痕。	須患器。
42-7	大甕	№9 トレンチ	V	灰色。	微細、白色粒、堅緻。	外面;タタキ。内面;同心円あて具痕。	須患器。
42-8	大甕	№9 トレンチ	V	灰褐色。	白色粒、石英、堅緻。	外面;格子目タタキ痕。内面;同心円あて具痕。	須患器。
42-9	深鉢	№4 トレンチ	V	暗褐色～明茶褐色。	白色粒、角閃石を含む。	外面;ナデ。内面;摩滅により不明。	器面が摩滅している。底径11.8cm。
42-10	壺	№1 トレンチ	V	外面;淡濁灰色、内面;淡褐色。	角閃石、石英を含む。	ユビオサエ、ナデ。	焼成がやや脆い。
43-1	甕	№9 トレンチ	黒色土	淡黄褐色。	角閃石を含む。	外面;ユビオサエのちナデ。内面;ユビオサエ、ナデ。	堅緻、口径25.5cm。
43-2	甕	№9 トレンチ	黒色土	外面;淡褐色、内面;淡黄褐色。	微細、黒曜石片を含む。	外面;ユビオサエのちナデ。内面;ユビオサエ、ナデ。	堅緻、外面に黒斑とスス付着。内面に接合痕あり。口径26.9cm。
43-3	甕	№9 トレンチ	黒色土	外面;明橙白色、内面;橙白色。	白色粒、角閃石、石英を含む。	ユビオサエ、ナデ。	外面口縁部に黒斑がある。
43-4	甕	№9 トレンチ	黒色土	外面;明橙白色、内面;(赤味がかった)橙白色。	白色粒、角閃石、石英を含む。	外面;ナデ。内面;ユビオサエ、ナデ。	底径8.5cm。
43-5	甕	№9 トレンチ	黒色土	明橙白色。	白色粒、角閃石、石英を含む。	外面;ユビオサエ、ハケのちナデ。内面;ユビオサエ、ナデ。	内面底に爪痕あり。器表面剥離。底径12cm。
43-6	壺	№9 トレンチ	黒色土	外面;明橙白色、内面;橙白色。	白色粒、角閃石、石英を含む。	外面;ヨコナデ。内面;ナデ。	突帯凹部に布目圧痕が残る。
43-7	高坏	№9 トレンチ	黒色土	明橙白色。	白色粒、角閃石、石英を含む。	外面;ミガキ。内面;ナデ。	黒斑があり。器表面が摩滅している。丹塗り。
43-8	高坏	№9 トレンチ	黒色土	外面;丹塗り、内面;暗橙白色。	白色粒、角閃石、石英を含む。	外面;ミガキ。内面;ナデ。	丹塗り、底径9.4cm。
44-1	壺	№4 トレンチ	不明	外面;明橙白色、内面;橙白色。	白色粒、赤色粒、角閃石を含む。	ナデ。	
44-2	壺	№3 トレンチ	不明	外面;淡褐色、内面;淡濁褐色。	角閃石、石英を含む。	ユビオサエ、ナデ。	底径4cm。
44-3	鉢	№4 トレンチ	不明	淡明褐色。	石英、雲母を含む。	ユビオサエ、ナデ。	焼成がやや脆い。
44-4	甕	№4 トレンチ	不明	淡黄白色。	角閃石、石英を含む。	ユビオサエ、ナデ。	堅緻。
44-5	甕	№7 トレンチ	排土中	濁褐色。	角閃石、石英を含む。	ユビオサエ、ナデ。	底径10.15cm。
44-6	甕	№3 トレンチ	不明	淡明褐色。	砂粒(径5mm)、角閃石、石英を含む。	ユビオサエ、ナデ。	底径9.8cm。
44-7	甕		排土中	茶褐色～黒褐色。	白色粒、黒色粒、角閃石、石英を含む。	外面;ハケのちナデ。内面;ヨコナデ。	表面に工具痕あり。
44-8	甕		排土中	外面;黒褐色、内面;赤褐色。	白色粒、石英を含む。	外面;ヨコナデ。内面;ケズリ、ナデ。	外面にスス付着。口径20.8cm。
44-9	大甕		排土中	外面;黒褐色、内面;灰色。	白色粒、赤色粒、黒色粒を含む。	外面;タタキのちナデ。内面;同心円あて具痕。	須患器、堅緻。
44-10	坏蓋		排土中	外面;青灰色、内面;深灰色。	微細。	外面;回転ケズリのちナデ。内面;ユビオサエ、ナデ。	須患器、堅緻。
44-11	碗		排土中	緑色の釉。	淡灰白色、黒色の微砂粒を含む。	片彫。	

表9 石器観察表

図番号	器種	出土トレンチ	出土層	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材
38-21	不明	No.12トレンチ	I	9.1	5.5	0.8	60	安山岩
38-22	滑車型石製品	No.4トレンチ	I			2.8	142	
40	凹み石	No.5トレンチ	IV	12.8	10.45	7.6	266	軽石
42-15	石杵	No.3トレンチ	V		2.4	2.5	96	砂岩

表10 土製品

図番号	出土トレンチ	出土層	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
42-11	No.3トレンチ	V	5.1	3.1	3.2	45
42-12	No.3トレンチ	V	3.7	4.4	2	26
42-13	No.3トレンチ	V	7.5	4.8	2.8	64
42-14	No.3トレンチ	V	8.8	4.6	2.5	63

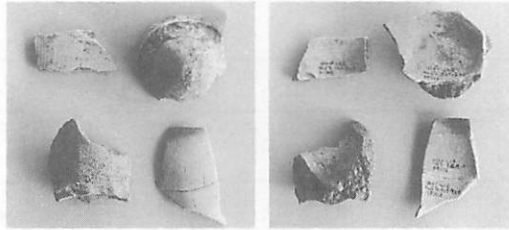


写真4 No.6トレンチ検出遺構埋土中出土遺物

### Ⅲ. 鹿児島大学電子計算機室新築工事に伴う埋蔵文化財 発掘調査報告（昭和58年度 鹿児島県教育委員会調 査）

#### 1. 調査の経過と組織

農学部実習地の周辺は、過去に古墳時代の集落や川などの遺構が発見され、昭和50年に行われた構内の分布調査でも広い範囲に古墳時代の土器の散布が確認されている。昭和58年度事業として計画された電子計算機室の予定地（図版1参照）もまた、散布地として水田あるいは集落の存在が予想されていた。また、ここは字名を塩焼と言ひ、その名から古代製塩遺跡の可能性も考えられていた。そのため、遺跡の保存について県文化課と大学当局との間で話し合いがもたれ、8月8日から1ヵ月の予定で調査を実施することになった。

##### (1) 調査組織（所属は当時）

調査主体者 鹿児島大学

調査責任者 猿渡 候（鹿児島県教育委員会文化課長）

事務担当者 知念朝吉（鹿児島大学施設部企画課長）

仮屋孝一（鹿児島大学施設部企画課企画係長）

調査担当者 吉永正史・池畑耕一（鹿児島県教育委員会文化課）

##### (2) 調査日誌（抄）

- 8月8日（月） 草刈り。ユンボによって表土剥ぎ。表土を剥いだ後、土壌からブタ・ウシ・ウサギなどの骨が出土。農学部の西中川駿助教授・松元光春助手指導。
- 9日（火） ユンボとシャベルで排土。獣骨は現代のものだったため取り上げる（ブタ3・ウシ1・ウサギ1）。東と西端に幅1mのトレンチを設定して掘り下げる。東のトレンチに2条の溝。
- 10日（水） 北端を3m幅黒色粘土まで掘り下げる。西端付近に斜め方向の浅い溝を確認。
- 11日（木） 重機による表土剥ぎの跡を清掃。
- 12日（金） 北側の溝を東の方から掘り下げる。東端壁を清掃し、写真撮影、実測。
- 16日（火） 溝1の掘り下げ。
- 17日（水） 溝1・2の掘り下げ。溝2から土師器・内黒土師器が出土。宮崎大学農学部藤原宏志助教授らによりプラントオパール分析のためのサンプル採取。
- 18日（木） 溝2を掘り下げながら水田遺構の検出。
- 19日（金） 溝2を掘り下げながら水田遺構の検出。
- 22日（月） 溝2の掘り下げ。花粉分析のためのサンプル採取。
- 23日（火） 溝2の掘り下げ。4区付近の断面清掃後、写真撮影、実測。
- 24日（水） 溝2の掘り下げ。
- 25日（木） 溝1・2の掘り下げ。溝2の6区付近の断面を清掃後、写真撮影、実測。1A

・ 1 B・2 A・2 B区の水田面に2次シラスの堆積が見られる。

- 26日(金) 全景写真撮影。水田面の2次シラス除去。溝2の平面実測。溝3の掘り下げ。  
27日(土) 溝1・2の実測。  
29日(月) 溝2・3の掘り下げ。河口貞徳県文化財審議委員の現地指導。  
30日(火) 水田面の検出。溝2・3のアゼはずし、掘り下げ。  
31日(水) 雨のため、午前で作業をやめる。  
1日(木) 溝2の掘り下げ。溝3・4の断面写真撮影、実測後取り外し。  
2日(金) 溝2・3・4の実測。  
3日(土) 水田面・溝2の実測。

(3) 見学者(敬称略。所属は当時。鹿児島大学関係者は除いた。)

鎌木義昌(岡山理科大学)、森山栄一(熊本県教育委員会)、成尾英仁(徳之島高校)、  
旭慶男(鹿児島大学附属小学校)、西井上剛資(鹿児島県立博物館)

## 2. 層序

発掘地点は河川の氾濫あるいは溝の構築などによって部分的に層の分断などがあるが、調査できた部分では基本的に22層に分けることができた。下のほうから層の観察結果を記しておきたい。

21・22層は黒褐色あるいは青灰色を呈する粘質をおびた砂層である。21層には軽石も多く含まれており、海岸線あるいは河口付近の様相を呈している。

17～20層は黒色あるいは黄白色などを呈する粘土の層である。ヨシなどがはえていた低湿地の様相を呈している。

13～16層は黄灰色あるいは白灰色を呈する砂層で14層のみが砂質粘土である。14層は低湿地であるが他は河川の氾濫による砂の堆積と思われる。

7～12層は白灰色、黒灰色などを呈する粘質砂あるいは粘土の層で、平安時代後半の溝がこれらの層を削っていること、12層の年代が昭和62年の調査で平安時代のものであることがわかったことから平安時代の層であり、一部を除き水田の跡と思われる。くり返し河川の氾濫を受けたのであろう。

1～6層は灰褐色を主とする土で、上部は攪乱を受けている所もある。これらは平安時代以降の水田跡である。

第9地点における22の層序は海岸の時期から沖積化による沼沢化、更には水田化への変遷を呈示しているものといえる。

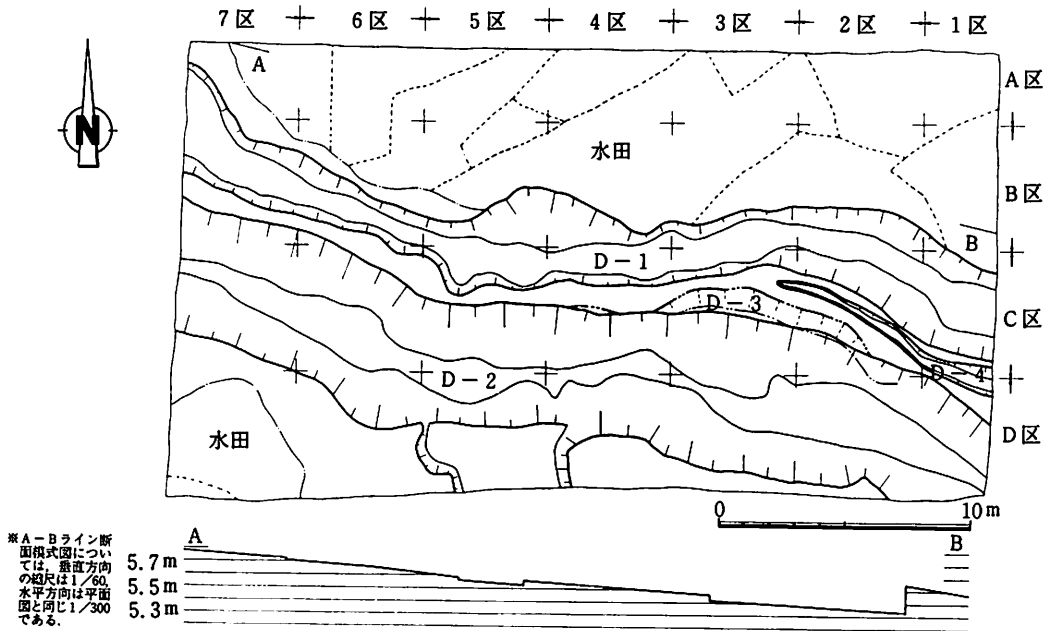
## 3. 遺構(第45図)

東西方向に流れる溝が4本と、これと直交して南北方向に流れる溝が1本、さらにその両側に水田面が発見された。

(1) 溝状遺構

①溝状遺構 1





第45図 検出遺構 (1/300)

1 C区から7 A・B区に向かって蛇行しながら流れる幅1.5~3.5m、深さ0.4~0.5mのU字状を呈する溝である。埋土は最下層に砂が、その上に灰色粘質土があり、さらにその上には灰褐色土が堆積している。堆積状況からして、溝状遺構2と相前後した時期のものである。

底近くから古墳時代の土師器(第46図1)が出ている。細片のため器形がはっきりしないが、沈線に挟まれた左下がりのヘラ押圧文が見られる。内面はヘラナデで仕上げている。外面は茶褐色、内面は灰黒褐色を呈し、焼成度は良い。

## ②溝状遺構2

1 D区から7 B・C区へ向かって、溝状遺構1とほぼ平行して流れる幅4.5~6m、深さ1~1.2mの大規模なV字状に近い溝である。埋土は最下層に砂が、その上に木片・木の葉・昆虫の羽などの多く含まれた粘土層がある。

溝の中からは土器も出ているが、その数は多くない。第46図2は底面近くから出てきた黒色土器壺の高台部分である。内外ともヘラで丁寧に研磨されて光沢を呈している。外へ広がった低い貼付高台が付されており、底部は時計と反対回りに回転させ、ヘラでナデたあと、一部磨いている。淡い黒色を呈し、焼成は良好である。第46図3・4は埋土中にあった土師器坏の破片で、共に磨滅している。口縁部は外へ開きながらまっすぐ伸びて、端部は丸くおさめられている。底部は外へ広がってのび、底部の切り離しはヘラ切りである。共に調整は内外ともヘラによる横ナデで、外面はくぼみが見られる。第46図5は埋土中にあった口縁直径15.5cm、高台直径7cm、高さ6cmのやや磨滅した完形の土師器壺である。丸みをもった体部から口縁部近くでゆるやかなくの字状に外反し、端

部は丸くおさめている。底には外へ広がった低い貼付高台が付されている。指押さえの後ナデで、さらにていねいな横あるいは斜め方向の研磨を施している。外面は磨滅しており部分的にしか残っていないが、スス状の黒色を呈したものが付着している。内面は黒色がかっているが、外面は灰白色を呈している。良質の胎土を用い、焼成は良好である。これらは平安時代中ごろの土器である。

### ③溝状遺構 3

溝状遺構 2 によってほとんど削平されているため、全容は不明であるが、2 C 区から 4 C 区にかけて北側の肩部分が一部残っている。灰色を主とした砂質の土が入っており、深さが 0.7m ある。溝状遺構 2 より古い。

### ④溝状遺構 4

1 C 区・1 D 区から 3 C 区へ続いているが、3 C 区では浅くなっており、この区以西では残存していない。幅 0.7m、深さ 0.6m あり、埋土は灰白色の粘質土である。途中に白灰色粘質土がレンズ状にはいつており、層位的に見ても古墳時代中ごろのものと思われる。

### ⑤溝状遺構 5

4 D 区・5 D 区で検出された幅 1～1.2m、深さ 0.4～0.6m の断面が矩形を呈する浅い溝である。溝状遺構 2 と直交しているが、これと同時期のものか、それより古いものかははっきりしなかった。

### ⑥水田遺構

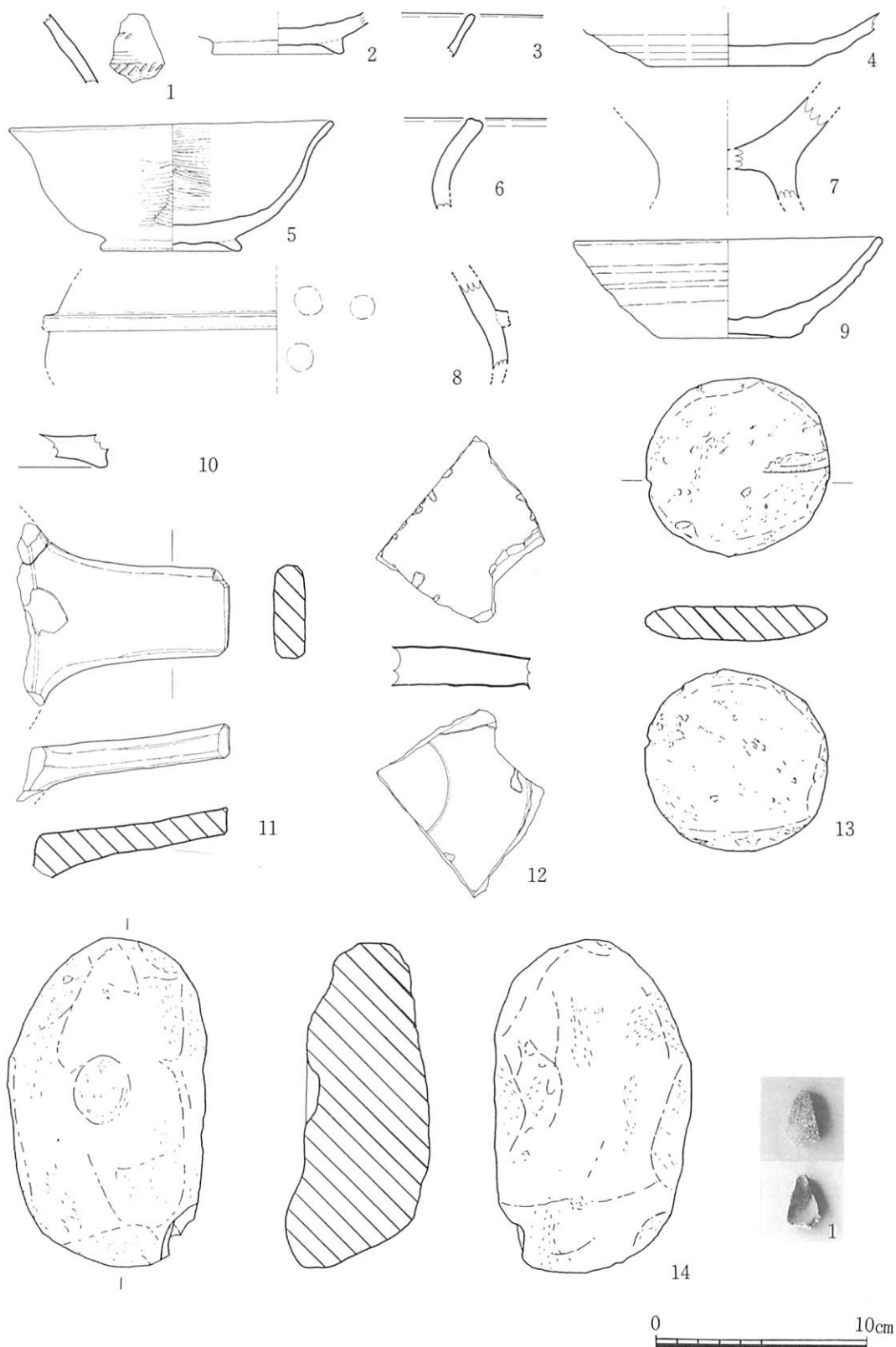
プラント・オパール定量分析によると、12層から上は一部を除きイネが検出されており、この付近は長期にわたって水田耕作の営まれたことが予想できた。しかし、その水田跡をつかむことは溝や高いアゼがない限り不可能に近い。本調査でも各層にわたって水田面をつかむ努力をしたが、そのほとんどは不可能だった。ただ、11層にシラスの 2 次堆積が見られたため、その下層の面を検出できた。

その面は溝状遺構 1・2 などによって切られているために、調査区の中央部が広い範囲にわたって削られている。シラスは数 cm の厚さに堆積しており、これを取り除くことによって当時の水田面を検出することができた。それによると、中央部を削られているため正確な面積を割り出すことができなかったが、狭いところで約 5 m<sup>2</sup>、広いところで 15m 以上×6 m 以上の囲みが検出できる。しかし、これらの囲みはいずれも整然とした区画をしておらず、これがはたして当時の区画を示しているのかどうかははっきりしない。水田面は北西部がもっとも高く、南東部に向かって緩やかに下降している。その差は約 1 m であった。

この水田面の時期は溝 4 を被っており、溝 2 に切られていることから 6～10 世紀ころのものであることが予想できる。

## 4. 遺物

遺構内だけでなく、包含層からも土師器・磁器・軽石製品などが発見されているが、その数は多くない。



第46図 出土遺物 (1/3)

## (1) 土師器

古墳時代の物と、平安時代の物とがある。

古墳時代の土師器には甕形土器（第46図6・7）と、壺形土器（第46図8）がある。6は端部が内側へやや広がっているくの字状に外反する口縁部である。淡茶褐色を呈し、ハケで横方向にナデている。7は脚台部分である。淡褐色あるいは白っぽい乳白色を呈し、脚台は浅い上げ底ぎみである。指で押さえたあと内外ともへらでいねいにナデて仕上げている。8は壺形土器の肩部で、ここに断面が矩形の貼付突帯が付されている。内面には指押さえ痕も残っているが、そのあとをへらでナデており、外面はていねいな横方向のナデ仕上げである。石英・角閃石・黒色粒・赤色粒などの細石粒を多く含む胎土を用いている。

第46図9～11は平安時代の物である。9は口縁部の直径14.5cm、高さ4.7cmの土師器坏である。やや丸みを帯びているが、まっすぐ口縁端へ広がりながら伸びており、底部切り離しはへら切りである。内面には指押さえ痕が明瞭に残り、外面はへらでナデているが、調整は概して粗い。底には繊維状の圧痕も残っている。淡黄白色を呈しているが、部分的には茶がかったり、黒みがかったりしている。10は磨滅の激しい土師器塚の高台部分である。11は5層から6層にかけて出てきたなべの把手と思われる破片で、把手の角度からして浅いものと思われる。ミガキに近いていねいなナデ仕上げで、端部もていねいに切っている。細かい土を用いており、焼成は良好である。

## (2) 磁器

第46図12は龍泉窯系青磁盤の底部である。黒色のごく細かい砂粒の入った土を用い、底部の中央付近は露胎である。深緑色の釉が厚くかかり、内外とも貫入が多く見られる。14～15世紀ころのものだろう。

## (3) 軽石製品

第46図13は上下面と周辺をていねいに磨いて9×7.5cmの略円形に作った軽石製品である。厚さは0.6cmで端部がやや薄くなっている。第46図14はくぼみのある軽石製品である。15.5cm×9.5cmのだ円形を呈し、厚さは5～6cmある。ほぼ中央に3cmほどの浅いくぼみがある。これらの時期ははっきりしないが、古墳時代のものではなかろうか。

## 5. まとめにかえて

鹿児島大学郡元団地の本格的調査が開始されてからすでに15年以上がたつ。当初、鹿児島県教育委員会に委託して行われていた調査も昭和58年の後半からは鹿児島大学法文学部考古学研究室によって、さらに昭和60年からは鹿児島大学埋蔵文化財調査室によって実施されており、その成果についてもしだいに公表されてきている。そのことによって、郡元団地内における遺跡の様相もだんだんと判明してきた。

それらは現在のところ大きく3種の性格に分けられそうである。一つは海浜部や沼沢地など、人の手がかけられていない自然の場所である。構内の東部分がそうした場所に当たっている。その場所は時期によってしだいに変化しており、縄文時代までは大学構内のほぼ全域が海浜であるが、弥生時代には沖積化がデルタ状に進み、西側から沼沢化してくる。そして、古墳時代には教育学部の一

部のみには海浜部は残り、沼沢地は水田化が進み、古代にはさらに海浜部は退化し水田化が進んでいる。

ふたつめは集落のある場所で、教育学部のグランド付近から教養部へのびる微高地部分がそうした場所に当たる。これらは古墳時代の初めころから造られ始め、非常に密集している。しかし、古墳時代後期に大洪水が起こったため壊滅状況になり、それ以降は散発的に出土する土器からして一部の地域で集落が形成されたことが考えられるが、現在のところその具体的地点の確認はされていない。

3つ目は生産の場所、ここでは水田である。古墳時代から、市街地化が進む近年まで長期にわたって営まれていた。それは、現在のところ農学部を中心とした集落の周辺地域に発見されている。

今回報告した電子計算機室の建築場所は、表面採集の時点では密な遺物分布が見られたため集落であることが想定されていたが、層的にみてこれらは校舎建築の際に他地点から持ち込まれた物である事が分かった。今回の調査ではほとんど遺物が出ず、地層的に古くは人の活動に関係のない場所であり、その後、生産の場所に代わってきた事が想定できたが、これはプラント・オパール分析の結果からも裏付けられた。この水田は乾田で、数回の洪水によって壊滅的破壊もうけている。いつ生産の場所、水田に変わったかは具体的に示す事が出来なかったが、他の地点の地層からして遅くとも古墳時代のうちには水田に変わった事が予想できる。

ところで、今回発見された水田跡の年代については、昭和62年にこの調査区の東隣が調査され、その時に検出された3b号溝より新しく、3a号溝より古い事が分かった。<sup>(1)</sup>この両溝は共に平安時代のものであったことから、水田もまた平安時代のものである事が判明した。

水田跡は近年、全国各地で発見されており、その形態・規模から分類もされているが、<sup>(2)</sup>当遺跡の場合、発掘面積が狭く、詳細は不明である。しかし、その大きさはまちまちであり、自然地形をうまく利用した灌漑水利であったといえよう。鹿児島大学構内郡元団地ではプラントオパール分析などによって各地で水田が想定されているが、はっきり水田の跡が検出されたのは当地域と、平成1年に調査された大学院連合農学研究科校舎建設予定地(F-3・4区)である。<sup>(3)</sup>しかし、F-3・4区で発見されたのは畦畔及び畝を伴う水田であるが、江戸時代から明治時代のものであり、参考にはならない。今後、調査が進むにつれてその様相もはっきりしてこよう。

県内における古代の土師器編年は、良好な一括資料がないこともあってほとんど出来ていない。したがって、検出された溝の年代を決定する事は困難であるが、溝2で出土した外反する埴はその年代を決める糸口を与えてくれる。北九州での研究成果を援用する事は地域的にみて躊躇せざるを得ないが、器形が似ているので参考のために利用してみたい。それは次のような理由にもよる。南九州の古代土師器埴・坏は外へ開きながらまっすぐ伸びるものが大部分で、外反するものはほとんどない。また、整形技法もこの土器のように磨いた物はほとんどない。そうした点で、これは外部からの強い影響で作られた物、あるいは移入品という事が出来る。谷口俊治氏は豊前国企救郡で使用されていた平安時代の土師器埴・坏を4型式に分けているが、このように口縁直径が大きく、ゆるやかに外反するのはⅢ型式とされ、氏は11世紀に相当すると考えている。<sup>(4)</sup>とすれば、溝2も

この時期とあまり離れない時期といえよう。

溝1は昭和62年の調査によって発見された2b号溝に該当するものだろうと言われているが、ここからは内面に蓮華文を片彫りした龍泉窯系青磁碗1-2類が出ている。横田賢次郎・森田勉氏によれば、これは12世紀中葉から13世紀初頭をピークとする物とされているので、<sup>(5)</sup>溝1の年代もこのころのものと考えて良かろう。これは溝2との前後関係とも矛盾しない。その方向からして、古代の水田は洪水にあっても繰り返し同じような場所につくられたことが予想できる。

#### 註

- (1) 松永幸男「鹿児島大学郡元団地G・H-9・10（電子計算機室増築地）における発掘調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』Ⅲ 1988 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- (2) 高谷好一ほか編『水田遺構集成』 1988 農耕文化研究振興会
- (3) 松永幸男・砂田光紀「鹿児島大学郡元団地F-3・4区（大学院連合農学研究科校舎建設予定地）における発掘調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』Ⅴ 1990 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- (4) 谷口俊治「北部九州における平安時代の土器について」『中近世土器の基礎研究』 1985 日本中世土器研究会
- (5) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について-型式分類と編年を中心にして」『研究論集』4 1978 九州歴史資料館

なお、最後に記しておかねばならないのは、調査時に書いた図面が現在行方不明になっており、溝の断面等がここに載せられなかった事である。深くおわびしたい。

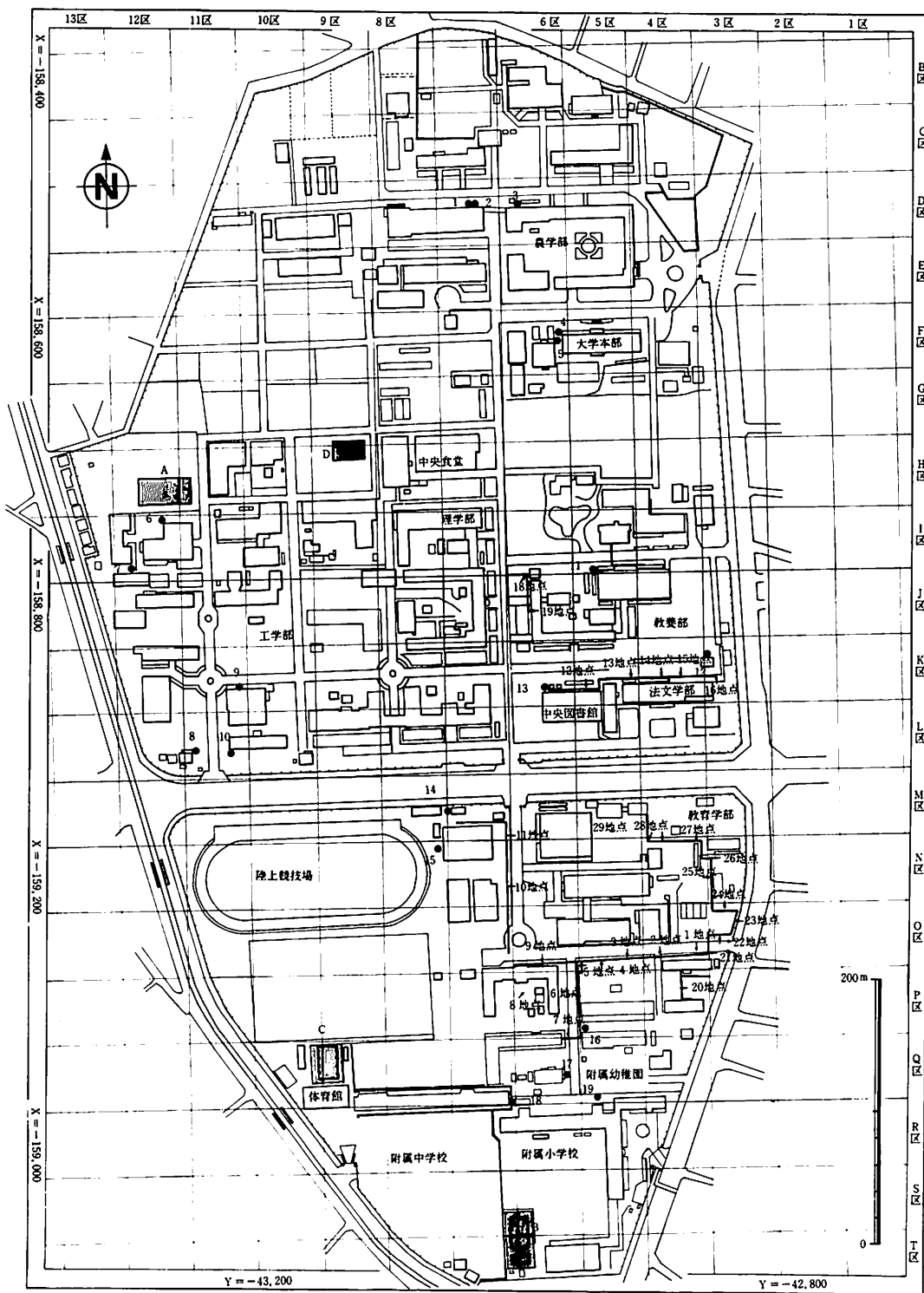
表11 土器観察表

図番号	器種	出土トレンチ	出土層	色調	胎土	調整	備考
46-1	埴?	溝1	底	外面：茶褐色、内面：灰黒褐色。	粗砂粒・砂粒を含む、白色粒、赤色粒、角閃石を含む。	外面上部：(摩滅のため)不明、外面下部；ハケ、内面；ヘラナデ。	
46-2	壺	溝2	底	淡黒色。	精選。	ヘラナデ後ミガキ、高台見込部；ろくろによる左回転ナデ。	堅緻、全体にミガキがかかっている。
46-3	坏	溝2	埋土	乳白色。	黒色粒、赤色粒を少量含む。	ヘラによるヨコナデ、底面；ヘラ切り。	法量、傾きともに不明。
46-4	坏	溝2	埋土	外面；黒みがかった黄白色、内面；白っぽい橙白色。	細砂粒を含む。	ヘラによるヨコナデ、底面；ヘラ切り。	底径：8 cm.
46-5	壺	溝2	埋土	外面；淡灰白色、内面；暗褐色～淡灰白色。	微細。	外面；ユビオサエ後ナデ後ケンマ、内面；ユビオサエ後ナデ、下から上へのケンマ。	見込み部を中心に体部下半まで炭素が吸着、外面は摩耗している。貼付高台。
46-6	甕	不明		淡茶褐色。	雲母、角閃石、石英、黒色粒、白色粒、赤色粒を含む。	ハケによるヨコナデ。	法量は不明。
46-7	甕	不明	表土	外面；淡褐色、内面；淡黄褐色。	ガラス質鉱物小片を多数含む。	ユビオサエ後ヘラによるナデ。	ユビオサエはほぼ消えている。
46-8	壺	不明	表土	やや淡い褐色。	黒色粒、赤色粒、角閃石、石英を含む。	外面突帯部；ヘラナデのちヨコナデ、内面；ユビオサエ後ナデ。	堅緻。
46-9	坏	不明	不明	淡黄白色。	微細。	外面；ヘラナデ、底面；ヘラ切り後ナデ、内面；ユビオサエ後ナデ。	底面中央のくぼみを反映してかドーナツ状の黒斑が見られる。
46-10	壺	不明	不明	白色の強い橙白色。	角閃石、石英、黒色粒、白色粒、赤色粒を含む。	不明。	摩滅が激しいため調整は不明、法量も不明。
46-11	鍋	D-2区	5-6層	淡白褐色。	微細粒を含む。	面取り整形、ユビオサエ後丁寧なナデ。	堅緻。
46-12	盤	不明	表採	深緑色釉、磁胎は淡灰白色。	黒色の極微細粒を含む。		堅緻。

圖 版

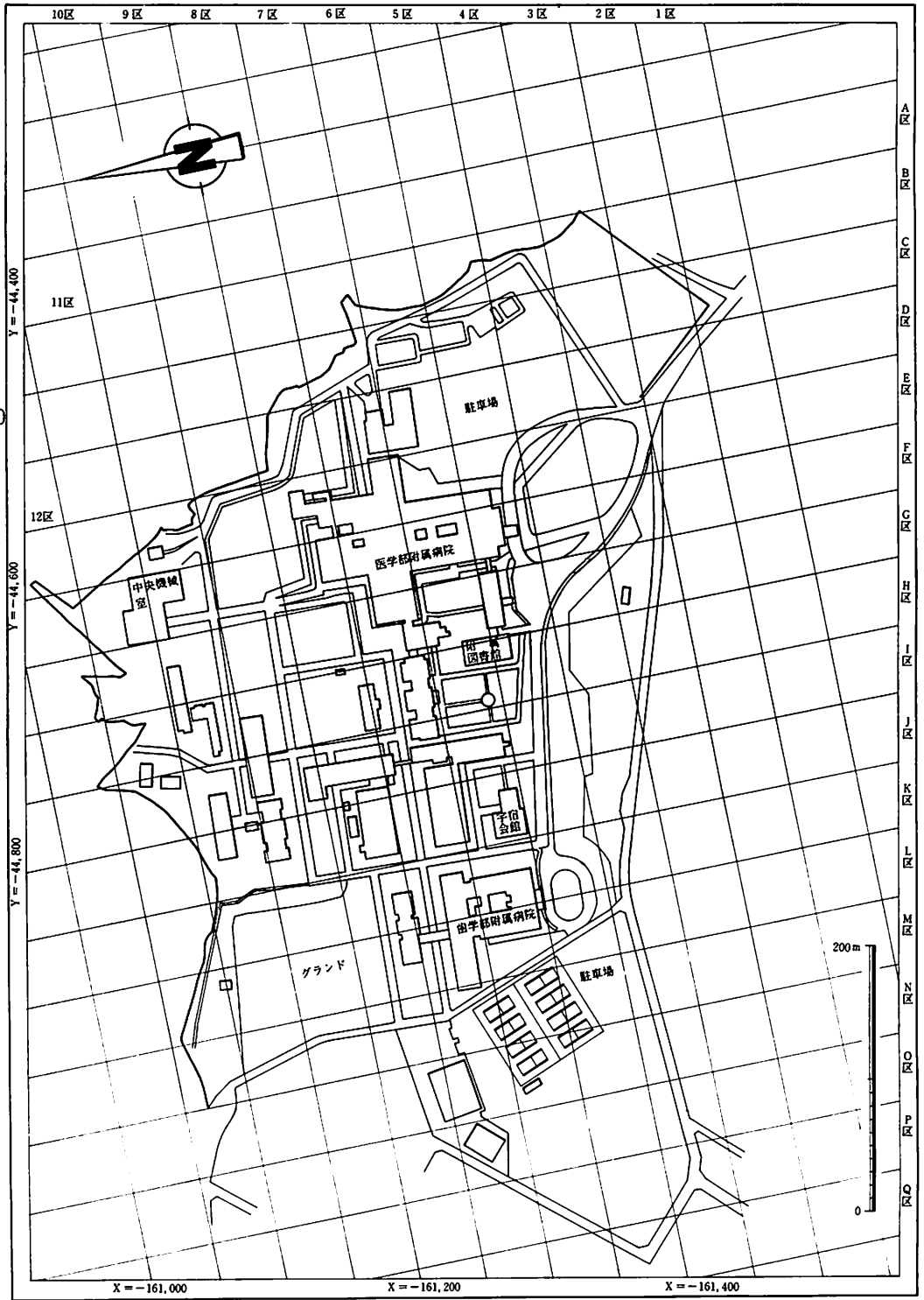


図版1 鹿児島大学郡元団地構内図 (1/5000)

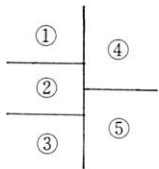
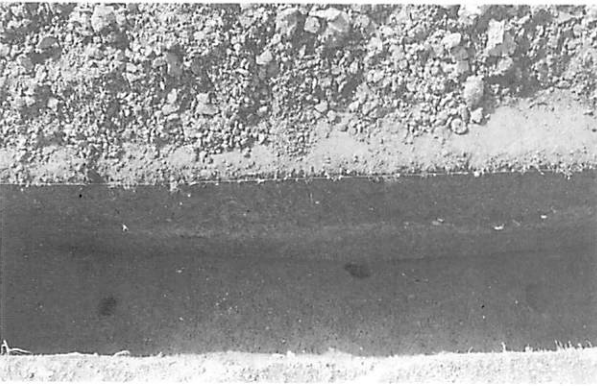


- A 工学部情報工学科校舎建設予定地
  - B 教育学部附属小学校プール上屋取設予定地
  - C 教育学部附属中学校プール上屋取設地
  - D 電子計算機室建設地
- 1-19は 量水器改修工事に伴う立合い調査地点  
 1地点-29地点は 市水引き込み工事に伴う立合い調査地点

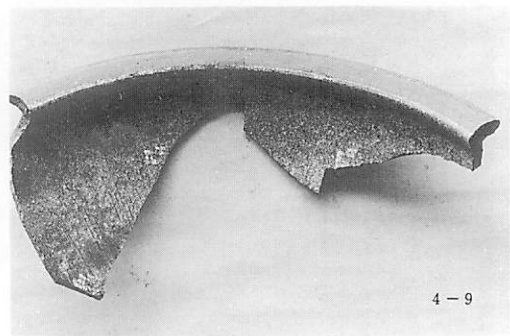
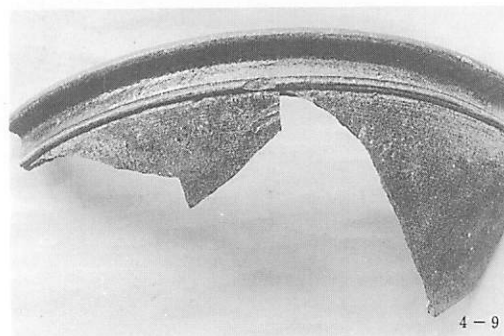
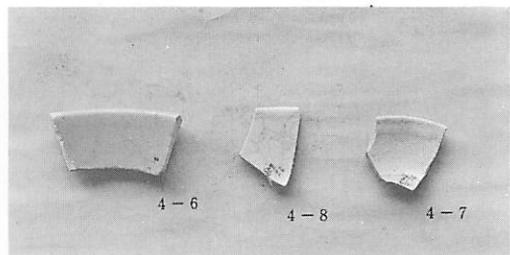
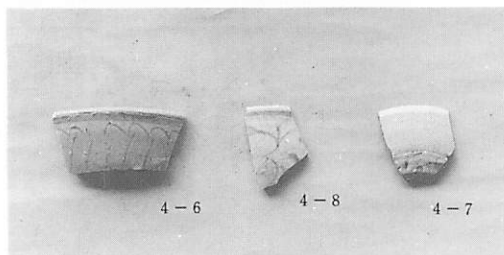
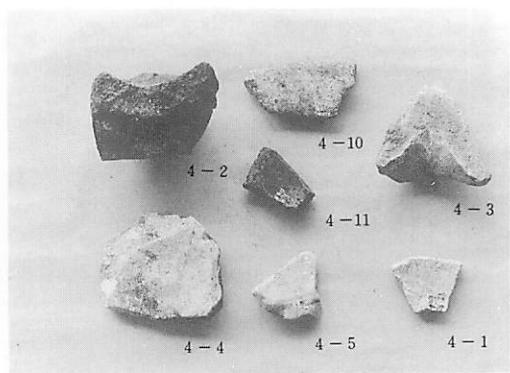
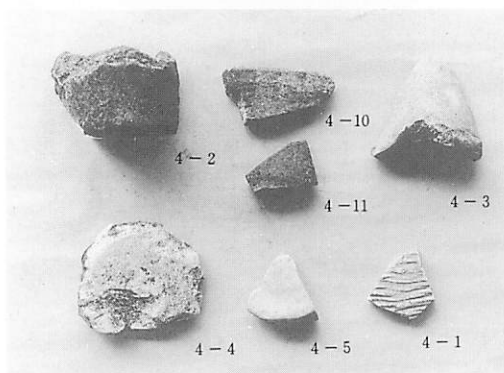
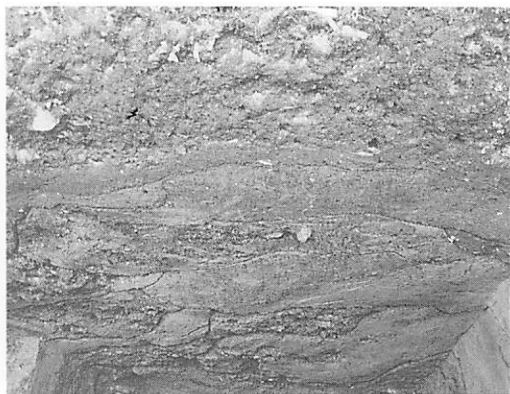
図版2 鹿児島大学宇宿団地構内図 (1/5000)



図版3 郡元団地H-11・12区における試掘調査(1)



- ① 調査地点全景(東から)
- ② No.2トレンチ4層上面検出ビット(北から)
- ③ No.1トレンチ南壁東半部
- ④ No.1トレンチ調査終了時(東から)
- ⑤ No.2トレンチ東壁



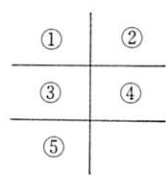
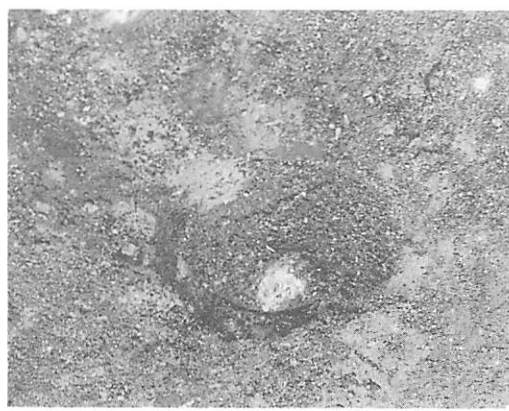
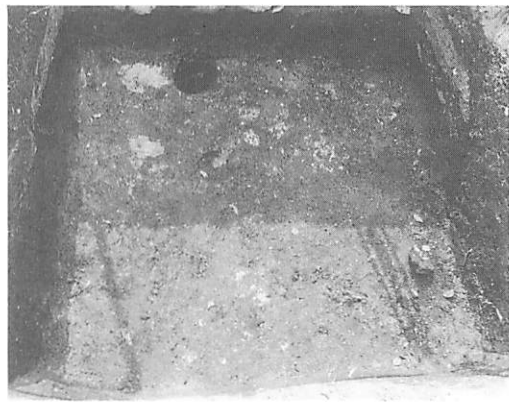
①	②
③	④
⑤	⑥
⑦	⑧

① No.3 トレンチ東壁北半部

② No.3 トレンチ東壁南半部

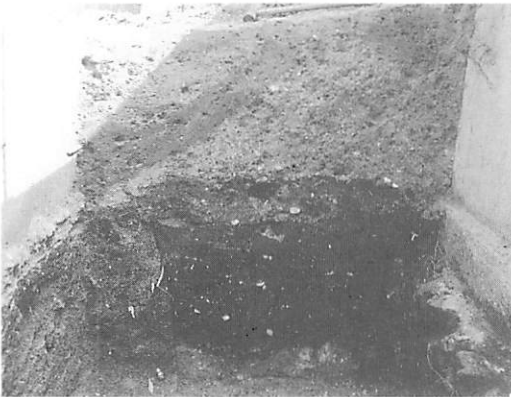
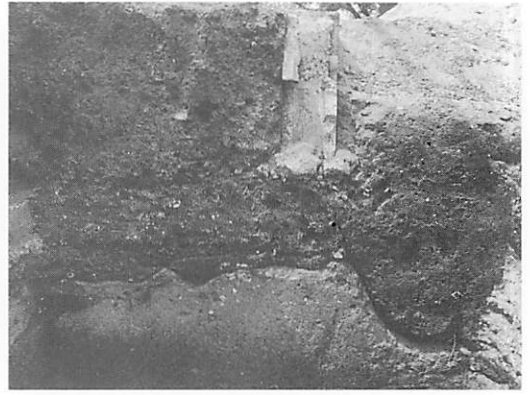
③~⑧ 出土遺物

図版5 郡元団地S・T-6・7区における試掘調査(1)



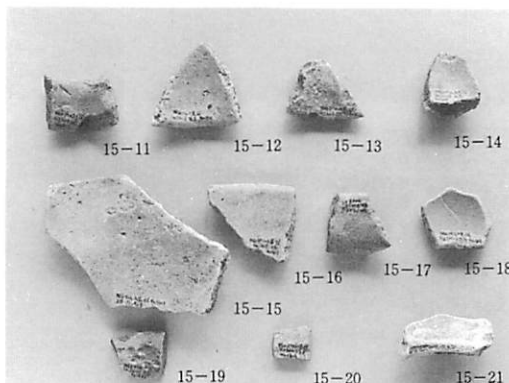
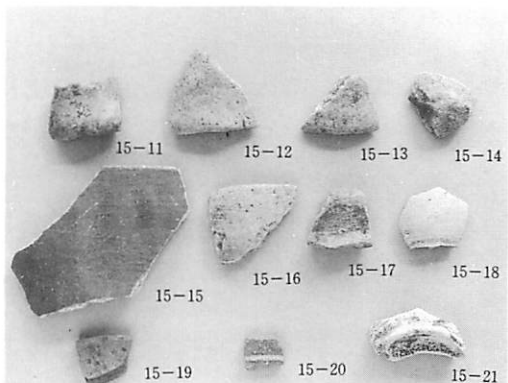
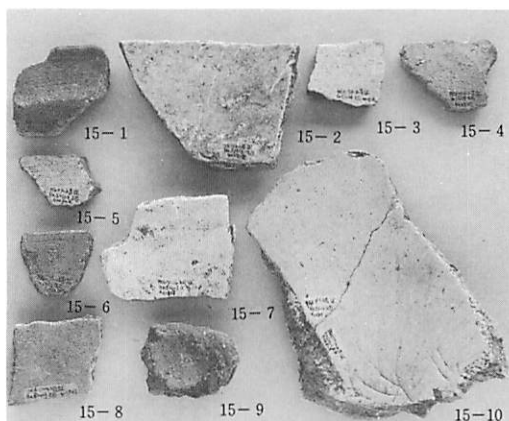
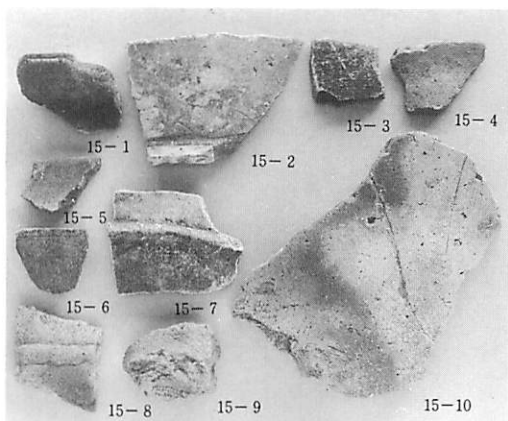
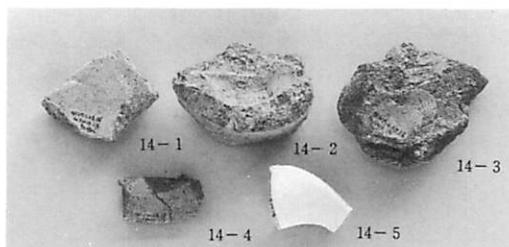
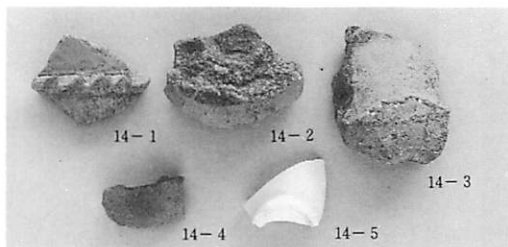
- ① 調査前状況 (北から)
- ② 調査前状況 (南東から)
- ③ No.1トレンチ4層上面ビット検出状況 (東から)
- ④ No.1トレンチ4層上面検出ビット
- ⑤ No.1トレンチ4層上面検出ビット

図版6 郡元団地S・T-6・7区における試掘調査(2)



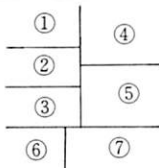
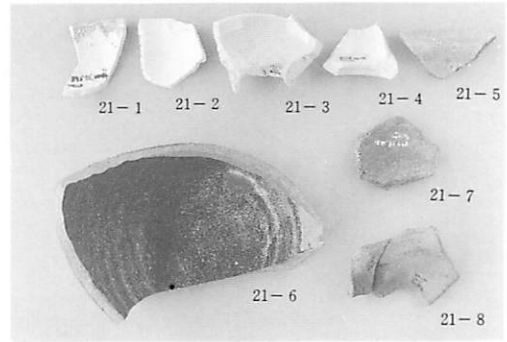
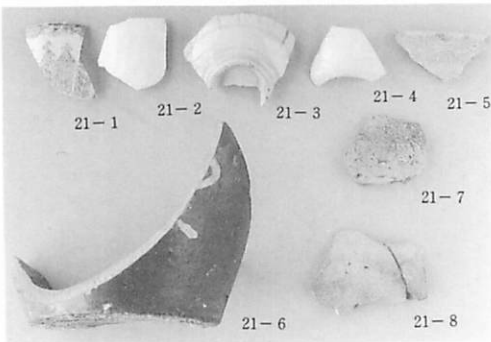
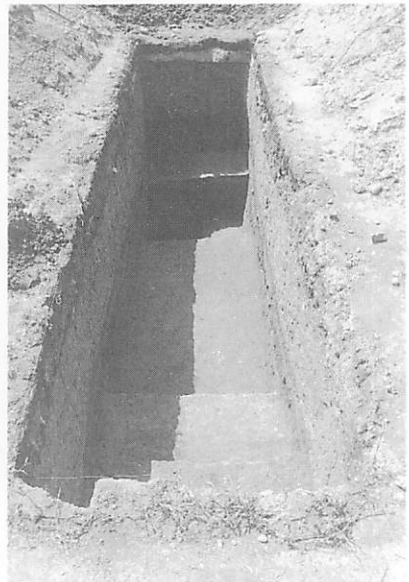
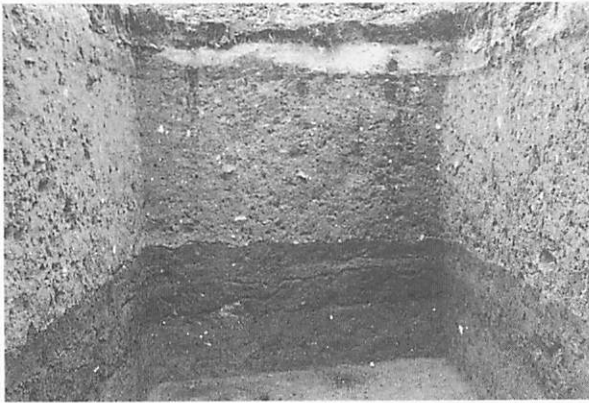
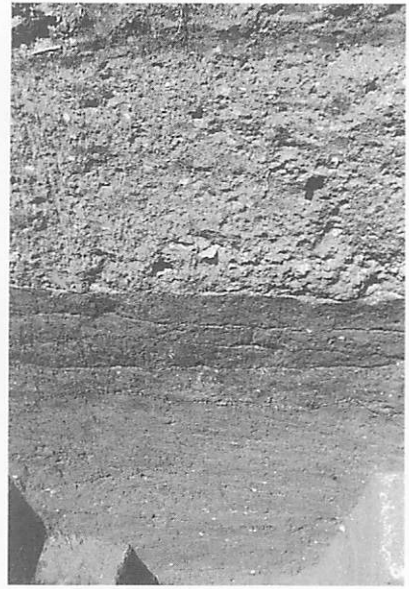
①	②
③	④
⑤	⑥

- ① No.1 トレンチ東壁
- ② No.2 トレンチ北壁
- ③ No.3 トレンチ北壁
- ④ No.4 トレンチ北壁
- ⑤ No.5 トレンチ北壁
- ⑥ No.5 トレンチ東壁



出土遺物

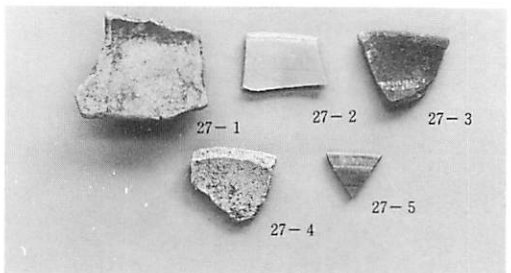
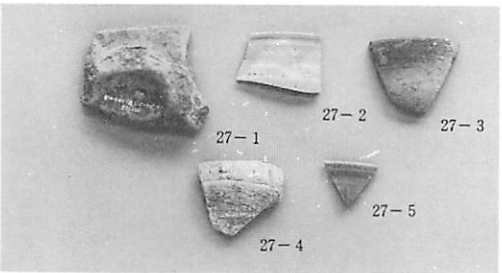
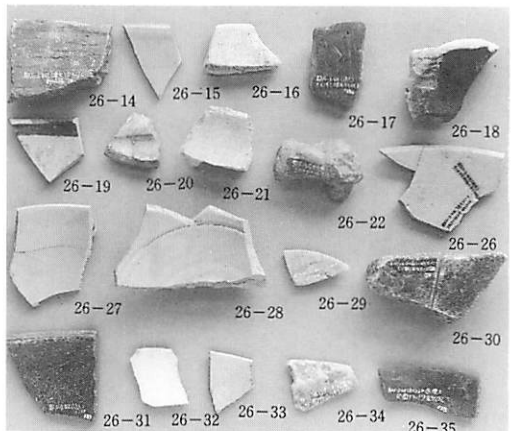
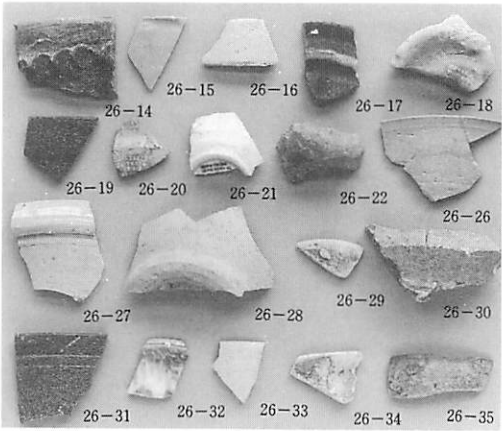
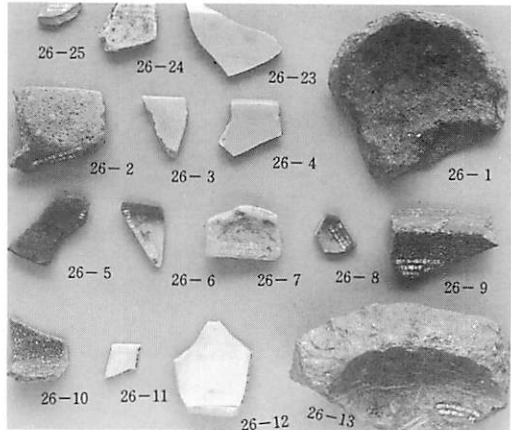
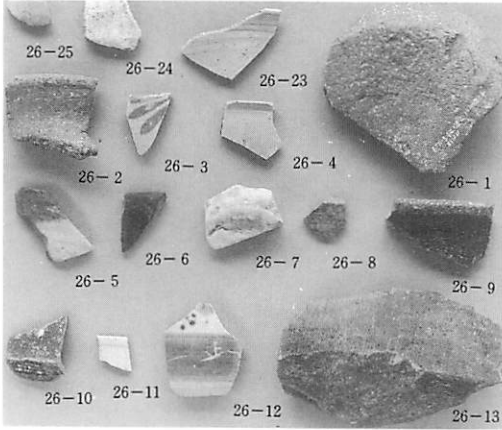
※数字は図番号に一致



- ① 調査前状況（南東から）
- ② No.2 トレンチ西壁上半部
- ③ No.2 トレンチ西壁下半部
- ④ No.1 トレンチ西壁中央部
- ⑤ No.2 トレンチ完掘状況

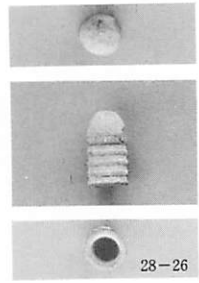
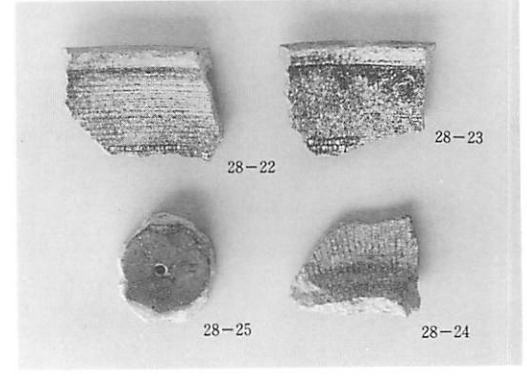
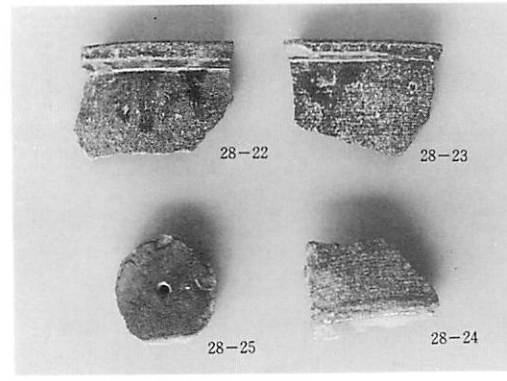
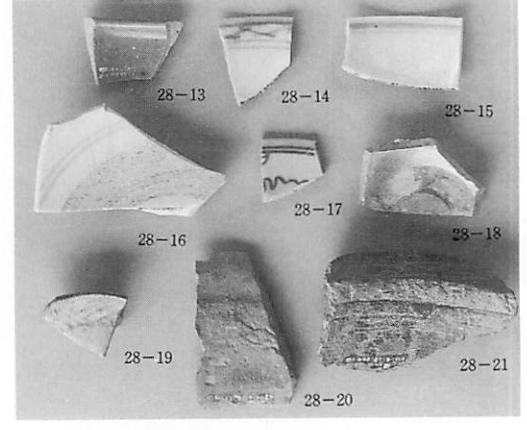
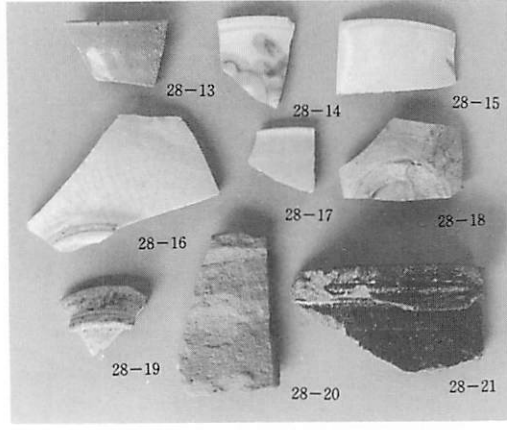
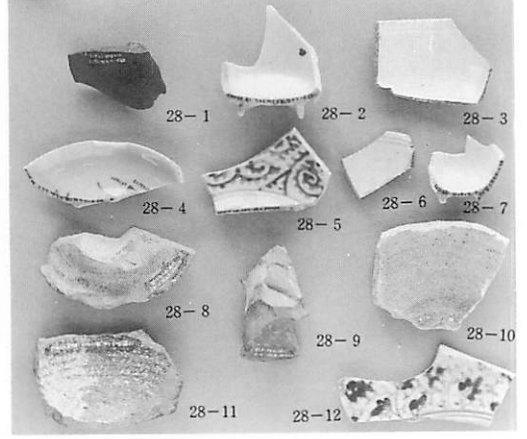
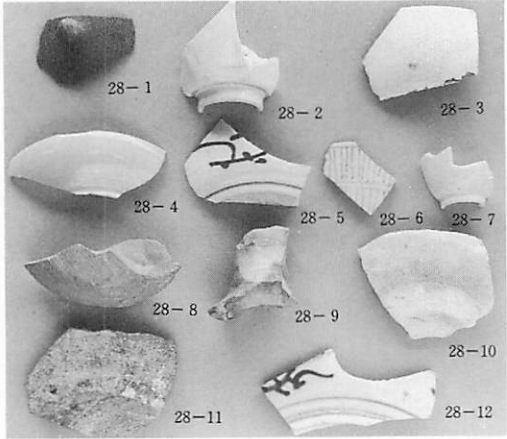
- ⑥・⑦ 出土遺物（数字は図番号に一致）



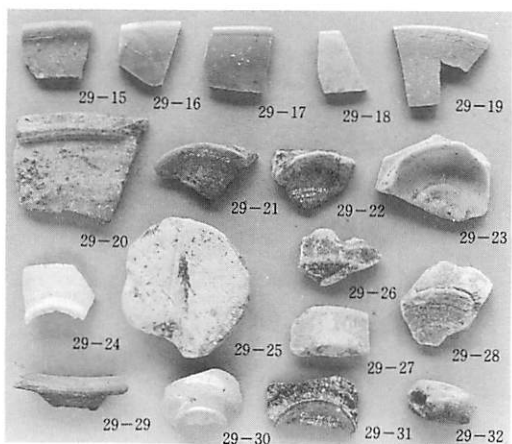
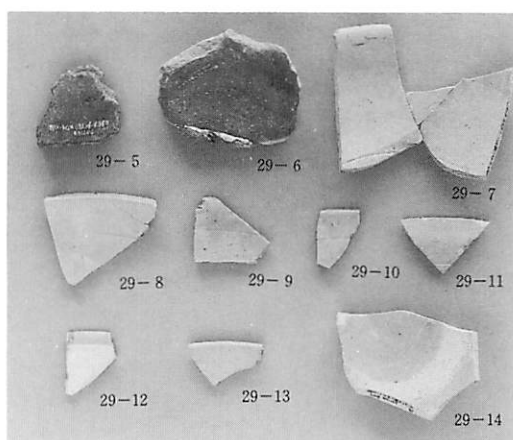
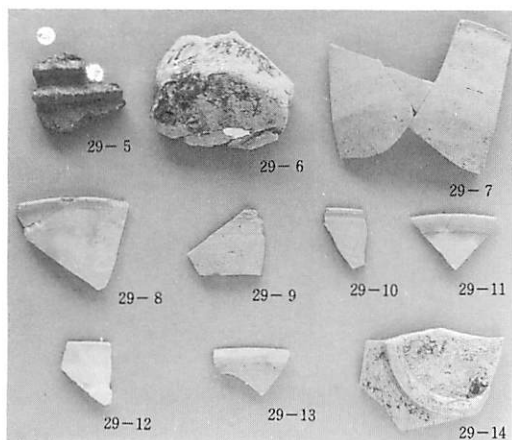
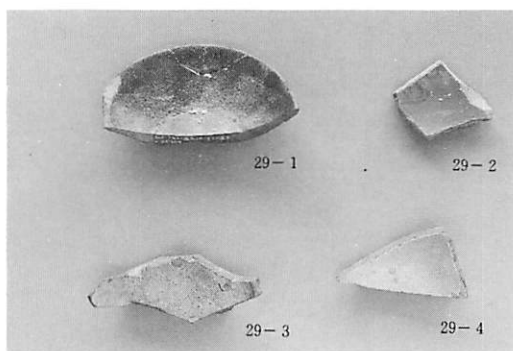
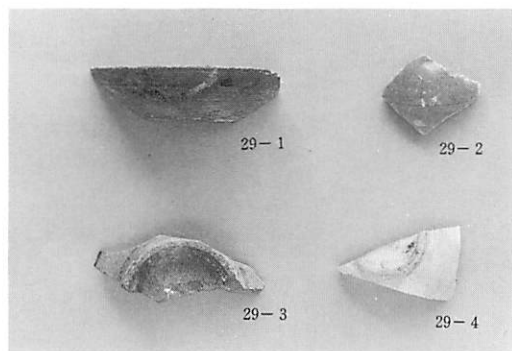


遺構出土遺物(1)

※数字は図番号に一致

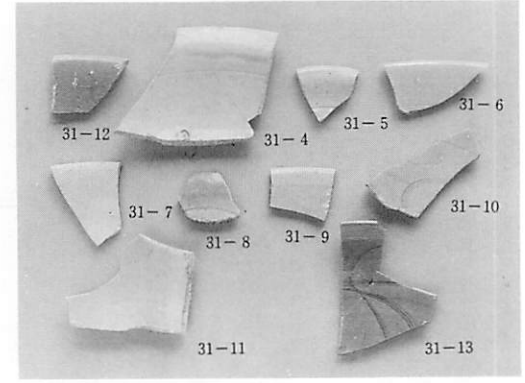
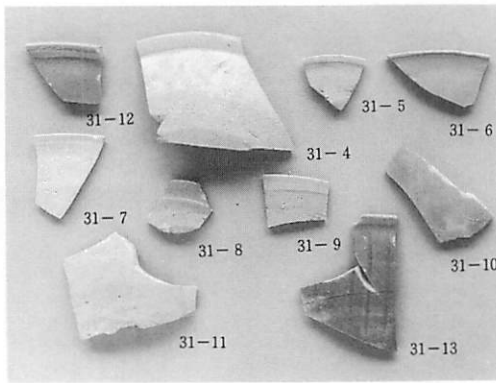
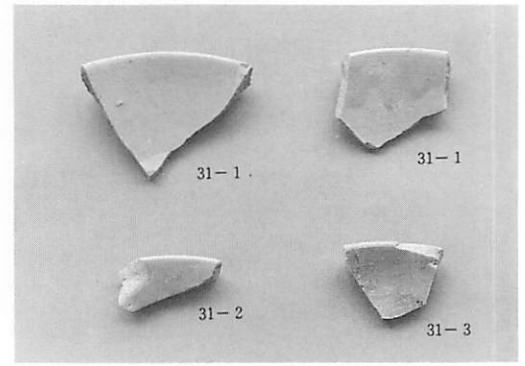
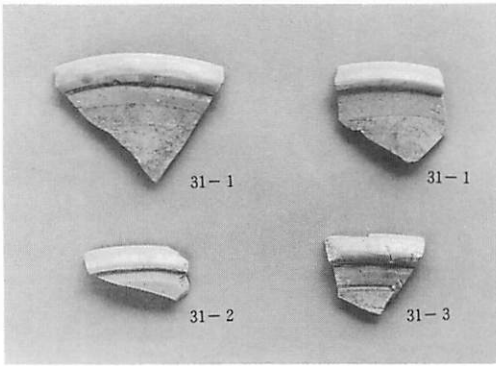
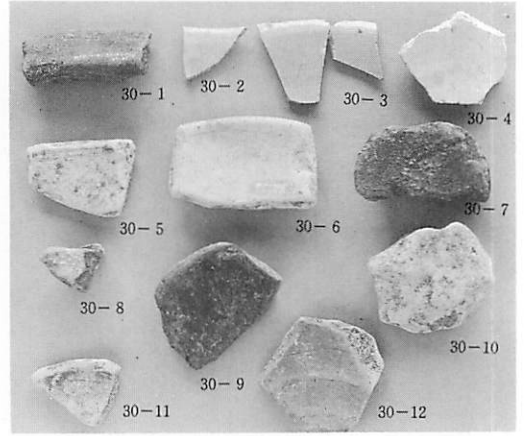
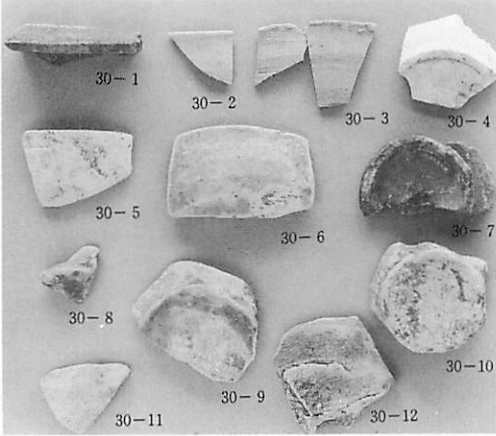


包含層出土遺物(1) ※数字は図番号に一致



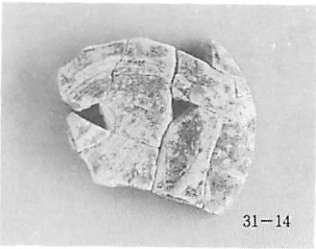
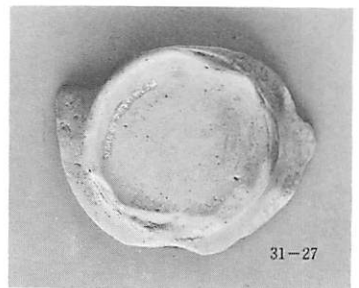
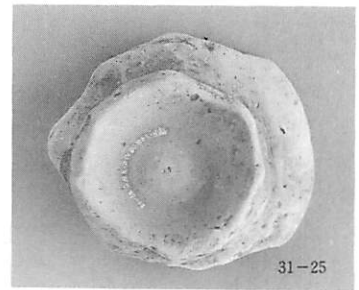
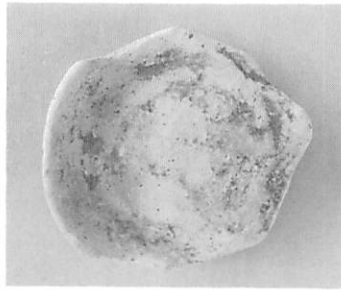
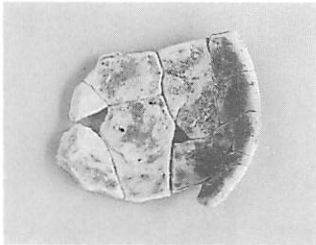
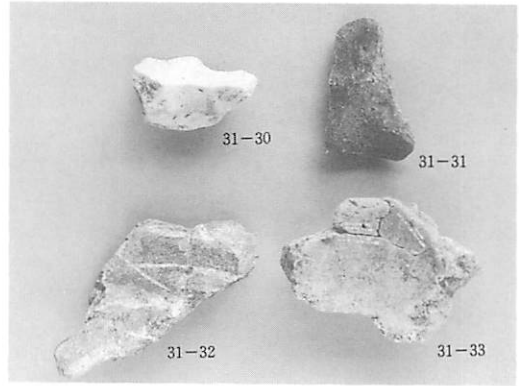
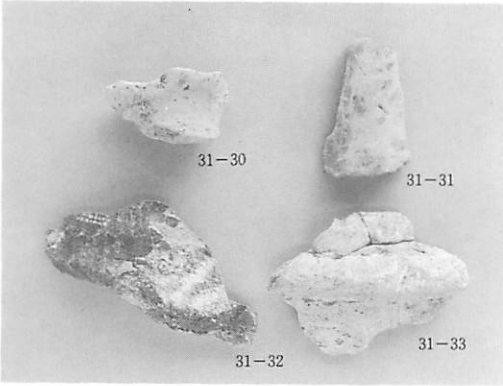
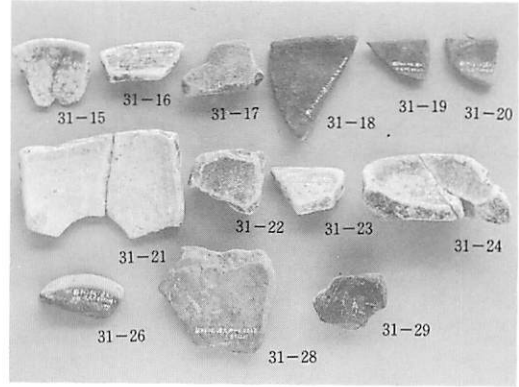
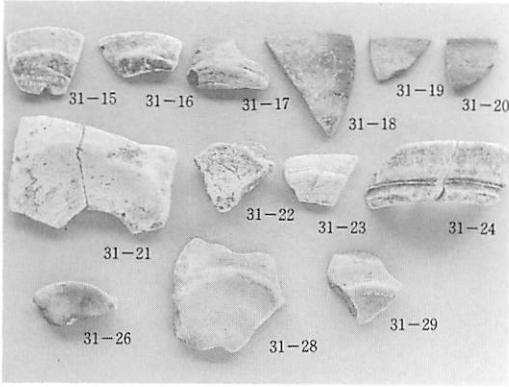
包含層出土遺物(2)

※数字は図番号に一致



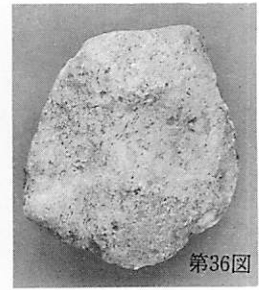
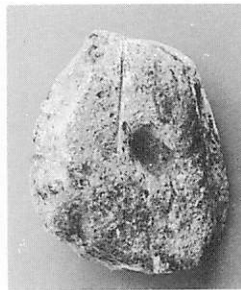
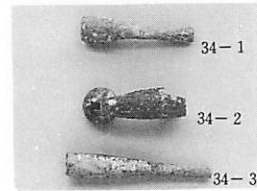
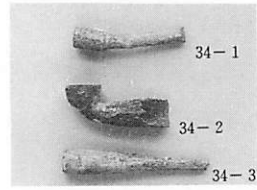
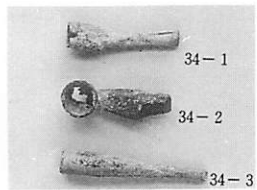
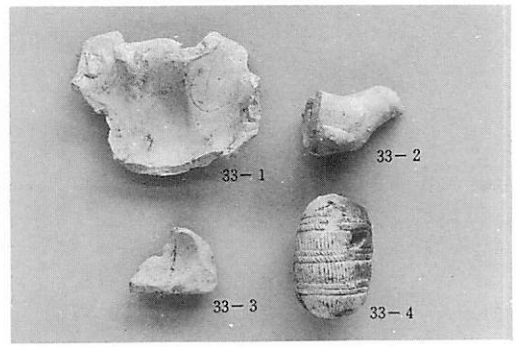
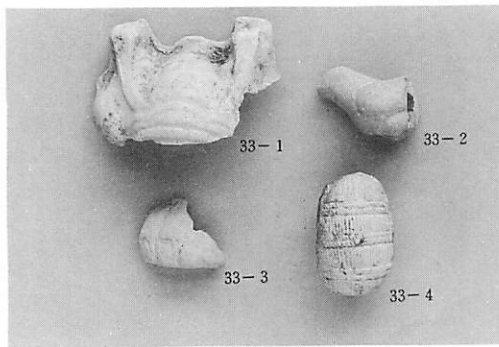
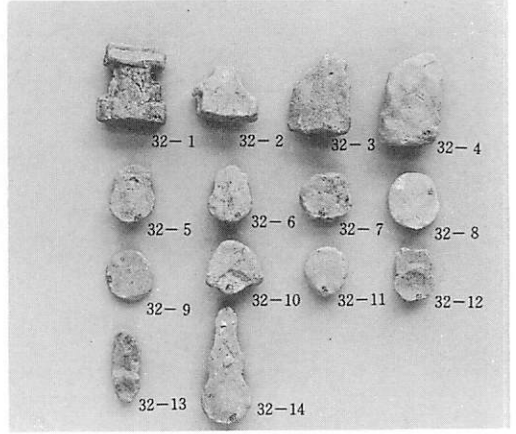
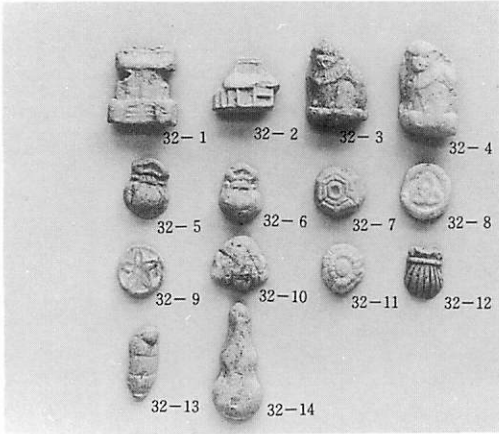
包含層出土遺物(3)

※数字は図番号に一致

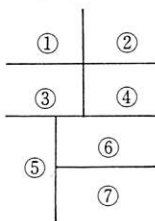
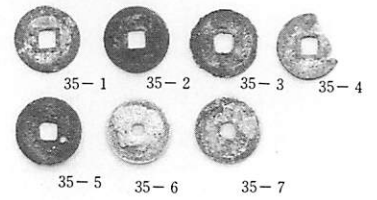
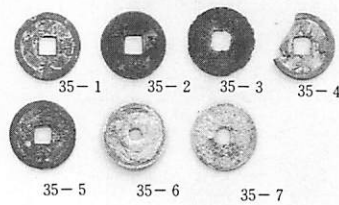


包含層出土遺物(4)

※数字は図番号に一致

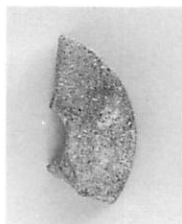
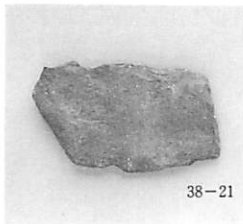
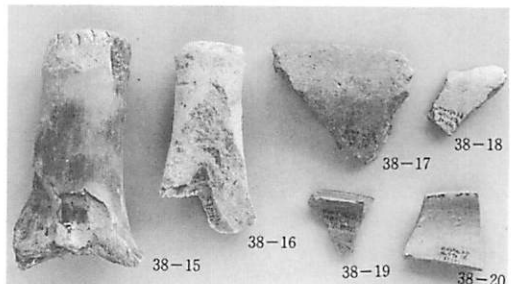
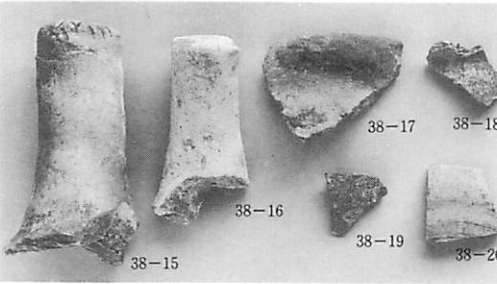
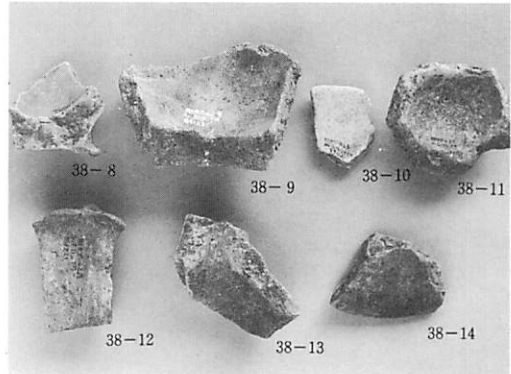
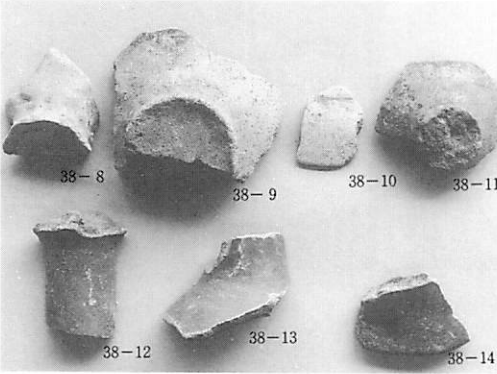
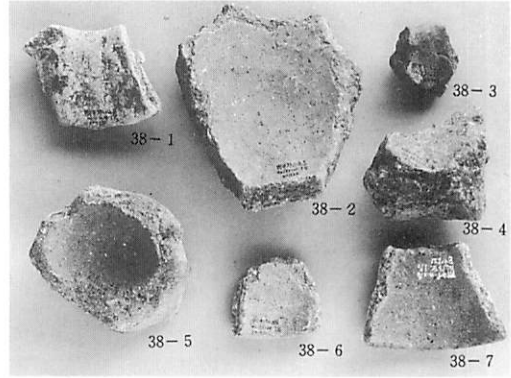
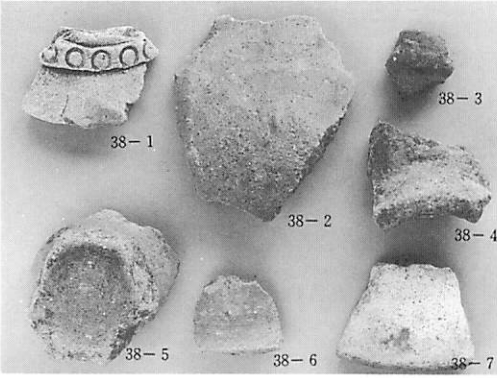


第36図



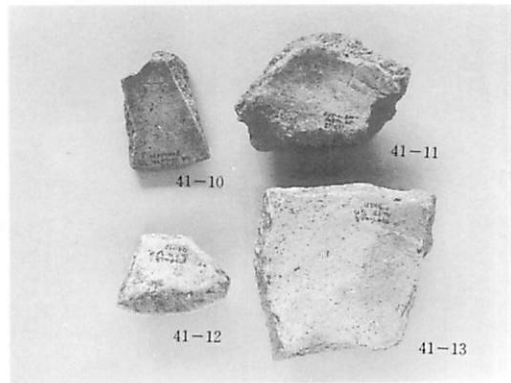
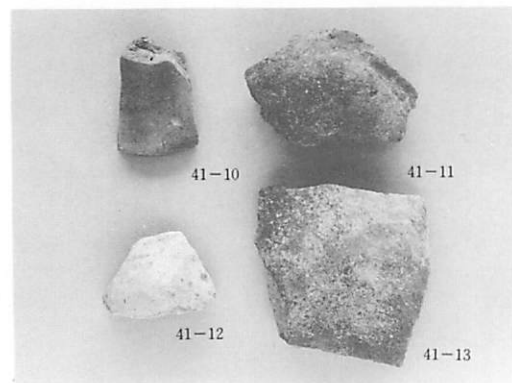
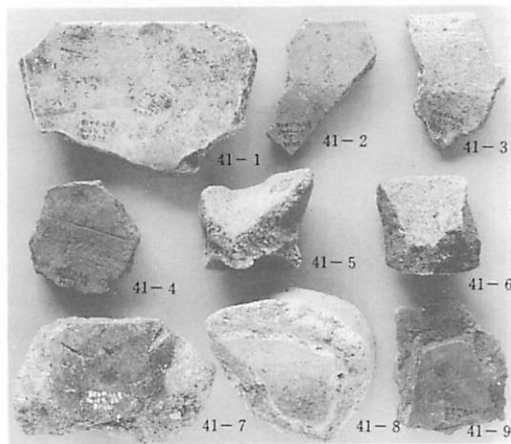
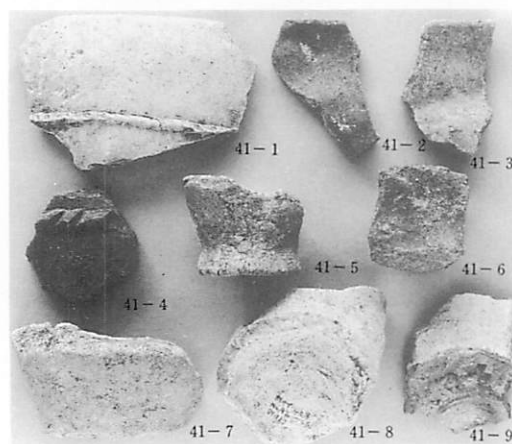
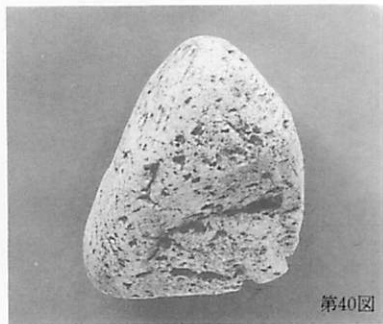
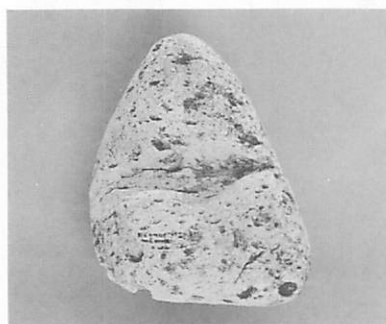
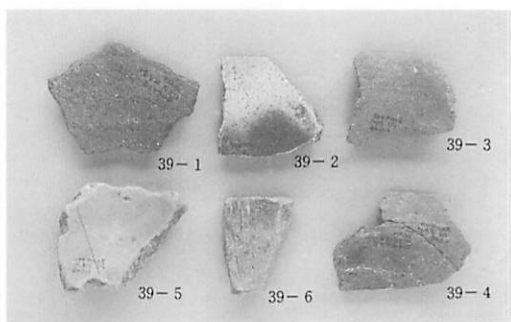
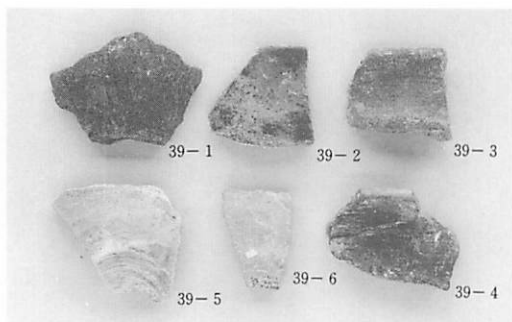
- ①～④ 土製品
- ⑤ 煙管
- ⑥ 軽石製品
- ⑦ 古銭

※数字は図番号に一致



包含層出土遺物(1)

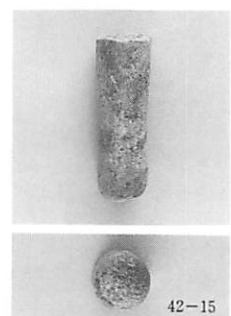
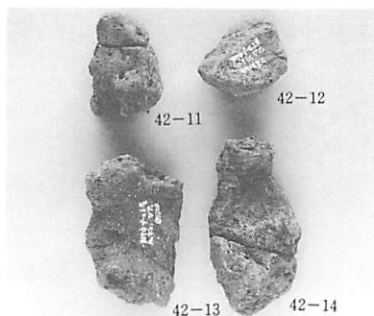
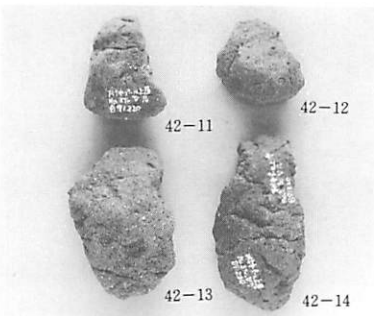
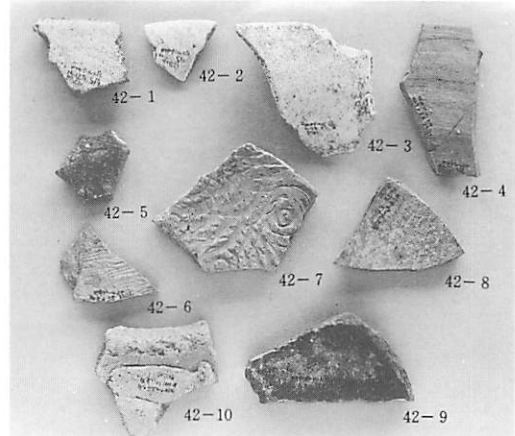
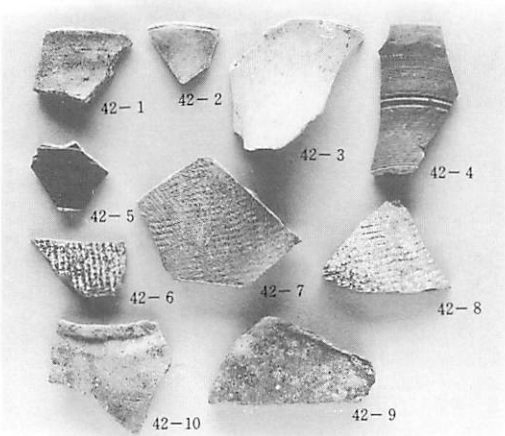
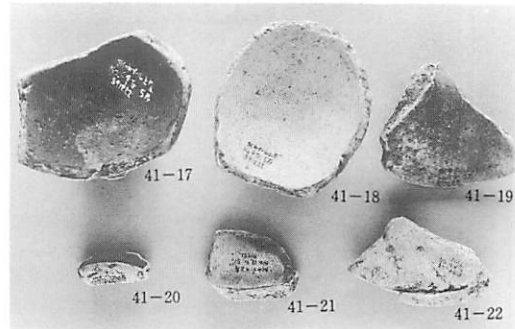
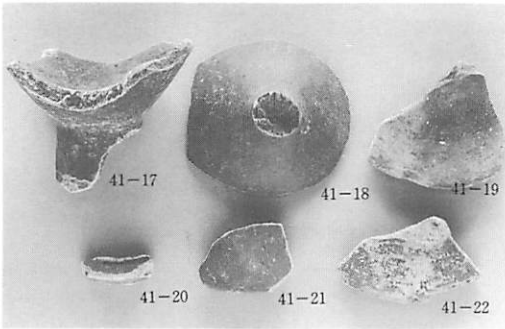
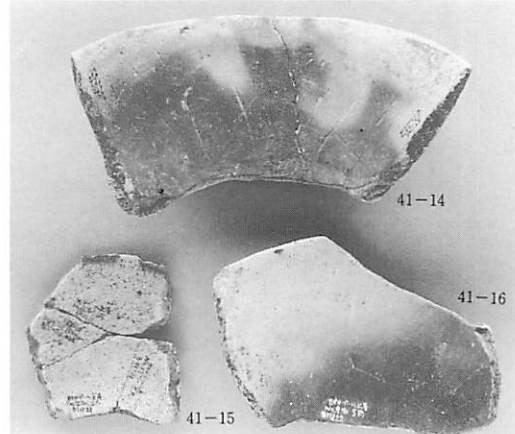
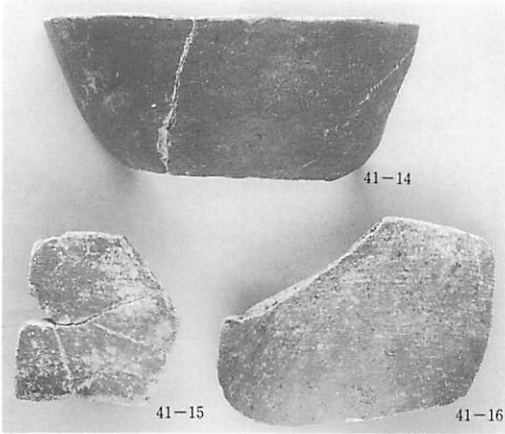
※数字は図番号に一致



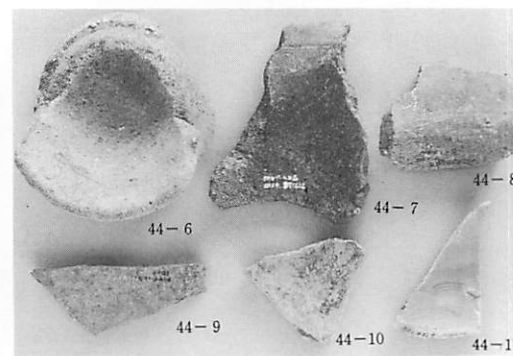
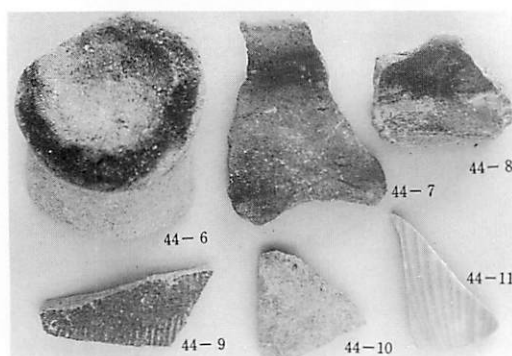
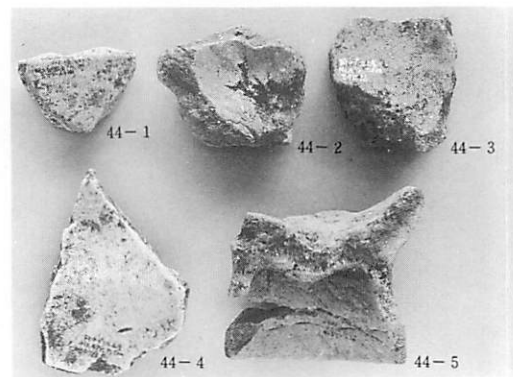
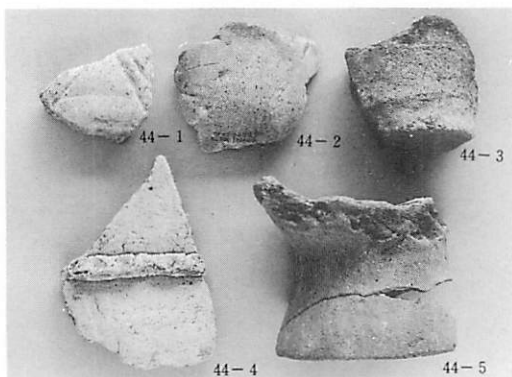
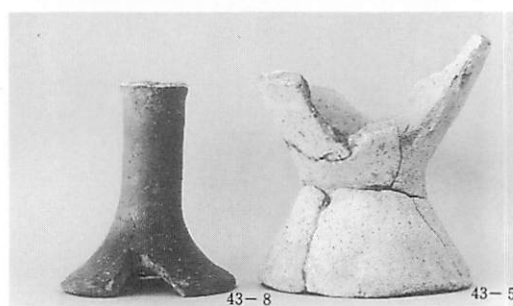
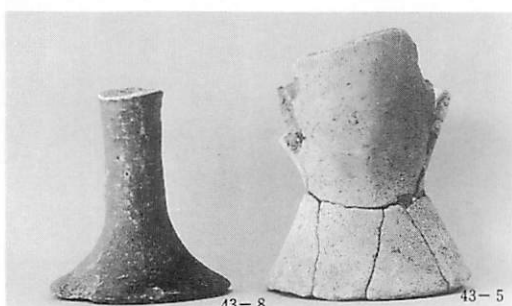
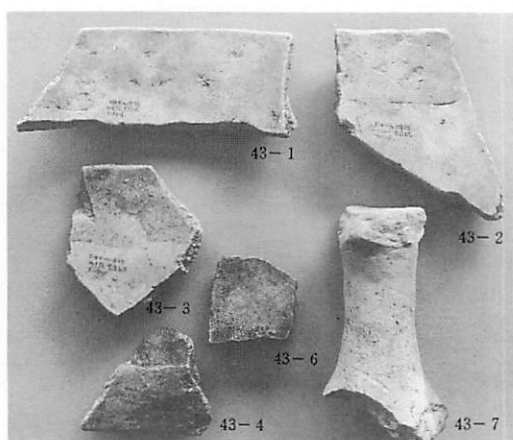
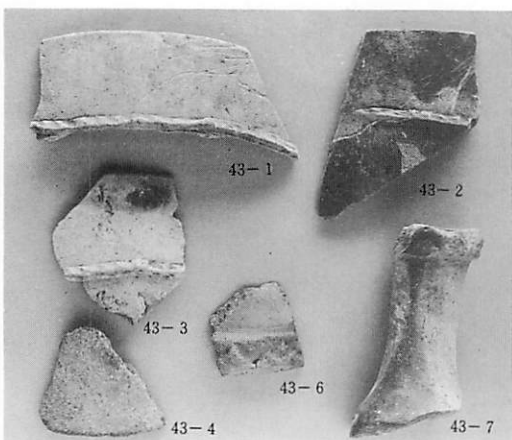
包含層出土遺物(2)

※数字は図番号に一致





包含層出土遺物(3) ※数字は図番号に一致

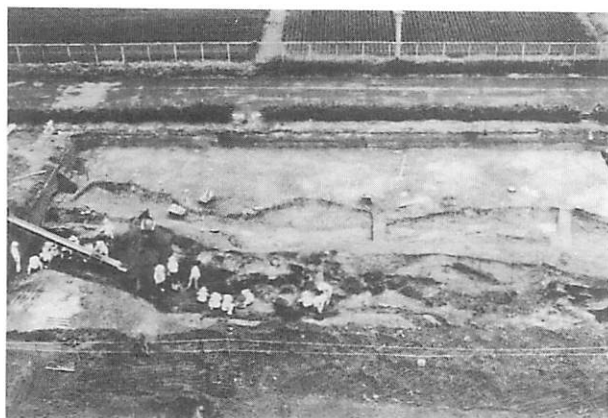


①	②
③	④
⑤	⑥
⑦	⑧

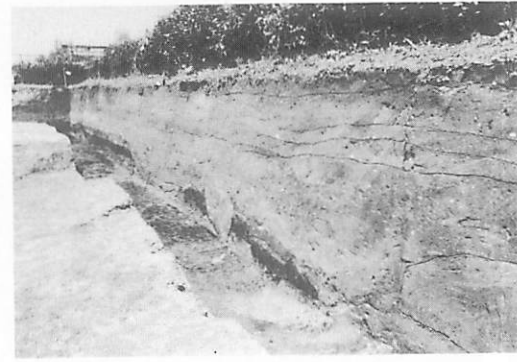
①～④包含層出土遺物(4)

⑤～⑧攪乱層出土及び採集遺物

※数字は図番号に一致

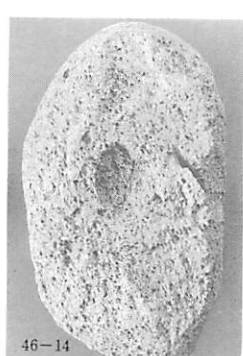
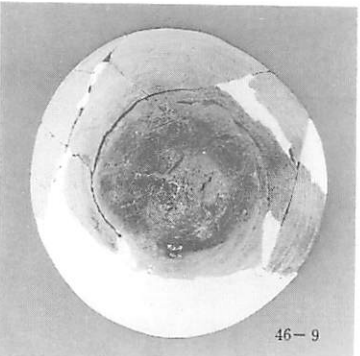
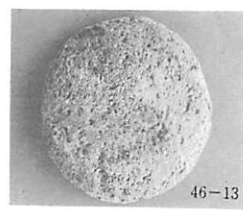
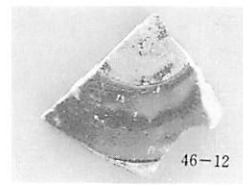
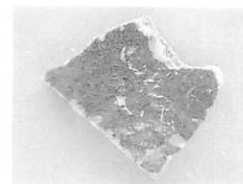
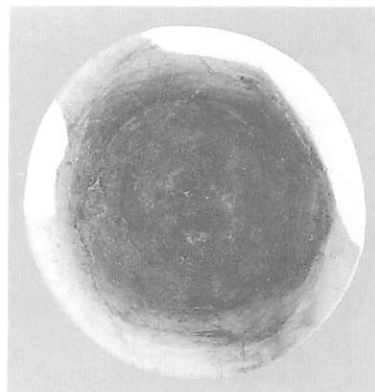
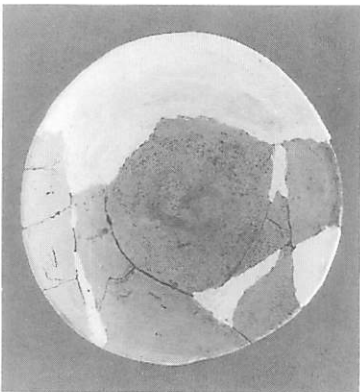
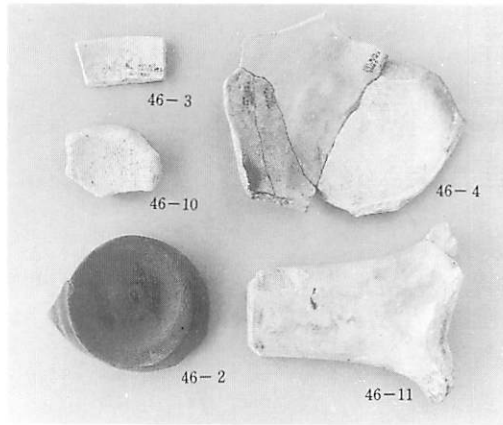
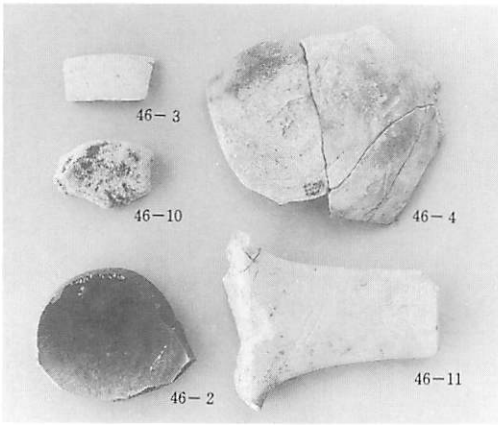
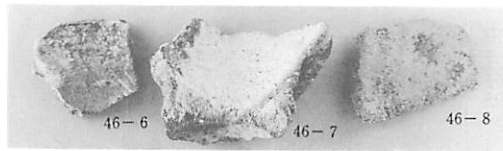
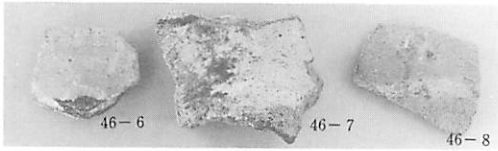


- |   |   |              |           |
|---|---|--------------|-----------|
| ① | ④ | ① 調査区全景(南から) | ④ 東南隅土層断面 |
| ② | ⑤ | ② 調査状況(南から)  | ⑤ 水田(西から) |
| ③ |   | ③ 調査状況(西から)  |           |



①	②
③	④
⑤	⑥

- ①② 完掘状況 (東から)
- ③④ 完掘状況 (西から)
- ⑤ 溝 2 断面
- ⑥ 調査区東壁 (南から)



出土遺物

※数字は図番号に一致

鹿兒島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅵ

1991年3月

編集発行 鹿兒島大学埋蔵文化財調査室  
鹿兒島市郡元一丁目21-24